

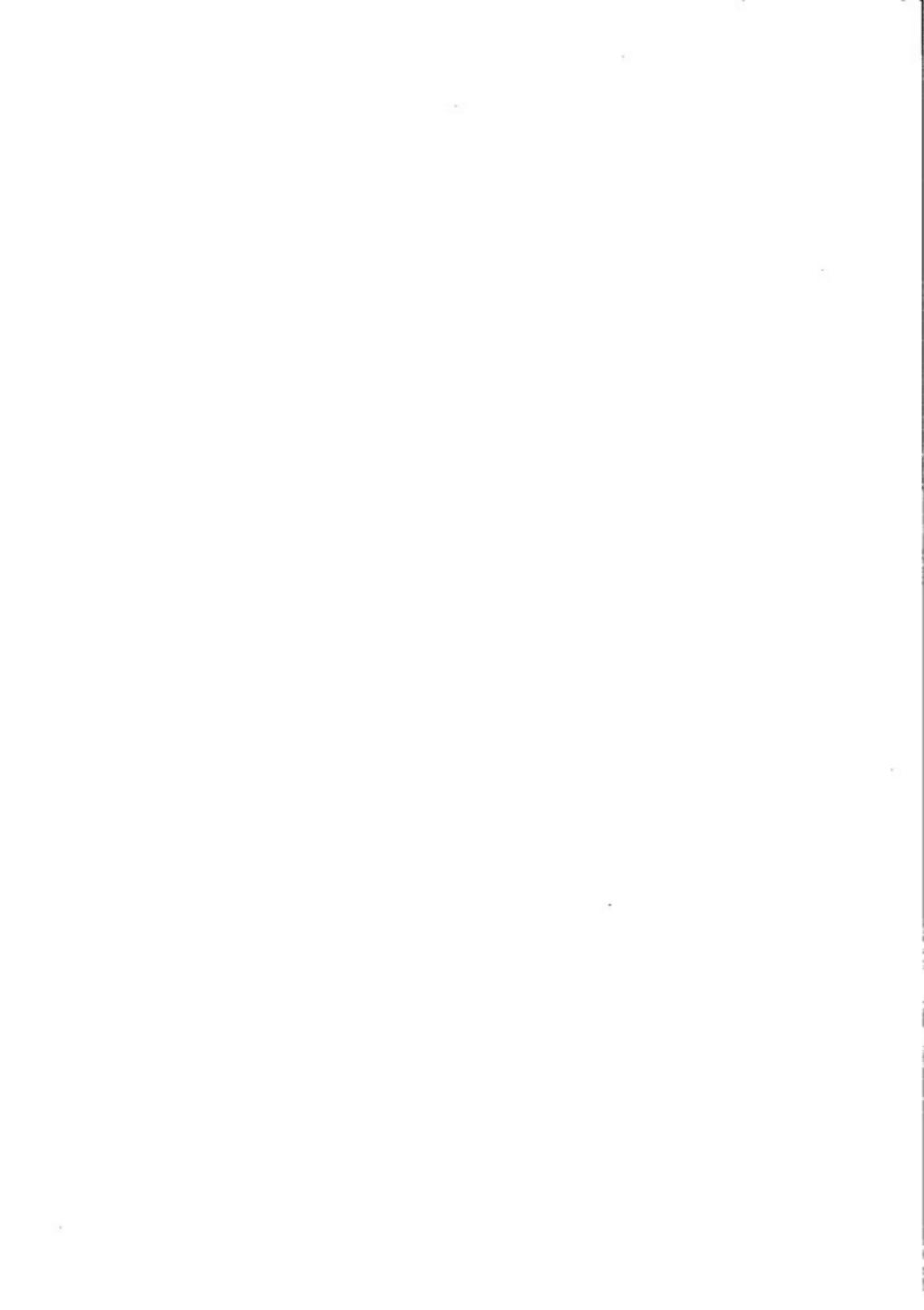
跡部遺跡発掘調査報告書

—大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸—



1991年

(財)八尾市文化財調査研究会



跡部遺跡発掘調査報告書

—大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸—

1991年

(財)八尾市文化財調査研究会



調査地周辺航空写真



銅鐸発見時



埋納墻內側完掘 (銅鐸 A 面)



埋納墻橫斷面



銅鐘取り上げ後埋納壙底部



銅鐘埋納状況復原



銅鐸 A 面



銅鑼面



銅鐸側面 A面 | B面



B面 | A面



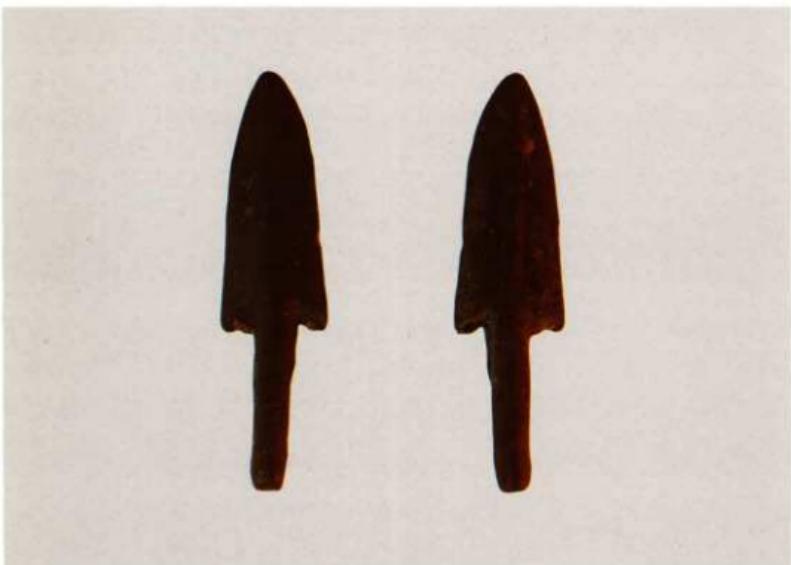
銅鐸A面細部



銅鐸B面細部



銅鐸內面A面／B面



銅鏃 S=2倍 A面 | B面



銅鑄 出土狀況

はしがき

八尾市の位置する河内平野は、古来より文化の栄えた土地として一般的に有名です。また、高安山西麓は高安古墳群として全国的にその名を知られているなど八尾市には多くの歴史遺産が残っています。

近年八尾市にも都市開発の波が押し寄せ、近代都市に変貌しつつあります。しかしながらこのままでは、地下に眠る埋蔵文化財の破壊につながります。そこで私どもでは、事業者の協力を得て、事前に緊急の発掘調査を行い記録保存するという次善の策により、かろうじて地下に眠る先人の生活の跡をわずかながらもたどることが可能になってきました。このように、私どもはつねに破壊と保存のはざまにたっていることを自覚し、厳しい気持ちで調査に臨まなければならぬと考えています。

このほど、平成元年度に行いました跡部遺跡の発掘調査の整理業務もようやく終了し、報告書としてまとめることができました。この発掘調査では、とくに「跡部遺跡発掘調査委員会」を設け、慎重に調査を行いましたが、銅鐸の埋納状態を詳しく調査できましたことは誠に幸いでした。この報告書の刊行により、今後の銅鐸研究の一助になるものと考えております。

最後になりましたが、跡部遺跡発掘調査委員会の委員の先生方には、長期にわたり大変ご苦労をおかけしました。また、ご協力・ご指導をいただきました先生ならびに関係各機関各位に対して心から感謝の意を表します。

平成3年3月31日

財団法人八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 孝

はじめに

(財)八尾市文化財調査研究会は、平成元年10月17日から、八尾市春日町1丁目45-1で、公共下水道工事に伴う事前発掘調査を実施していたところ、同月21日、古墳時代前期初頭の土壙内の土器片を取り上げている際、その下層で土器片とは別なものが「土ベラ」にあたり、これが銅鐸の錯であることが判明した。この事実を重視した当研究会と市教育委員会は、ただちに跡部遺跡発掘調査委員会を設け、銅鐸の発掘調査を慎重に行うための体制や諸準備を整え、とりあえず古墳時代前期初頭の遺構・遺物の発掘調査と銅鐸周辺の状況を精査するという二方向の調査を実施することにした。

周辺精査の結果、この古墳時代前期初頭の土壙は、弥生時代終末期の溝を切っており、またこの溝は銅鐸の上層を通るという層位関係が明らかになった。

さらに、銅鐸の埋納状況を調査するために、補助的な試掘溝を銅鐸に対して直角に入れたところ、前述の埋納壙の端で立ち上がる層を検出し、板か粘土枠のようなものに納められているようにみえた。なお、銅鐸は、流水紋銅鐸といわれるものである。

銅鐸を取り上げた後、さらに地層を精査したところ、銅鐸を埋納するための掘り形が一辺約1.3m（推定復元1.4m）の隅丸方形に検出された。これによって、先に埋納壙と呼んでいたのは埋納施設であることが判った。

このように、銅鐸が埋納された状態で発掘調査された例は、きわめて珍しいことである。

ここに、図面整理・遺物整理・写真撮影、銅鐸の科学的保存処理などが完了したので、当遺跡の概要について報告し、いささかなりと参考に供したいと存じます。

跡部遺跡発掘調査委員会

委員長	福島 孝	(財)八尾市文化財調査研究会	同	理事長
委員	辻合 喜代太郎	帝國女子大学名誉教授	タ	理事
	村川 行弘	大阪経済法科大学教授	タ	評議員
	安井 良三	八尾市立歴史民俗資料館長		
	川瀬 誠	大阪府教育委員会文化財保護課長	タ	理事
	松井 一雄	八尾市教育委員会社会教育部長	タ	評議員
	森田 康夫	八尾市教育委員会文化財室長		

例　　言

- 1) 本書は春日町1丁目45-1において実施した公共下水道工事に伴う跡部遺跡の発掘調査報告書である。
- 2) 調査は、八尾市下水道部から委託を受けて(財)八尾市文化財調査研究会が行った。
- 3) 調査期間は、現地調査が平成元年10月17日から同年11月30日まで、内業整理が同年12月1日から平成2年3月31日までである。
- 4) 現地調査に際しては、福田英人氏(大阪府教育委員会文化財保護課)による調査指導。銅鐸の保存などの科学的な処理については、奈良国立文化財研究所の協力を得、現地では山口誠治氏((財)大阪文化財センター)の技術指導を受けた。
- 5) 本書掲載の銅鐸の写真的うち、鳥取市高住宮ノ谷出土銅鐸・島根県邑智郡石見町中野字仮屋出土銅鐸は三木文雄氏、亀井遺跡出土銅鐸は(財)大阪文化財センター、その他は八尾市立歴史民俗資料館から提供をうけた。また、徳島市名東遺跡の銅鐸埋納塙平・断面図、岡山市高塚遺跡の銅鐸埋納塙平・断面図および出土銅鐸の写真は、「銅鐸講演会記録集」:(財)八尾市文化財調査研究会報告27から転載した。
- 6) 本書の執筆・編集は安井良三(八尾市立歴史民俗資料館館長)があたり、成海佳子((財)八尾市文化財調査研究会)が補佐した。
- 7) 本書には、川崎地質株式会社「跡部遺跡第5次調査における花粉分析(概報)」(第3章第2節)、山口誠治「跡部遺跡出土銅鐸のX線調査について」(第7章第6節)を掲載している。
- 8) 調査参加者は以下のとおりである。(五十音字順)
岡田清一、岡田聖一、櫻橋佐知子、徳谷尚子、中西明美、長野琢磨、成海佳子、西村公助、増田夏雄、松浦明美、宮崎寛子、村井俊子、山内千恵子、横山妙子
- 9) 調査、整理にあたっては多くの方々から有益な助言・協力を頂きました。ここに記して謝意を表します。

本文目次

第1章　遺跡の位置と周辺の遺跡.....	1
第2章　調査区と発掘調査の経過.....	5
第3章　遺跡の層序.....	9
第4章　遺構・遺物の検出状況.....	19
第5章　古墳時代の遺構.....	21
第6章　古墳時代の遺物.....	31
第7章　銅鐸と銅鐸埋納塙.....	66
第8章　むすび.....	89

卷頭カラー図版目次

- 卷頭図版 I 調査地周辺航空写真
銅鐸発見時
- 卷頭図版 II 埋納壙内側完掘(銅鐸A面)
埋納壙横断面
- 卷頭図版 III 銅鐸取り上げ後埋納壙底部
銅鐸埋納状況復原
- 卷頭図版 IV 銅鐸 A 面
- 卷頭図版 V 銅鐸 B 面
- 卷頭図版 VI 銅鐸側面 A面 | B面
B面 | A面
- 卷頭図版 VII 銅鐸細部
銅鐸内面 A面 / B面
- 卷頭図版 VIII 銅鎌
銅鎌出土状況

挿図目次

第1図 八尾市内銅鐸出土地	1
第2図 調査地周辺図	2
第3図 地図割	5
第4図 西壁土層図	(折込) 11・12
第5図 埋納壙裾部北側畦試料採取位置	13
第6図 銅鐸内側充填土試料採取位置	13
第7図 花粉分析処理フロー	13
第8図 西側壁面の花粉ダイヤグラム	18
第9図 埋納壙裾部北側畦の花粉ダイヤグラム	18
第10図 調査区平面図	19
第11図 調査区平面図(上面)	21
第12図 溝を伴う遺構(上面)平面図、土壤(2)平断面図	23

第13図	溝を伴う遺構（下面）平面図	25
第14図	北部の検出遺構平断面図	27
第15図	溝を伴う遺構（上面、下面）平断面図	（折込）29・30
第16図	土壤（1）出土遺物実測図	33
第17図	溝を伴う遺構出土遺物実測図－1	34
第18図	溝を伴う遺構出土遺物実測図－2	36
第19図	溝を伴う遺構（南東の集積）出土遺物実測図	39
第20図	土壤（3）、土壤（4）、溝状遺構（2）出土遺物実測図	42
第21図	落ち込み出土遺物実測図	44
第22図	VI層出土遺物実測図－1	46
第23図	VI層出土遺物実測図－2	50
第24図	VI層出土遺物実測図－3	52
第25図	VI層出土遺物実測図－4	56
第26図	VI層出土遺物実測図－5	60
第27図	VI層出土遺物実測図－6	61
第28図	VII層、VIII層、IX層、X層、Ⅺ層出土遺物実測図	62
第29図	石器未成品、剥片実測図	65
第30図	調査区平面図（下層）	66
第31図	銅鐸埋納壙平断面図	68
第32図	名東遺跡の銅鐸埋納壙	69
第33図	銅鐸立面	（折込）71・72
第34図	銅鐸舞面（B面／A面）	73
第35図	銅鐸拓本（外面）	（折込）75・76
第36図	銅鐸拓本（内面）	（折込）77・78
第37図	銅鐸模式図	79
第38図	溝状遺構（3）、銅鐸埋納壙出土遺物実測図	83
第39図	高塚遺跡の銅鐸埋納壙	88

写真目次

写真1	龜井遺跡出土銅鐸	3
写真2	恩智垣内山出土銅鐸	4
写真3	恩智都塙山出土銅鐸	4
写真4	銅鐸発見時	6
写真5	レーダー探査	6
写真6	現場にて打ち合せ	6
写真7	銅鐸出土状況実測準備	7
写真8	現地説明会	7
写真9	銅鐸取り上げ	7
写真10	土壤サンプル採取	7
写真11	埋納壙切り取り作業	8
写真12	保存処理の終った銅鐸埋納壙	8
写真13	京都府与謝郡加悦町明石出土鐸	80
写真14	滋賀県野洲郡野洲町大岩山10号鐸	80
写真15	和歌山市有本出土鐸	81
写真16	伝高知県香美郡出土鐸	81
写真17	愛知県宝飯郡御津町広石出土鐸	82
写真18	鳥取市高住宮ノ谷出土鐸	82
写真19	島根県邑智郡石見町中野字仮屋出土鐸	82
写真20	銅鑼	83
写真21	高塚遺跡出土銅鐸	88

図版目次

- 図版1 調査地周辺垂直写真 (S=1/100)
- 図版2 調査区北部上面（西から）
調査区北部下面（西から）
- 図版3 土壙(1)遺物出土状況（北西から）
土壙(3)遺物出土状況（北西から）
- 図版4 溝を伴う遺構（上面）（北西から）
同上 遺物出土状況（北西から）
- 図版5 土壙(4)、銅鐸出土状況（西から）
同上 （東から）
- 図版6 銅鐸埋納壕内側掘削（南西から）
銅鐸埋納壕内側完掘（北東から）
- 図版7 銅鐸埋納壕縦断面（南東部—鉢側）
銅鐸埋納壕縦断面（北西部—堀側）
- 図版8 銅鐸埋納壕完掘（北西—堀側から）
銅鐸埋納壕内銅鐸出土状況
- 図版9 銅鐸埋納状況復元（南東から）
銅鐸埋納状況復元（北西から）
- 図版10 銅鐸埋納状況復元（北から）
銅鐸埋納状況復元（南から）
- 図版11 銅鐸埋納壕横断面北東側
銅鐸埋納壕横断面南西側
- 図版12 土壙(1)出土遺物
- 図版13 溝を伴う遺構（上面）出土遺物-1
- 図版14 溝を伴う遺構（上面）出土遺物-2
- 図版15 溝を伴う遺構（上面）出土遺物-3
- 図版16 土壙(3、4)、溝状遺構(2)出土遺物
- 図版17 落ち込み、VI層出土遺物-1
- 図版18 VI層出土遺物-2
- 図版19 VI層出土遺物-3

- 図版20 VI層出土遺物－4
- 図版21 VI層出土遺物－5、VII層、IX層、X層、銅鐸埋納塚出土遺物
- 図版22 銅鐸（A面）
- 図版23 銅鐸（B面）
- 図版24 銅鐸側面（A面／B面）
銅鐸側面（B面／A面）
- 図版25 銅鐸舞面（A面／B面）
銅鐸内面（B面／A面）
- 図版26 銅鐸A面鉢
銅鐸A面鉢
- 図版27 銅鐸B面鉢
銅鐸B面鉢
- 図版28 X線透過写真（A面）
- 図版29 X線透過写真（B面）
- 図版30 銅鐸鱗細部（A面／B面）
- 図版31 銅鐸鱗細部（B面／A面）
- 図版32 銅鐸細部（内面、補鑄部分）

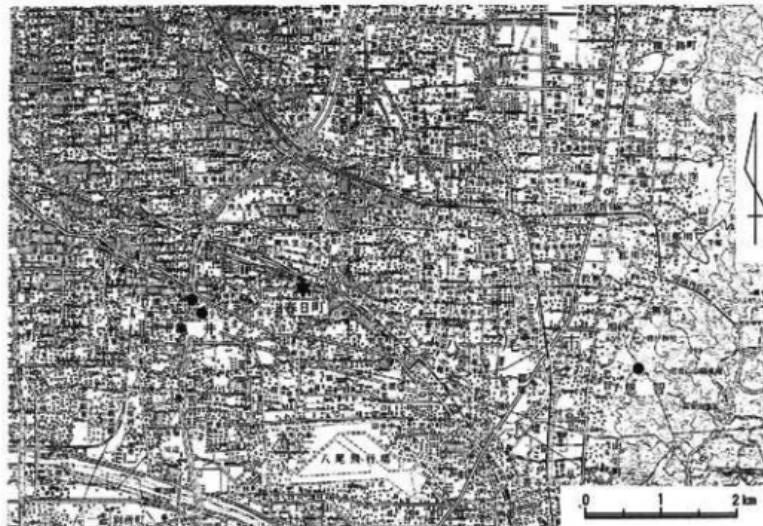
第1章 遺跡の位置と周辺の遺跡

大阪府八尾市春日町1丁目45-1における公共下水道工事現場は、JR大和路線八尾駅の西方約500mのところにある。(第1図)

そこは、八尾市々道竜華45号線春日町1丁目の信号を北へ、旧国鉄竜華操車場東側地下道へ通する道路のコーナーに位置する。(第2図)

この現場はシールド工法による下水道を掘るための立坑であり、L字形に矢板が打ち込まれ、発掘区の面積もわずか85m²である。現地表下2mまで機械掘削することにした。それは、この地域が生駒山地と羽曳野丘陵・上町台地との間にはさまれた河内平野であり、原大和川流域にあたり、平地の大部分は砂層で形成され、平地部における周知の古代遺跡は、現地表下1.5~2m付近で検出されているためである。

八尾市内には多くの遺跡が分布しているが、全国的に有名な恩智遺跡、亀井遺跡、久宝寺遺跡、山賀遺跡、八尾南遺跡、高安山古墳群などが含まれている。ここではまず参考のため、当遺跡周辺の低地遺跡の調査例を年代順に記してみよう。



第1図 八尾市内銅鏡出土地

昭和53年に本遺跡の北、100m余の春日町1丁目で、旧国鉄職員龍華寮が建設されたとき、弥生時代前期の壺や鎌倉時代の瓦片（宝積寺跡か？）が検出されたと伝えられているが、実態は明らかでない。

昭和56年11月、本遺跡の西、約100m余の春日町1丁目57のマンション建設予定地事前調査では、弥生時代前期・中期。古墳時代前期の遺物及び墓状構造が確認されている。(①)

昭和57年10月、本遺跡の西、約400m余の跡部本町1丁目3では、深さ2.1mの層で、古墳時代前期の遺物が検出された。この辺は旧大和川の堤防ではないかと推測されている。(②)

昭和59年3月、本遺跡の南西約600m余の跡部本町2丁目46では、井戸2基・土壙などが検出され、鎌倉時代の瓦器碗などが出土した。この辺は旧大和川の一支流域内と推定される。(③)

同年5月、同町2丁目44-1、同45・46-1では、平安時代～室町時代の瓦器類が出土している。この2か所は旧大和川流域であり、平安時代以後、生活の場になったことが推定される。(④)

昭和63年10月、本遺跡の西、約450m余の跡部本町1丁目4-1、4-2では、古墳時代前期の土器が確認され、その下層では、弥生時代末の土器片が検出された。(⑤)



第2図 調査地周辺図

表1 周辺の発掘調査一覧表

番号	調査主体	調査地	調査期間	文献	発行
①	八尾市教育委員会	春日町1-57	56年11/9~11/19	八尾市埋蔵文化財発掘調査報告書 1980・1981年度;(財)報告2	1983. 3

②	当調査研究会(第1次)	跡部本町1-3	57年10/1~10/5	昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査—その結果の概要	1983. 3
③	同 上(第2次)	跡部本町2-46	59年3/1~3/31	昭和58年度事業概要報告：(財)報告5	1984. 3
④	八尾市教育委員会	跡部本町2-44他	59年5/10~5/22	八尾市内遺跡昭和59年度発掘調査報告書：市教育委員会報告11	1985. 3
⑤	当調査研究会(第4次)	跡部本町1-4	53年10/1~10/22	八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度：(財)報告25	1989. 12

以上が本遺跡周辺の現在までの調査状況である。これによって推察できるように、旧大和川流域では弥生時代の遺物は検出されていないが、それでない地域、とくに春日町周辺では弥生時代の遺物が検出されているということである。いわゆる春日町周辺は、弥生時代の原大和川の砂州か原堤防上かと考えられる。(表1)

ついで当遺跡出土の銅鐸に関連のある遺跡を紹介しよう。当遺跡から西へ約1kmの地区には先に記した亀井遺跡がある。亀井遺跡は、八尾市の南西部にあたる「亀井町・南亀井町」一帯にわたっている。この地区は、八尾市の南部を南東から北西方向に流れる平野川流域にあたり北に久宝寺遺跡、西には竹淵遺跡などが接している。(第1図)

さて、亀井遺跡は(財)大阪文化財センターが、近畿自動車道建設に伴う事前発掘調査を行ったところであり、弥生時代前期から後期にかけての複合遺跡である。とくに弥生時代中期から後期にかけては、大集落を形成していたようで、この地域での中心的な役割を果した集落であったことがわかっている。しかもこの遺跡から、銅鐸の鋳片と鉢片が検出されたことが注目される。近年、銅鐸の破片が出土する例が若干報告されているが、破片の出土と完形銅鐸の出土とは意味が異なるということを考えるべきである。もっとも、亀井遺跡では破片のみで完形品が発見されていないが、広範囲の遺跡であるため、完形品の出土も可能性がある。今後に期待したい。(写真1)

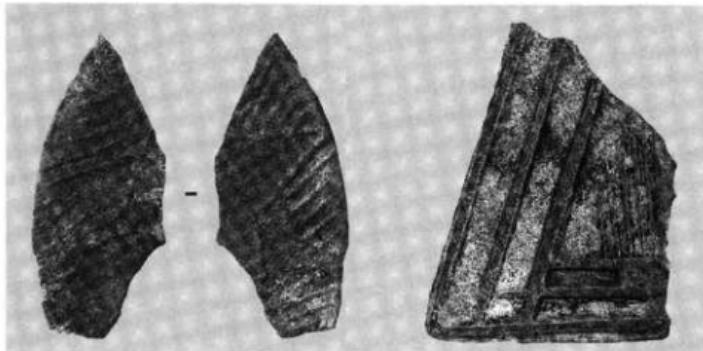


写真1 亀井遺跡出土銅鐸：提供財大阪文化財センター

八尾市内では、すでに大正10年(1921年)、恩智の垣内山で流水紋銅鐸が発見され、現在東京国立博物館の所蔵となっている。(第1図)

この銅鐸は、鐸全高44.5cm、鉢高12cm、鐸身紋様は横帯流水紋であるが、胴の上部と中部に複合直線紋帶があって、流水紋を上下に二分している。これは春日町出土のものと異なり、二区流水紋銅鐸といわれるものである。

なお、A面の下方鋸歯紋帶の下辺に魚が4匹泳いでいる様子を、B面には鹿が3頭1列に並んでいる姿を描いている。(写真2)

この垣内山の向側の都塚山からも、昭和24年(1949年)に袈裟襟紋銅鐸が発見された。

その間は約50m余である。この銅鐸は、現在大阪府文化財に指定されている。鐸全高39cm、鉢高10cm。鐸身の紋様は六区袈裟襟紋と呼ばれるものである。(写真3)

このように、八尾市内では、すでに完形の銅鐸2例と破片2点が出土していたが、今回春日町で出土した銅鐸によって、完形品が3例となった。ここで注意すべきことは、恩智出土のものは山腹であるのに対して、春日町出土のもの、龜井出土の破片は現地表下約2.5mからである。この相異は何を物語るのであろうか。直ちにはわからないが、低湿地で埋納されたものと山腹などに埋納されたものとは明らかに意味が異なるであろう。また、先に述べたよう、最近破片の出土例があるが、これらの破片の出土と完形品の出土とは意義が異なることを考えるべきであり、これらは今後の研究課題のひとつである。



写真2 恩智垣内山出土銅鐸



写真3 恩智都塚山出土銅鐸

第2章 調査区と発掘調査の経過

調査区は前に述べたように、シールド工法による公共下水道を掘るために立坑であり、L字状に鋼鉄矢板が打ち込んである。(第3図)

南北11.4m、東西10.4mを基本とし、L字の北辺幅6.9m、そこから南へ5.4m、そして東へ3.5m、東端南北の長さは6mである。調査区の南側、南北5.5mは道路下になり鋼鉄補強板が敷かれており、照明をあてながらの発掘となった。

実際の発掘区は、この矢板から約1m内側の側溝内となるので、南北8.8m、東西8.1mを基としながら、北辺幅4.5m、そこから南へ4.5m、そして東へ3.6m、東端南北の長さは4.7mとなる。全発掘面積は約70m²弱である。

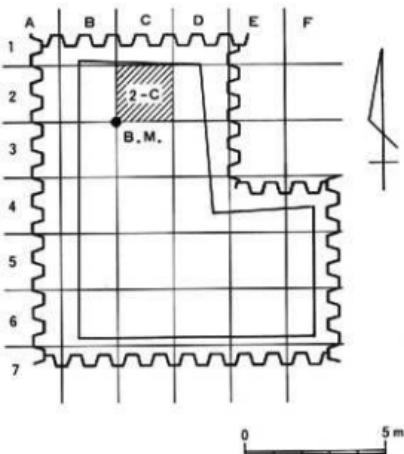
この鋼鉄矢板内を現地表下2m (T.P.+7.4m) まで機械掘りし、平成元年10月17日より発掘を開始した。機械掘りの後の整地作業をはじめたが、南側の道路下の部分で、はやくも古墳時代の土器片があらわれたので、まず土器片があらわれた層を全面的に整理することにした。整理が進むと、土器以外に小ピット状の痕跡や溝状らしきもの、土壠の痕跡があらわれた。

早速、L字形の発掘区を2m間隔で区画することにした。仮基点(B.M.)を設定して区画したのが第3図である。南北の区画記号は、

北から1、2、3、4、5、6、7とし、東西の記号を西からA、B、C、D、E、Fとした。以下、この記号の組み合わせ、たとえば「2-C」、あるいは「4-D」などと記してその位置を説明するので、参考していただきたい。

10月24日、北区域の土壠(4)の整理、実測図作成が終り、古墳時代前期初頭の土器片を取り上げていたとき、土器以外のものが「土べら」にあたり、注意を払いながら周りの土を取り除いてみると、銅鐸の鱗が直立していることが判明した。鱗の上面は現地表下2.5m (T.P.+6.7~6.75m)

付近である。この事実を重視した(財)八尾市文化財調査研究会と市教育委員会は、た



第3図 地区割

だちに跡部遺跡発掘調査委員会を設け、銅鐸の発掘を行うための体制と諸準備を整えた。その上で、古墳時代前期初頭の遺構・遺物の発掘と銅鐸周辺の状況を精査するという、同時に二方向の調査を行うことにした。とくに、10月28日までであった発掘調査期間を11月末日まで延長し、慎重に銅鐸の埋納状況を検出することにした。(第10図)

10月28日、古墳時代前期初頭の土壙(4)が弥生時代終末期の溝状遺構(2)を切っており、この溝は銅鐸の上面を通るという層位関係が明らかとなった。一方、南側の道路下では、北西方向に長軸を持つ溝状の長方形の区画を検出し、区画内に多数の小穴を検出した。また、北西から南東方向の柱(セクション)の東側で地面を固めた部分が認められた。これが住居址になるか否かは直ちに明らかではないが、何かの施設の一部のようである。また、南東部で集積された古墳時代前期の土器群を検出した。この地区の精査を続行することにした。

11月7日、発掘区内に複数の銅鐸があるか否かを知るため、応用地質株式会社へ調査を依頼し、電磁波反射法による探査を実施した。銅鐸埋納地点以外で一か所反応があったが、これは発掘の結果、土壙(2)で、銅鐸ではなかった。(写真5)一方、遺跡の航空写真撮影を行った。また、銅鐸の科学的処理や遺構の切り取り保存については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室沢田正昭室長、肥塚隆保技官両氏から、現場で指示を受けた。

11月8日、銅鐸埋納場(後に埋納施設とわかる)の輪郭が明らかになった。なお、埋納場内の土質は、周辺の土質と違うということが判明した。銅鐸は鍔を上下に直立した状態で、鍔を南東方向にむけて埋納されていることが明らかとなった。銅鐸が埋納されたまま調査された例が少ないため、発掘調査中ではあるが、できる限り多くの人々にその状況を見ていただくように、報道機関へ発表すると



写真4 銅鐸発見時



写真5 レーダー探査



写真6 現場にて打ち合わせ

ともに、現地説明会を開催することにした。

11月10日、報道機関へ発表。

11月11～12日、現地説明会を開催したところ、約1500名が来場された。

11月13日、銅鐸の埋納状況を精査するため補助的な試掘溝を銅鐸に対して直角に入れたところ、前述の埋納壙の端で立ち上がる層を検出し、板か粘土枠のようなものに納められているよう見えた。

さらに、補助トレンチを入れて埋納状態を究明しようとしたが、銅鐸を埋納したまでは地層の分離は不可能であると判断し、銅鐸を取り上げてから地層を究明することとし、銅鐸の取り上げの準備をはじめた。同時に川崎地質株式会社に土壤分析調査を依頼した。

11月18日、銅鐸を取り上げたが、鐸身内の土は土壤分析のため、詰まったまま取り上げた。同時に土壤サンプルの採取を実施した。銅鐸を取り上げた後、埋納壙の形態を検出すための補助トレンチを入れることにした。

一方、発掘区の南側の溝状の区画内で、やや規模の小さい同様の溝状の遺構を検出した。層位的には前述の溝状遺構の一層下にある。この溝状遺構は意図的にある空間を区画したものであることは事実であるが、それが何かということは連続できないのが実態である。また、先述の電磁波探査のとき反応した箇所では、炭混じり砂礫層を詰め込んだ土壤(2)を検出した。梢円形の土壤に砂を入れ固められていたが、左右から合掌形に杭状のものが8か所検出された。

11月24日、銅鐸を取り上げた後、別の補助



写真7 銅鐸出土状況実測準備



写真8 現地説明会



写真9 銅鐸取り上げ



写真10 土壌サンプル採取

トレチを入れて、埋納壙の状況を精査していたところ、新たに掘り形が検出され、それを追求することにした。一辺約1.3m（復原1.4m）の方形の土壙のようである。埋納壙と推定。

11月26日、埋納壙の平面形と深さが判明した。基本的には一辺1.4mの隅丸方形で、深さは40～50cmであるが、銅鐸1点が埋納壙内で出土したため、その出土箇所を保持するため掘り残しをしたので、図面ではやや長方形になっている。

この埋納壙の検出によって、これまで「埋納壙」と考えていたものは「埋納施設」であると考える方が妥当であるという結論に達した。さらに精査をしたところ、まず一辺1.4mの隅丸方形の埋納壙が南東方向に掘られ、南東方向の中央部に粘土床がつくられ、そこに銅鐸が緒を直立して鉢を南東方向に向けて丁重に埋納されたことが判った。

詳しくは後章で述べるが、このように銅鐸の埋納の仕方が判明したのは、今後の銅鐸研究の参考になるものといえよう。それゆえ、遺構を切り取って保存することにした。

11月29日、株式会社近畿ウレタン工事に依頼して、遺構の切り取りを行う。

11月30日、遺構切り取り後、最終的な点検を行い、発掘調査を終了した。（写真11・12）

12月以後は、図面整理、遺物整理を行う。

銅鐸については、国立奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室沢田正昭室長の指導を得て、化学・科学的な処置を施すこととした。なお、銅鐸内の土について土質調査をしたところ、遺構周辺の土ではないことが判明した。これによって、埋納施設内と同様、鐸身内には意図的に土が詰められ、埋納されたことがわかった。



写真11 埋納壙切り取り作業



写真12 保存処理の終った銅鐸埋納壙

第3章 遺跡の層序

第1節 基本層序

八尾市春日町周辺の田地の表土は、市道上面より約60cm低いのが通例である。したがって、今回のように、公共下水道工事のための立坑を設定するためには、関係区域を道路上面まで埋め立てを行い、あらためて、工事区に鋼鉄矢板を打ち込むのである。したがって、調査地の現地表面は埋め立て層であるが、東京湾海拔(T.P.) +9.4mを指し、埋め立て層の厚さは約60cmである。この埋め立て層上面から下約2mを機械掘削することにした。しかも、調査地の周囲には鋼鉄矢板が打ち込まれているので、第Ⅰ層の旧耕土から下の状況が判らなくなるので、一部で柱状に層位を確認することにした。ただし、前章で述べたように、調査地の南側は道路下になっており、層序を確認するのが困難なため、基本層序は、西壁に求めざるをえないのが現状であった。柱状層序によれば、第Ⅰ層から第V層上部までが機械掘削されたことになる。

第Ⅰ層は旧耕土層で、調査前まで耕作されていた。層厚は約20cmである。上面の標高はT.P.+8.8mを測る。

第Ⅱ層は茶色シルト混じり粘土層で、層厚は約16cm。

第Ⅲ層は茶褐色細砂混じり粘土層で、層厚は約34cm。

第Ⅳ層は淡茶色粘土層で、層厚は約36cm。

第V層は暗緑灰色(10G Y4/1「新版・標準土色帖」による)粘土層で、層厚は約50cmであるが、矢板の関係上、西壁面全体にみられる層厚は約10cmである。この層では、古墳時代中期のものと思われる土器片が1点検出されている。

第VI層は灰色(10Y4/1)細砂混じり粘土層で、層厚は20~30cmで、中央部が薄く、北西・南西部が厚い。この層は、粘性がひじょうに強い。また、この層は、弥生時代後期から古墳時代前期(布留式期)の土器片を多量に包含している。

第VII層は褐色(10YR4/1)細砂混じり粘土層で、層厚は0~20cmで、北西壁では落ち込みの溝になるので見られない。この層では、第VI層と同様弥生時代後期から古墳時代前期(布留式期)の土器片を少量包含している。

第VIII層は灰色(5Y4/1)シルト混じり粘土層で、層厚は0~10cmである。西壁の北西部ではこの層以下Ⅶ層までが古墳時代前期(布留式期)の第VII層からの落ち込みで欠損している。この層の上面で、弥生時代終末期から布留式期の遺構すなわち溝状遺構(1)、(2)、土壤(3)、(4)、溝を伴う遺構(上面)、(下面)と土壤(2)を検出した。この層の上面の標高はT.P.

+6.85～7.0mで、南東部と北西部が低くなっている。層中全面からは、弥生時代後期の土器の細片が少量出土している。

第IX層は灰色～緑灰色（10G Y5/1）シルト～細砂混じり粘土層で、層厚は0～15cmである。この層の上面で、銅鐸埋納塙および溝状遺構（3）を検出した。上面の標高はT.P.+6.75～6.9mである。銅鐸埋納塙周辺が調査地内ではもっとも高いことがわかる。

第X層は暗灰色（10G Y5/1）細砂混じり粘土層で、層厚は0～30cmである。弥生時代前期新段階から中期前半（II様式）の土器片をわずかに含んでいる。

第XI層は緑灰色（5G5/1）シルト混じり粘土層で、層厚は0～15cmで、弥生時代前期新段階の土器片をごく少量含んでいる。

第XII層は暗青灰色（5B4/1）細砂混じり粘土層で、層厚は30～50cmで、第XI層と同じく少量の土器片を含んでいる。

第XIII層は暗緑灰色（5G3/1）シルト混じり粘土層で、層厚は10～40cmである。

第XIV層は暗緑灰色（5G3/1）シルト質粘土層で、層厚は0～20cmである。

第XV層は暗灰色（N3/）粗砂層で、層厚は10cm以上である。

このうち、第XIV層以下では、遺物が検出されなかった。

以上が今回の調査地の層序の基本的概略であるが、調査に関連して注目された層は、第XIII層と第XIV層である。

第2節 跡部遺跡第5次調査における花粉分析（概報）

川崎地質株式会社

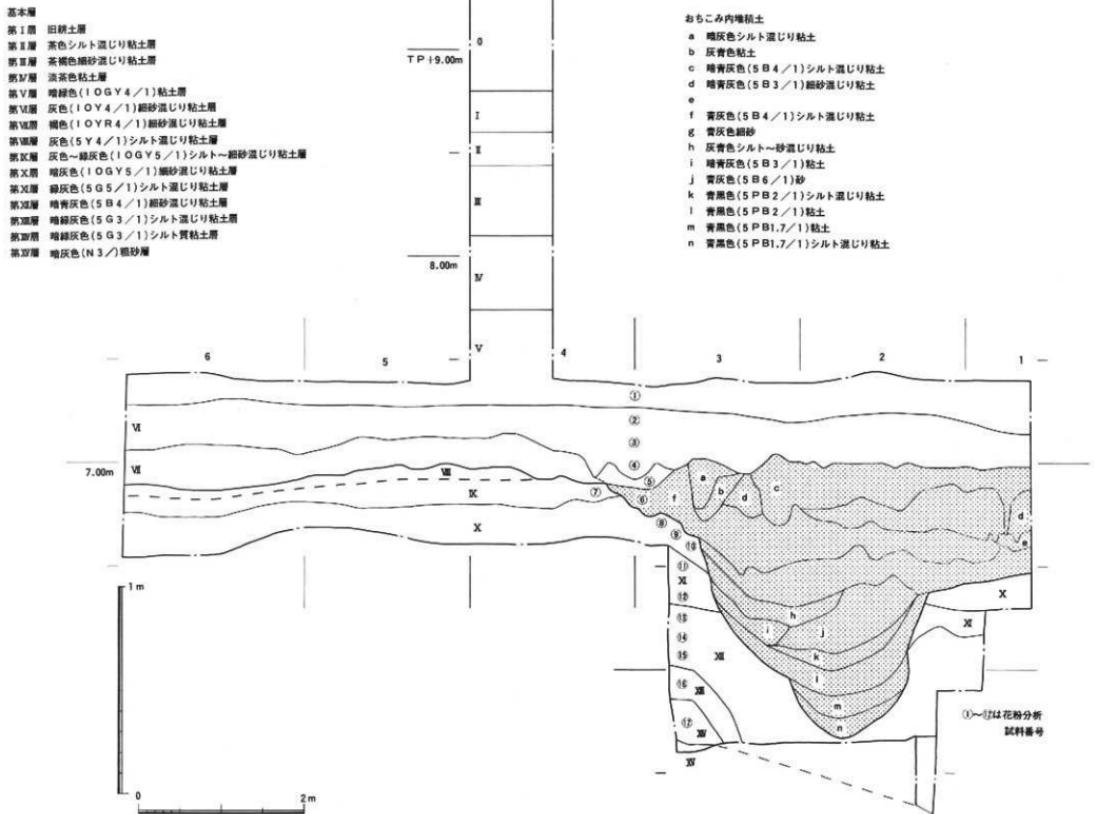
はじめに

本概報は、川崎地質株式会社大阪支店が財団法人八尾市文化財調査研究会から花粉分析を委託され、実施・報告したものである。

跡部遺跡は八尾市跡部町～春日町周辺に広がる遺跡である。本報告では春日町1丁目45-1での発掘調査に伴って露出した西側壁面、銅鐸埋納塙裾部畦上段、および銅鐸内側充填土より採取した試料を対象として花粉分析を行い、銅鐸埋納時の周辺の植生復元や、銅鐸の埋納の過程の推定などを知る目的として行ったものである。

第1項 試料について

西側壁面の17試料、埋納塙裾部北側畦の6試料、銅鐸内側充填土の1試料の合計24試料について分析を行った。このうち西側壁面および埋納塙裾部北側畦のうち地山部分については川崎地質株式会社が試料採取を行った。埋納塙裾部北側畦上段の7試料は事前に財団法人八尾市文

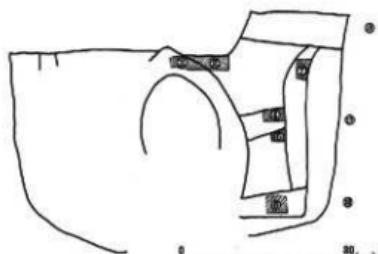


第4図 西壁土層図

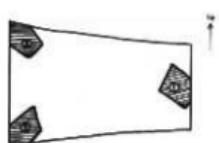
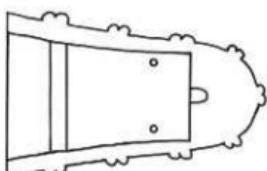
化財調査研究会によりブロックサンプリングなされた試料から川崎地質株式会社が採取した。銅鉢内側充填土の1試料は財団法人八尾市文化財調査研究会により試料採取が行われた。各々の地点での試料採取位置は第4図～第6図に示す通りである。

第2項 花粉分析方法

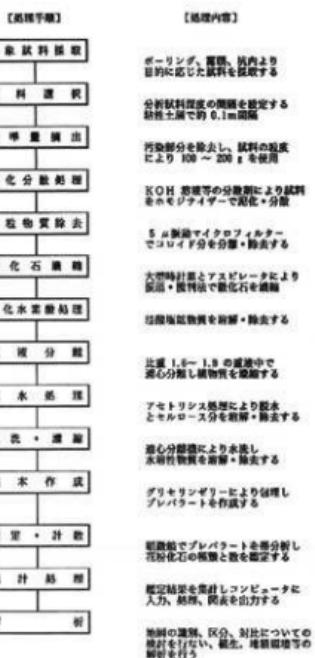
分析処理の手順は第7図に示す分析フローのとおりである。5ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている花粉分析を同定する際にはプレパラートを光学顕微鏡(400～1000倍)で観察した。また、帯分析し、木本花粉総数で通常100個から250個の検定、計数を行い、同時に検出される草本花粉胞子についても検定、計数を行った。



第5図 埋納壺埋部北側畦試料採取位置



第6図 銅鉢内側充填土試料採取位置



第7図 花粉分析処理フロー

第3項 花粉分析結果

花粉分析の結果を、第8図、第9図の花粉ダイヤグラムに示す。花粉ダイヤグラムは計数した木本花粉を基數にし、百分率で表した。本来花粉ダイヤグラムで結果を示す際には、統計学の立場から木本花粉検定数100以上の試料についてのみ示すが、今回の分析結果では、全ての試料で花粉含有量が少ないため、木本花粉検定数が10以上の試料について花粉ダイヤグラムで表した。また10に満たない試料では出現した花粉化石の種類を*印で示した。

また、銅鐸内側充填土の試料は銅鐸埋納壙部北側壁の花粉ダイヤグラム中に試料No.20として示した。

各々の地点での花粉組成の特徴は以下に示す通りである。

(1) 西側壁面

全ての試料で花粉の含有量が少なく、試料No.3 (VI層)、8 (X層)、9 (X層)、16 (加層)、17 (加層)は木本花粉を11個以上検出することができなかった。また、試料No.2 (VI層)、4 (VI層)、5 (Ⅷ層)、6 (落ち込みf層)、10 (X層)、11 (XI層)、14 (加層)は木本花粉を20~30個体程度、試料No.7 (IX層)、12 (XI層)、13 (加層)、15 (加層)は木本花粉を50個体程度しか検出することができず、ダイヤグラムには示したが統計学的に信頼性の低いデータである。

試料No.1ではアカガシ亜属が43%と高い出現率を示す。草本花粉ではカヤツリグサ科、イネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)*、ヨモギ属が10%以上出現する。試料No.2ではコウヤマキ属が60%と高い出現率を示す。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科が200%程度、ヨモギ属が95%の高い出現率を示す。試料No.4、5、6ではアカガシ亜属が25%程度で優占し、二葉マツ類、コウヤマキ属、ハンノキ属、シイノキ属、コナラ亜属を伴う。草本花粉では、イネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が高い出現率で安定して出現する。アブラナ科、ツリフネソウ属、キク亜科は低率で出現するが、20%程度の出現率を示す資料もある。試料No.7ではスギ科が40%程度の出現率を示し、二葉松類、ツガ類シイノキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属などが10%程度出現する。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が50%程度の出現率を示す。試料No.10では、コウヤマキ属が40%、アカガシ亜属が30%程度と高い出現率を示す。草本花粉ではカヤツリグサ科、イネ科(40ミクロン以下)などが特徴的に検出された。試料No.11では、アカガシ亜属、コナラ亜属が30%程度の高い出現率を示す。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)、ヨモギ属が比較的効率で出現する。試料No.12~14ではアカガシ亜属が50%程度の高い出現率を示し、コウヤマキ属、スギ属が10%程度で安定して出現する。草本花粉では、ヨモギ属が100%程度の出現率を示す。また試料No.12ではイネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科が40%程度の高い出現率を示し、試料No.13、14ではイネ科(40ミクロン以

下) が50~65%の出現率を示す。試料No.15ではスギ属が40%程度の高い出現率を示し、コウヤマキ属、アカガシ亜属、ムクノキ属-エノキ属が10~20%程度出現する。草本花粉ではヨモギ属が56%の高い出現率を示し、イネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)などを作り。

(2) 埋納壙部北側壁、銅鐸内側充填土 (第31図)

ほとんどの試料で花粉の含有量が少なく、試料No.6 (①層)、7 (④層) では木本花粉を11固体以上検出することができなかった。このため、ダイヤグラム中では*印で出現した種類のみを示した。また、試料No.2 (⑥層) では木本花粉を20~30個体程度、試料No.3 (②層)、4 (⑤層)、5 (③層) は木本花粉を70個体程度しか検出することができず、ダイヤグラムには示したが統計学的に信頼性の低いデータである。

試料全体でアカガシ亜属が40%の高い出現率を示し、二葉松類、コウヤマキ属、スギ属、ムクノキ属-エノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属等が出現する。試料No.2では木本花粉に対して草本花粉の割合が高い。トウヒ属が低率で出現し、ムクノキ-エノキ属を欠く。また、草本花粉のイネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)、アブラナ科、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が高い出現率を示す。試料No.3、4では、草本花粉でイネ科(40ミクロン以上)、ヨモギ属が高い出現率を示す。試料No.5では、草本花粉でアブラナ科が高い出現率を示す。試料No.16 (IX層) ではムクノキ属-エノキ属を欠き、草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が高い出現率を示す。試料No.20 (銅鐸内側充填土) では木本花粉と草本花粉は同程度の出現率を示す。木本花粉ではコウヤマキ属を欠き、草本花粉ではアブラナ科、アカザ科-ヒユ科の出現率が、イネ科(40ミクロン以上)などに比べやや低い。

*イネ科(40ミクロン以上)はイネ科のうち、花粉粒径が40ミクロン以上のものを示しており、イネ属(*Oryza*)を含んでいると考えられるが、そのすべてがイネ属であるとは断定出来ない。
**丸数字は第31図埋納壙内の土層

第4項 考察

(1) 花粉分帶

今回の分析地点の内、埋納壙部北側壁、銅鐸内側充填土の試料については柱状のサンプリングを実施していないために花粉分帶を行わなかった。また、柱状にサンプリングを行った西側壁面で花粉分帶を以下のように実施したが、検出花粉数が極めて少なかったため、精度を欠く。

I 帯 (試料No.1~V層)

アカガシ亜属が43%と高い出現率を示す。草本花粉ではカヤツリグサ科、イネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)、ヨモギ属が10%以上出現する。

II 帯 (試料No.2~VI層上部)

コウヤマキ属が60%と高い出現率を示す。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科が200%程度、ヨモギ属が95%の高い出現率を示す。

III带 (試料No.4-VII層下部、試料No.5-VII層、試料No.6-落ち込みV層)

アカガシ亜属が25%程度で優占し、二葉松類、コウヤマキ属、ハンノキ属、シイノキ属、コナラ亜属を伴う。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が高い出現率で安定して出現する。アブラナ科、ツリフネソウ属、キク亜科は低率で出現するが、20%程度の出現率を示す試料もある。

IV带 (試料No.7-VII層)

スギ属が40%程度の出現率を示し、二葉松類、ツガ属、シイノキ属、アカガシ亜属、コナラ亜属などが10%程度出現する。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科、ヨモギ属が50%程度の出現率を示す。

V带 (試料No.10-X層)

コウヤマキ属が40%、アカガシ亜属が30%程度と高い出現率を示す。草本花粉ではカヤツリグサ属、イネ科(40ミクロン以下)などが特徴的に検出される。

VI带 (試料No.11-XI層上部)

アカガシ亜属、コナラ亜属が30%程度の高い出現率を示す。草本花粉ではイネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)、ヨモギ属が比較的効率で出現する。

VII带 (試料No.12-XI層下部、試料No.13-VII層上部、試料No.14-VII層中部)

アカガシ生属が50%程度の高い出現率を示し、コウヤマキ属、スギ属が10%程度で安定して出現する。草本花粉では、ヨモギ属が100%程度の出現率で安定して出現するが、イネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)、アカザ科-ヒユ科は試料間でばらつきを持つ。

VIII带 (試料No.15-VII層下部)

スギ属が40%程度の高い出現率を示し、コウヤマキ属、アカガシ亜属、ムクノキ属-エノキ属が10-20%程度出現する。草本花粉ではヨモギ属が56%の高い出現率を示し、イネ科(40ミクロン以下)、イネ科(40ミクロン以上)などを伴う。

(2) 植生復元

前述の通り8花粉帯に分帶したが、ほとんどの試料で花粉化石の検出数が極めて少なく、また分帶内での特に草本花粉の出現率にばらつきが多かったため詳細な植生復元は困難であった。I带からV带を通じて、遺跡周辺の丘陵から山地ではアカガシ亜属を主要素とする暖温帯林(照葉樹林)が分布していたと考えられ、湿地にはハンノキ属やムクノキ属-エノキ属などの河畔林が存在していたと考えられる。稲の栽培は、イネ科(40ミクロン以上)の出現率の高くなるV带の時期にはすでに行われていた可能性が強く、V带弥生時代以降の植生を表すと考える。

られる。また、コウヤマキ属やスギ属の増減が周辺の亀井遺跡（那須・坂本、1980）で報告されているような温潤気候を表す性質のものであるか否かは、今回の結果からは判断できなかった。

（3）埋納壙の埋め戻し土について

埋納壙の埋め戻しに使用された土に含まれる木本花粉の組成から、スギ属が比較的高率で出現する試料No.3（②層）、5（③層）のAグループと、コウヤマキ属が比較的高率で出現する試料No.2（⑥層）、4（⑤層）のBグループに大別される。埋納壙が試料No.7を含むX層層準に掘り込まれていること、スギ属が西側壁面の試料No.7（IX層）、試料No.15（XI層）の層準で高率で出現することにより、Aグループの土はIX層を埋め戻した部分である可能性がある。また、西側壁面でコウヤマキ属の優占する層準は試料No.2（VI層）、試料No.10（X層）の層準である。試料No.2を含むVI層は埋納壙を埋め戻した後に堆積した地層であり、埋め戻しに使われたとは考えられないことから、Bグループの土は試料No.10を含むX層の土を埋め戻した部分である可能性がある。第5図に示したように埋納壙内の試料No.2と試料No.3は近接した地点から採取した試料である。試料No.2と3ではスギ属、コウヤマキ属の出現傾向が異なる他、試料No.3ではほとんど見られなかったトウヒ属、ハンノキ属などの種類が試料No.2では検出されている。また、草本花粉の出現傾向においても大きく異なる。特にアブラナ科、アカザ科、ヒユ科の出現率が試料No.2では100%以上の高い出現率であるのに対し、試料No.3ではほとんど出現しない。これらのことからも試料No.2と3は同一層準の堆積物を同時に埋め戻したものとは考えにくい。また、銅鐸内部の試料No.20では、検出した花粉化石の種類が埋納壙内の試料No.3、4、5とはほぼ同じであるが、胞子化石の出現率が少ないことが特徴である。このことにより、銅鐸内部の土が埋納壙を埋める際に自然に混入したものとは考えにくい。

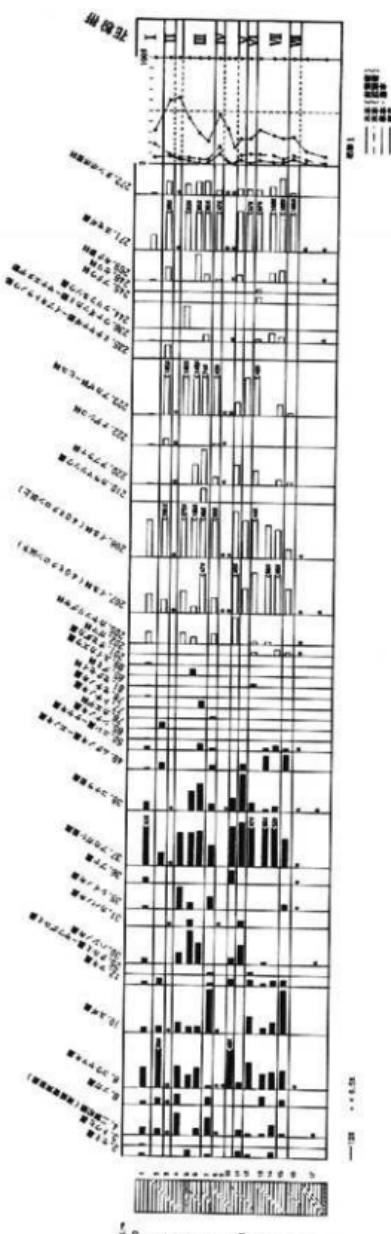
まとめ

跡部遺跡において行った今回の分析から以下のことが明らかになった。

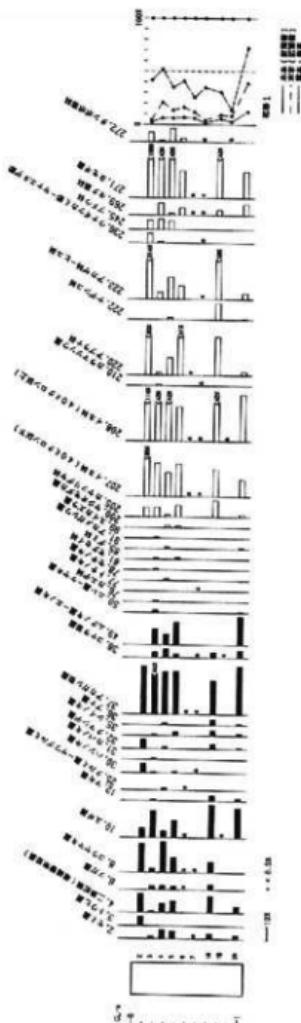
- 柱状に試料を採取した西側壁面の試料のうち、花粉帯設定に十分な良好な花粉化石を含有していたのは、わずかに1試料のみであった。このためにやや精度を欠くが、I～IVの8花粉帯を設定した。
- 弥生時代中期～古墳時代にかけての遺跡周辺の植生の一部が明らかになった。
- 埋納壙の埋め戻しは一度に行われたものではなく、段階を追って行われた可能性がある。
- 埋め戻しにはIX層、X層の土を用いた可能性がある。

引用文献

那須孝悌・坂本清子、1980、花粉分析、亀井・城山、財团法人大阪文化財センター、423-431



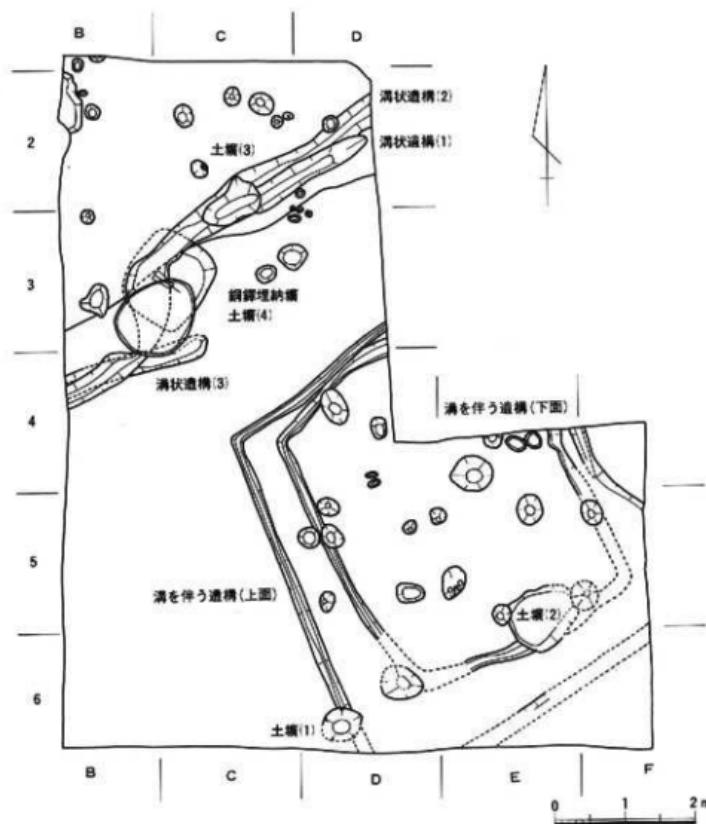
第8図 西側壁面の花粉ダイヤグラム



第9図 埋納壙壠部北側壁の花粉ダイヤグラム

第4章 遺構・遺物の検出状況

発掘調査の経過で述べたように、当遺跡の発掘を開始して間もなく、当遺跡の北側で銅鋒が発見されたため、銅鋒の発掘と古墳時代初頭の遺構・遺物の調査という二方向の発掘調査を行



第10図 調査区平面図

った。土壙（4）で切られている銅鐸埋納壙および銅鐸などについては別章で述べるが、当遺跡の北側には土壙（3、4）と溝状遺構（1、2）があり、南側の市道下から北側中央部にかけては、溝を伴う遺構（上下二面）と土壙（1、2）がある。

発掘区画の4-C～F、5-C～F、6-D～Fで検出された溝を伴う遺構というのは、ある特定の場所を区画しているが、ピットを整理してみると掘立柱式住居の柱穴跡にはならないので上記のより方をした。古墳時代初頭の土器は、溝を伴う遺構の東よりの区画4-E・F、5-E・F、6-E・Fに散在し、完形に近い土器は北東隅や南東隅に集積された状態で出土している。土器の出土状況から、集積土器群とでもよぶことができようか。つまり、ある目的に使われた土器が、その目的を果たした後に集積されたと考えられる。したがって、溝を伴う遺構内の上面には完形土器ではなく、小さな粒状の土器片が床面に混じっているという状況である。発掘区画の6-Dで検出された土壙（1）は、平安時代後期の瓦器などを出土しているので井戸の底か何かであるため、古墳時代には直接関係がない。5-E、6-Eの土壙（2）は遺物を伴っていないが、溝を伴う遺構（上面）と同時期のものといえる。溝を伴う遺構（下面）には、土器片はみられない。このような出土状況をみると、溝を伴う遺構の上下二面は時間的な差は余り見られないと考えた方が妥当のようである。

当遺跡北側の2-C、3-Cで検出した土壙（3）には庄内式土器のやや新しいものが埋められていた。3-B、3-Cで検出された土壙（4）からは、庄内式土器の古い時期のものが出土した。

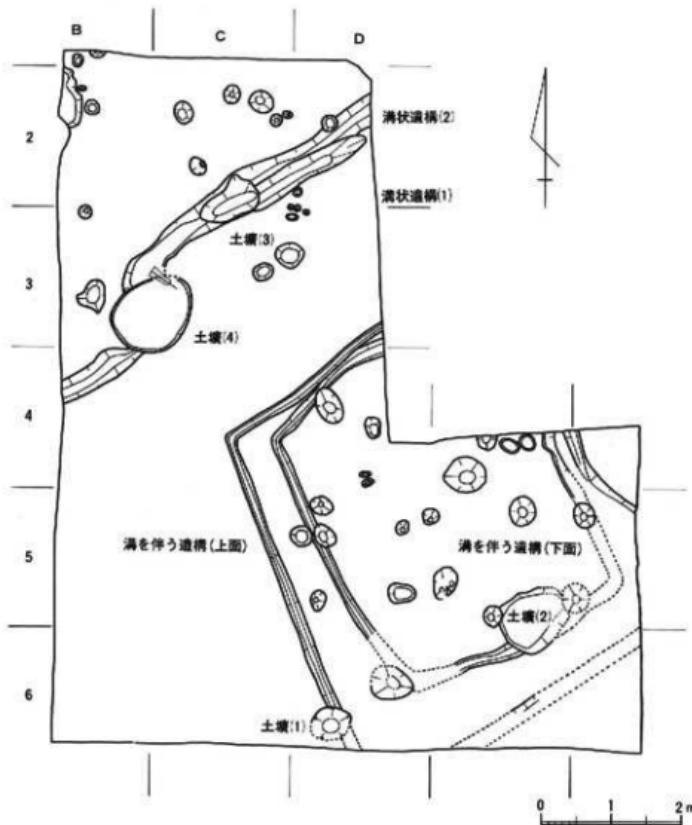
2-C・D、3-B・C、4-Bにかけて検出された溝状遺構（2）については、地形の関係から自然にできたもののように考えられる。それが古墳時代初頭まで残存し、あらためて2-C、2-Dで検出された溝状遺構（1）がつくられたのであろう。したがって、この溝状遺構からは、弥生時代終末期の土器片や古墳時代初頭の土器片が混在して出土した。しかもこの溝状遺構（1）を土壙（3）が切っている。

ところで、当遺跡内の土壙（4）および銅鐸が埋納されていたところは、地形的にもっとも高いところであるが、それでも海拔6.85mという低湿地である。このような河内平野の低湿地に分布する多くの弥生・古墳時代の遺跡は、あらためて根本的に再検討する必要をおぼえる。

当遺跡の地質を分析した結果、シルト混じり粘質土が主であることから、きわめて近いところに大量の水があるという。すなわち、水辺に近い遺跡である。おそらく、原大和川辺であろう。このことは、一般的にいう山麓や丘陵・平地などの遺跡とは、かなり条件が異なっている。とくに水辺の微高地という条件を考慮したうえで、わずか80m余の発掘区に銅鐸が埋納されていたこと。その近くで、同じ場所に古墳時代初頭には溝を伴った施設や土壙がつくられたこと。土器が集積されたことなどを考える必要がある。

第5章 古墳時代の遺構（含む平安時代後期の遺構）

本報告の遺構は、発掘調査順に、即ち年代の新しいものから記すことにした。なお、銅鐸と埋納鏡は別章で述べる。



第11図 調査区平面図（上面）

第1節 平安時代後期の遺構 土壙（1）

調査区の南端（6-D）で、直径50~60cm、深さ約17cmの円形の土壙が検出され、土壙内から瓦器柄、土師器小皿、瓦片などが出た。（第11~12図）

この土壙は、井戸の底部かと考えられるが、上の掘り込み部分が機械掘削のため明らかでない。遺物の検出レベルはT.P.+6.872mである。このレベルは第2節に述べる溝を伴う遺構とほぼ同じである。

第2節 古墳時代の遺構（上下二層）

第1項 溝を伴う遺構（上面）

調査区の南東で溝を伴う遺構を検出した。（第10~12図）

溝の検出面はⅦ層で、レベルはT.P.+6.9~7mにあたる。

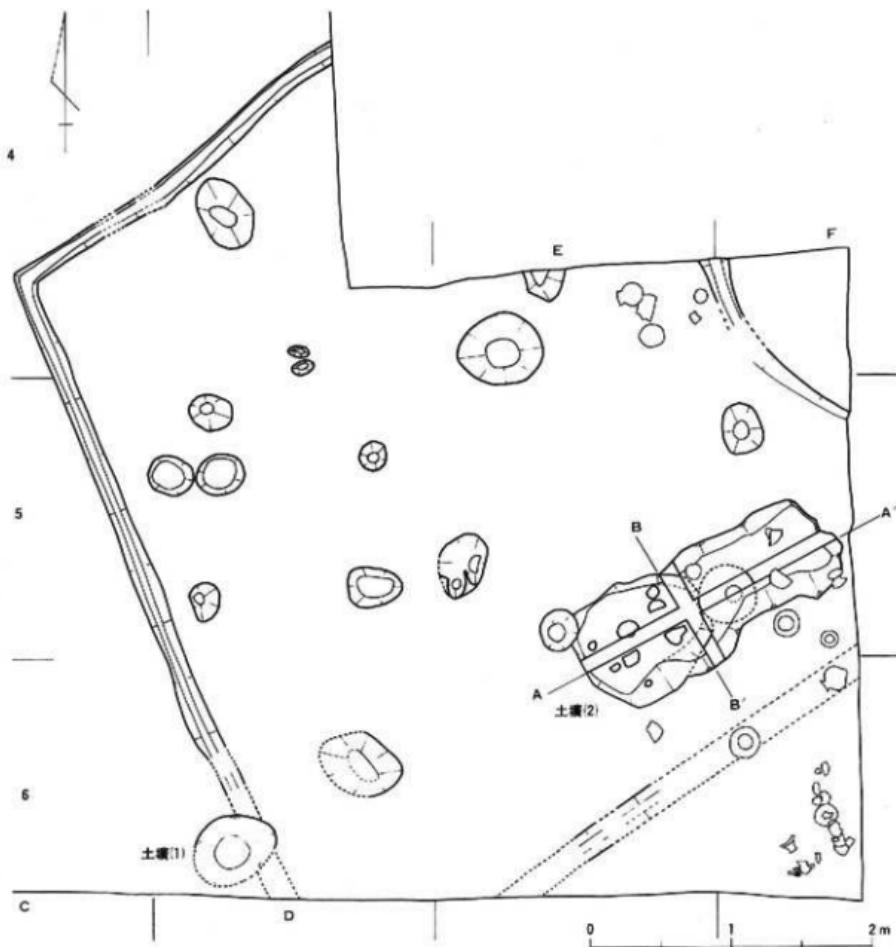
まず、西側の溝についてみると、この溝は磁北に対して西へ25°振っている。長さ3.7mであるが、南西の端は前述の土壙（1）のために不明である。溝幅10~20cm、深さ7cmである。

ついで、北側の溝は、磁北に対して東へ58°振っている。北西コーナーの開きは100°となる。北東への延びは未発掘であるため不明であるが、現存長は2.7m、幅は10~20cm、深さ6cmである。北東のコーナーが不明であるが、そのコーナーの角度も100°とみるのが妥当ではないかと考えられる。つまり梯形の溝を伴う遺構と推定される。その痕跡らしきものが東部にみられる。

この溝状の区画内の土層は非常に固く、たたきしめられたようである。埋土の状況は次の通りである。①層暗緑灰色（10G Y4/1）粘質シルト（少量の細砂、炭を含む）、②層緑灰色（10G Y5/1）シルトと暗緑灰色（10G Y4/1）シルトの互層、③層緑灰色（10G Y2/1）シルト（炭を多量に含む）。遺構のベースとなる上層は、後述する溝を伴う遺構（下面）の埋土である④層緑灰色（10Y G6/1）粘質シルトである。

ここで注意すべきは、①層と③層には炭を含んでおり、これが2回にわたる表土を示しているということである。このことは、①層が上面の遺構の表土面であり、③層が下面の遺構の表土面といえる。いわゆる④層が遺構のベースとして整地され、その上に③層で固められ、何か火が使われた後再び②層で整地され、①層で固められ、火が使われた後に整理された状況を物語る。その最終的な状況が、集積された土器群と溝を伴う遺構ということになろう。

また、溝状の区画内で、若干のピット、杭の根らしきものが検出されたが、掘立柱式の建物にはならないのが注意される。建物でないならば何であろうか。現在では明らかでないという



第12図 溝を伴う造構（上面）平面図、土壤（2）平断面図

のが実状である。なお、土器片類は①～③層に含まれるもので、布留式の古い時期のものが多い。(第6章参照) また、南東部で集積状に検出された土器群は、一部上層のVI層出土の土器片と接合するものがあるので、VI層からの切り込みのものも含まれているようである。

第2項 粗砂を埋めた遺構土壤 (2)

前述の溝を伴う遺構(上面)の南東部で、粗砂を主とした土層を埋め固めた土壤が検出された。この箇所は、銅鐸が確認されたとき、電磁波探査を実施した際、反応があったところである。おそらく、周辺のシルト混じりの粘土質に比べて粗砂を主とした土壤であったため、反応したものと思われる。磁北に対して東へ62°振った北東方向に長い隅丸長方形で、断面は逆台形、長さは1.1m、幅は0.8m、深さ15cmである。(第12図)

この土壤内の埋土は、①層オリーブ黒色(5Y3/1)粗砂混じり粘土、②層オリーブ黒色(5Y3/1)粘土混じり粗砂、③層明黄褐色(2.5Y7/6)粗砂、④層灰オリーブ色(7.5Y2/5)粘質土、⑤層オリーブ黒色(5Y3/1)粗砂混じり粘質土である。このうち、①層・②層・⑤層は、先述の溝を伴う遺構(上面)のベースである④層緑灰色粘質シルトと③層明黄褐色粗砂からなるもので、これからみると、シルト混じり粘土と粗砂が互層にブロックで埋め固められている。

④層は杭穴の痕跡があらわれる層で、8か所で検出し、いずれも杭の根を確認した。長軸に沿って北西側に3本、南東側に3本、別に北西および南東で各々1本を確認した。杭穴は径5～15cm、深さ10～20cmを測り、合掌状に土壤の内側へ約60°の傾斜で打ち込まれていた。これが何を意味するか明らかではないが、この土壤は後述する溝を伴う遺構(下面)の廃絶後に造られたものであるため、先に述べた溝を伴う遺構(上面)に関連するように考えられる。ただこの土壤内では、杭以外の遺物は検出されていない。

第3項 溝を伴う遺構(下面)

上面の溝を伴う遺構を整理していると、その下面に、規模の小さい溝を伴う遺構が検出された。地層は基本的にⅧ層に該当している。

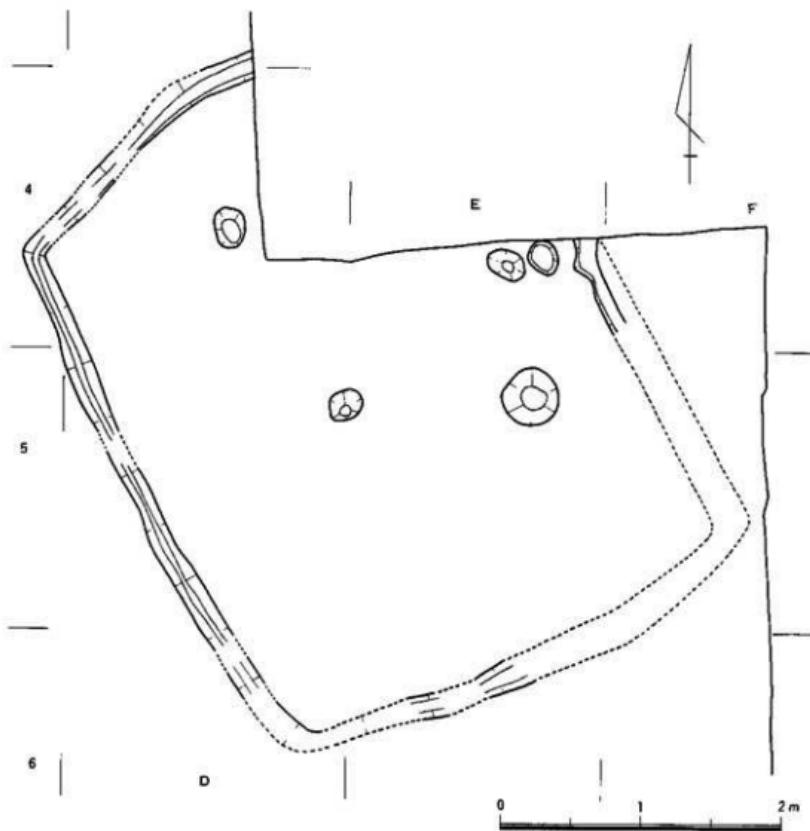
西側の溝は、上面の溝より約60cm東になるが、方位は上面の溝と同じく、磁北に対して西へ25°振っている。検出長は3mであるが、推定復元は3.8mである。

北側の溝は、上面の溝が100°で曲折しているのに対し、角度が少し広く110°となっており、長さ1.4mでさらに東へ折れ曲がっている。その角度は160°の開きとなっており、検出長は40cmであるが、推定復元では80cmになる。(第13図)

未発掘部や搅乱された部分もあるが、東側の溝の検出長は1.2m、南側では80cmである。これらの溝を復元してみると、八角長方形となる。東側と西側の溝の間隔は、3.9mである。

東・西の溝の長さは3.8m、北および南の溝につながる。溝の曲折角は各々 110° で、長さ1.4mである。八角形の北溝と南溝の幅は4.8mである。

溝に囲まれた内側には、小ピットが数個検出されたが、掘立柱式建物にはならない。ただ1か所、柱根らしきものが遺存していたが、何に使用されたかは明らかではない。また、土器などの遺物は検出されていない。これは、当初の目的が果たされた後整理されて、少し時間をおいてから、上面の溝を伴う施設が作られたことを物語る。



第13図 溝を伴う邊溝（下面）平断面図

第3節 発掘区北部の遺構

発掘区の北側の遺構としては、古墳時代の上塙(3・4)と古墳時代の溝状遺構(1)と弥生時代終末期の溝状遺構(2)がある。また、小ピットが若干検出されたが、掘立柱式建物の柱穴ではないようであるが、何のピットかは明らかではない。(第14図) 他に注目すべき遺構としては、銅鐸の埋納塙がある。これについては弥生時代の溝状遺構(3)とともに別章で述べる。

第1項 土壌(3)

発掘区画の2-C、3-Cにかけて、梢円形の土壌が検出された。この地点は北へ傾斜する斜面(T.P.+6.9m)で、基本層はⅢ層である。磁北に対して東へ60°振った土壌は、長さ88cm、幅56cm、深さ20cmで、断面は逆台形をしている。土壌内では、庄内式新相のほぼ完形の高杯、鉢、山陰系の甕が検出された。なお、この土壌は、溝状遺構(1・2)を切っている。また、土壌内の土質は、灰色(10Y5/1)細砂混じりの粘土である。

第2項 土壌(4)

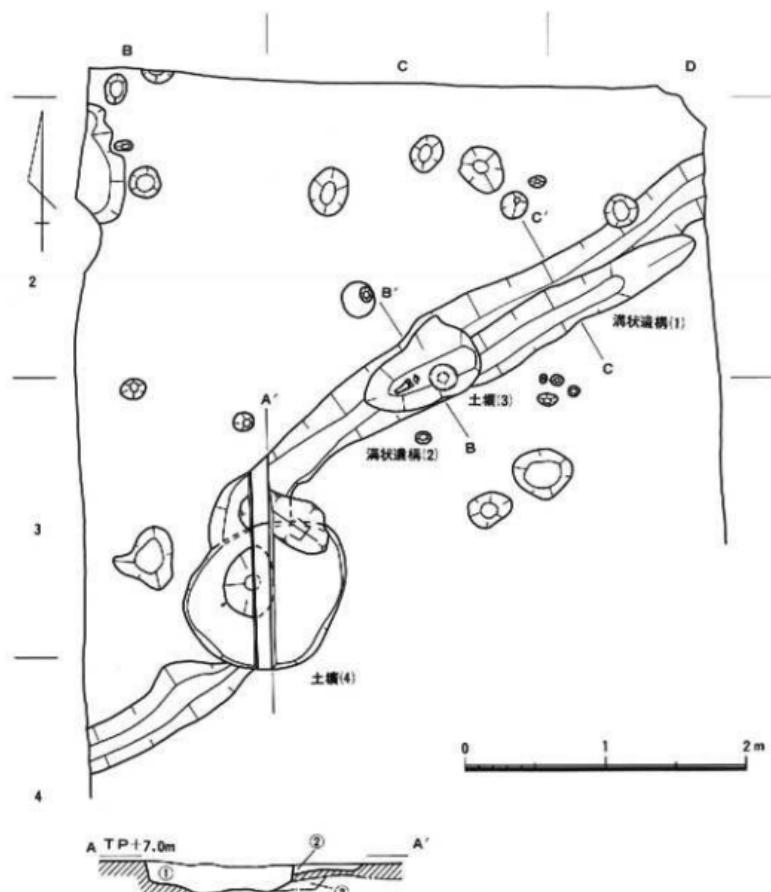
発掘区画の3-B、3-Cにかけて、梢円形の土壌が検出された。この土壌は、発掘区ではもっとも高い所(T.P.+6.85m)であるが、基本層はⅢ層である。磁北に対して東へ47°振った土壌は、長径1.2m、短径1mである。土壌内では、庄内式の甕、鉢、高杯などが検出された。これらの土器片を取り上げているとき、先に述べたように、銅鐸の鱗が発見されたのである。(T.P.+6.7m) 土壌内の土質はオリーブ黒色(10Y3/1)中砂少量混じりの粘土である。なお、この土壌は溝状遺構(2)と銅鐸埋納塙を切っている。

第3項 溝状遺構(1)

2-C、2-D地区で南西から北東に伸びる溝状遺構を検出した。基本層はⅢ層である。方向は磁北に対して東へ60°振っている。検出長は1.8m、幅30cm、深さは20cmである。なお、この遺構は、同遺構(2)と重なっている。また、先に述べた土壌(3)がこの溝状遺構(1、2)を切っている。

第4項 溝状遺構(2)

銅鐸の鱗が発見されてから、その周辺を精査していたとき、2-C、2-D、3-B、3-C、4-B地区にまたがる溝状遺構を検出した。この遺構の一部が先に述べた土壌(3・4)で切られており、また、この溝状遺構が銅鐸の埋納塙上を通っていることがわかった。しかも、



- ① オリーブ黒色(10YR 3/1)中砂混じり粘土
- ② 嗜オリーブ灰色(2.5GY 4/1)シルト質粘土
溝状造構(2)内部堆積土
- ③ オリーブ黒色(5Y 2/2)細砂混じり粘土
網理埋納層内
- ④ 灰色(10Y 5/1)細砂混じり粘土
- ⑤ 棕色(10YR 4/1)シルト混じり粘土

第14図 北部の検出造構平面図

この遺構内から弥生時代終末期の土器片が検出されたことから考えて、銅鐸の埋納時期がそれ以前であることが推定できた。基本層は埴層の下部に該当している。方位は、磁北に対して東へ55°傾いている。検出長は約6mである。幅は26~57cm、深さは16cmで、南西から曲折して北東へ伸びている。

第4節 溝を伴う遺構と土壙などの関係

溝を伴う遺構は、上面が梯形で下面が八角長方形をしており、その平面形が異なるが、同じ場所で重なっている。このように、特定した場所を区画していることは事実である。

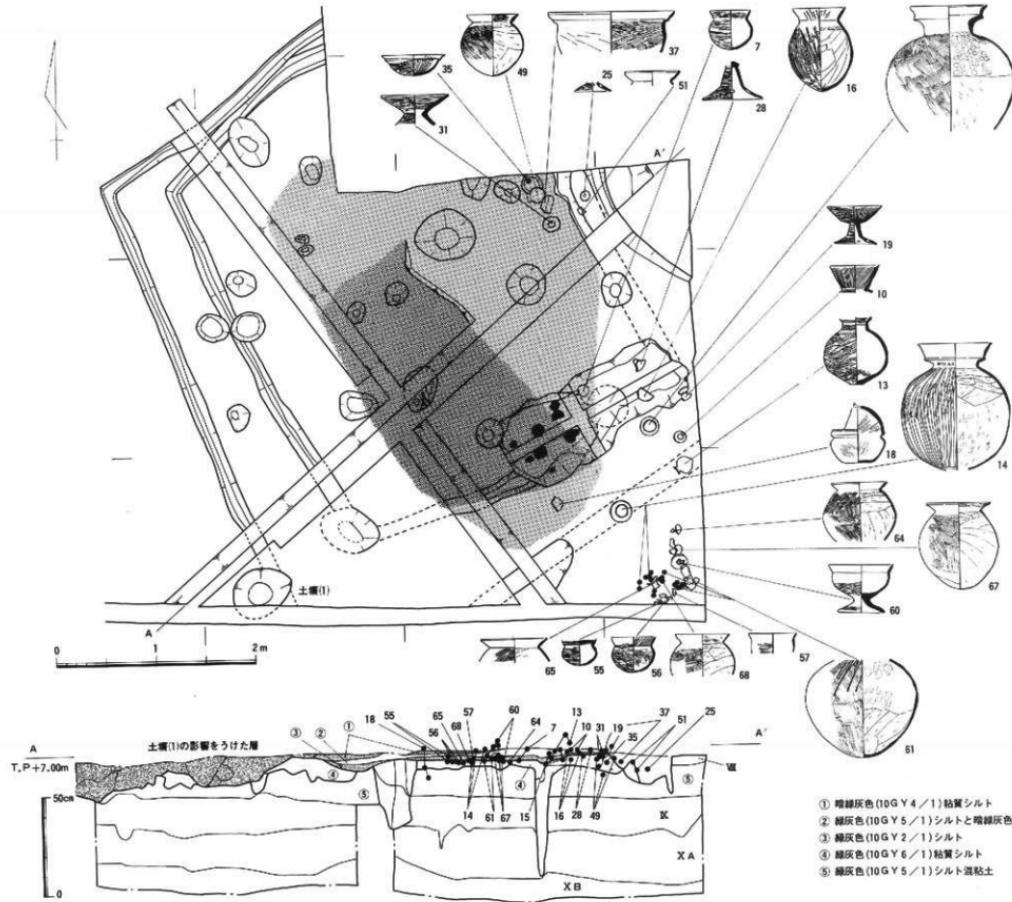
その区画内は非常に固くたたきしめられた土間のようであった。またビットが若干検出されたが、木杭が遺存していたものは1か所である。多くのビットは浅く、土器片が1点もしくは2点出土するという状況であり、いわゆる掘立柱式建物の柱穴跡でないことが判明した。この遺構が掘立柱式建物でないということになると、何の遺構であろうか。

上面の遺構は梯形の溝に囲まれ、その区画内は土間のように固められ、第5章第2節第2項で述べた様に、埋土の状況は、表土が炭混じり層であることから火が使われたことがわかる。また、土器が東側へ集積された状態であることから、土器が使われたこともわかる。下面の遺構は上面より規模が小さいが、八角長方形を呈しており、上面と同様表土が炭混じり層であることから火が使われたことがわかるが、土器片などがみられないで、集積、整理されたものと考えられる。

上面、下面ともおなじところで重なっていることから、この区画内で火と土器を使って何かが2回にわたって行われた。どのような「まつり」が行われたかは明らかでないが、何かの「まつり」がおこなわれたところと推定される。つまり「斎場」ではなかろうか。なお上面の遺構は土壙（2）と関連していると考えられるが、この土壙（2）は粗砂が多く、つき固められており、しかも何のためかわからないが杭が合掌状に打ち込まれた状況であり、これも「まつり」に何かの役目を果たしたのではないかといえる。

また、土壙（3）は庄内式のやや新しい高杯などが3点、土壙（4）は庄内式の古い相の高杯・甕・鉢などが6点出土しているので、それぞれ溝を伴う遺構と関連していると考えられる。とくに土壙（3）は上面の遺構と、土壙（4）は下面の遺構と関連していると推定できる。しかも、土壙（4）が銅鐸埋納壙にかかっているのが「まつり場」として、何か意味があるようにも思える。

以上のように、当遺跡の古墳時代初頭の遺構は、「まつり」が行われた跡と推定するのが妥当のようである。



第15図 溝を伴う造構（上面、下面）平断面図

第6章 古墳時代の遺物（含む平安時代の遺物）

第5章でも述べたが、平安時代後期の遺物をわずかではあるが5点採集した。その他はすべて、古墳時代初頭の土器が主である。以下、それらの土器の個々についての詳細は表記するが、遺構にかかる遺物と、遺構との直接的なかかわりが明らかでない遺物とに分けて記すことにする。後者は、いわゆる集積された土器群を指す。概略すると、布留式古棺のものには、吉備・紀伊・山陰・伊予・阿波等の他地方の土器が比較的多く含まれている。また、庄内式土器の新相のものには、山陰系の甕がみられる。なお、庄内式土器の占相のものは、在地のものと考えられる。器種には小型壺・壺・小型甕・高杯・器台・鉢・手培り形土器がある。他に、製塙土器、土錘、サヌカイト製石器未成品、同剥片などが若干採集された。

ところで、土器の編年については、わが国では、まず府古遺跡から出土した弥生土器の編年が金字塔となり、第I様式～第V様式に編年分類されたのが大方の指標となり、近代考古学のひとつの礎となつた。このうち第V様式と言われるものの中には、第VI様式とでも呼ぶべきものが多々あることが注目されていた。筆者もそのような経験を度々したものである。それは古墳時代初頭に該当するものかもしれないが、どのように処理すればよいかという問題である。

一般に古墳時代初頭の土器は、天理市の布留遺跡出土の土師式土器が布留式土器として分類されており、それを標準として整理しているのであるが、それでもなお、弥生式土器の第V様式でもなく、布留式土器の古式でもない、分類の困難なものが数多く指摘されていた。つまり第V様式と共に存する土器の中に、そのような分類のむづかしい土器が存するのである。

田中琢氏は、これらの問題を解決する方法として、農中市庄内遺跡、藤井寺市船橋遺跡出土の甕が、畿内第V様式と布留式土器の中間の器形・製作技法をもつものとして、その甕とその甕に伴出する土器群を庄内式と設定されたのであろう。これは、きわめて卓見である。それが河内地方においては、庄内式と布留式土器などが複雑に入り混じっており現在河内ではさまざまな分類が試みられているのである。例えば、中河内の場合は、庄内期当初よりそれに後行する布留式系甕が存在している。しかも、地方からの搬入の土器群も混入しているのである。例えば、吉備系土器群、山陰系土器群、紀伊系土器群などがそれである。その他、東海系のものなど多様である。したがって、これらの古墳時代初頭の土器の研究は、それぞれの系譜の編年を確立することは当然であるが、各々の系譜の異なる土器群のセット関係で再分類する必要があるよう思う。安易に庄内式とか布留式とか吉備系とか言うではなく、それらの組み合わせのパターンを分類すべきであると考える。これによって河内の古墳時代初頭の土器の把握ができるのではないかと思う。

さて、本調査で判明した土器は、まず、溝を伴う遺構内(第5章第2節参照)のもの。とはいっても、何らかの「まつり」に使用した後、土器群を東側へ整理・集積したもの一部と見られるが、その器種は、小型壺(表記番号=6、7)、直口壺(8~10)、複合口縁壺(13~15)、長胴壺(16)、手縫形土器(18)、高杯(19~30)、鼓形器台(31)、小型器台(32~34)、小型鉢(35)、大型鉢(36、37)、壺(38~51、54)、台付壺(52)、鉢(53)があり、溝を伴う遺構の南東部の集積された土器は、小型壺(55、56)、鉢(57、58)、高杯(59)、台付鉢(60)、壺(61、62)、壺(63~68)である。

土壤(3)では、鉢(60)、高杯(70)、壺(71)があり、土壤(4)では、短頸壺(72)、高杯(73~75)、鉢(76~78)、壺(79~81)がある。

溝状遺構(2)では、広口壺(82)、壺(83)、高杯(84)、壺(85~89)がある。このうち広口壺は、弥生時代の終末期のものと考えられる。

落ち込み層では、弥生時代前期、中期、後期、古墳時代初頭の土器片が混在していた。壺(90~95)、器台(96)、高杯(97~100)、小型器台(101~103)、鉢(104)、大型鉢(105)、壺(106~115)である。

西壁の層序を基準に検出できた土器についてみると、まず第VI層では、直口壺(116~121)、短頸壺(122)、壺(123)、広口壺(124~127)、複合口縁壺(128、133~135)、加飾壺(129~132)、壺(136~143)、小型壺(144~156)、小型鉢(157~164)、大型鉢(165~167)、有孔鉢(168~172)、小型器台(173~179)、高杯(180~219)、壺(220~266)がある。他に製塙土器(267、268)、土鍤(269、270)がある。第VII層では、弥生時代後期の土器が含まれている。直口壺(271)、広口壺(272)、高杯(273、274)、壺(275、276)、279~281)、鉢(277、278)である。第VIII層では、弥生時代後期の壺(282~287)がある。第IX層、X層では、弥生時代中期の土器が含まれている。壺(288~300)、壺(301、302)。XI層では、土器片を検出していない。XII層では弥生時代前期の土器が検出されている。壺(303~305)。

土器のほかには、サヌカイト石器未成品と加工痕のある剝片や剝片(306~312)が検出されている。

銅鐸の埋納壕は第IX層であるが、埋納壕上部周辺には土壤(4)があるため、IX層が壊された状況で、弥生土器片は検出されなかった。

以上のように、土器の検出状況をみると、Ⅳ層以下は弥生土器片のみで、古墳時代のものは認められなかった。これらの土器等の詳細は、表記のとおりである。

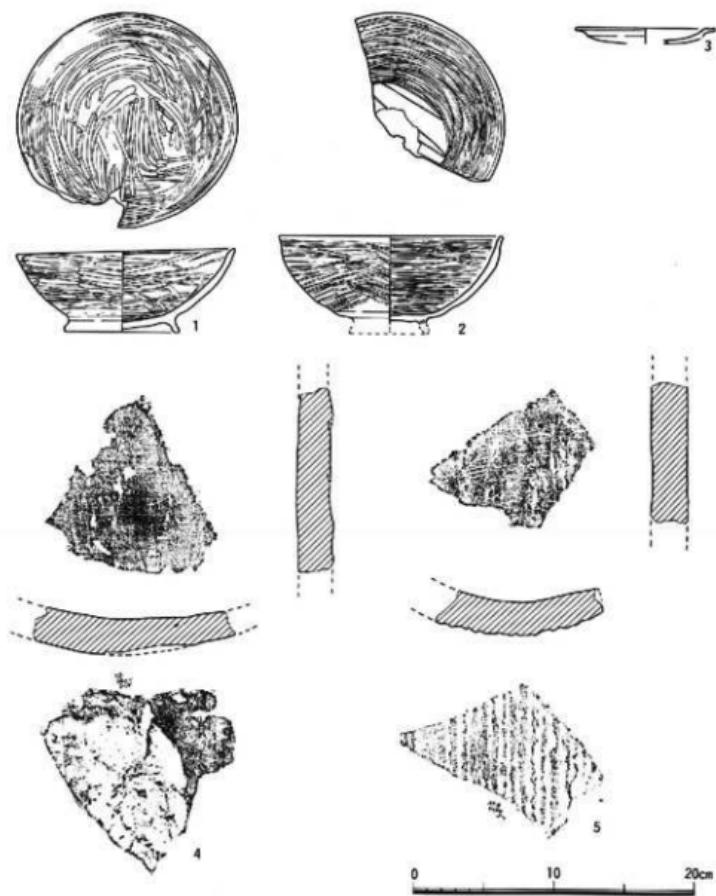
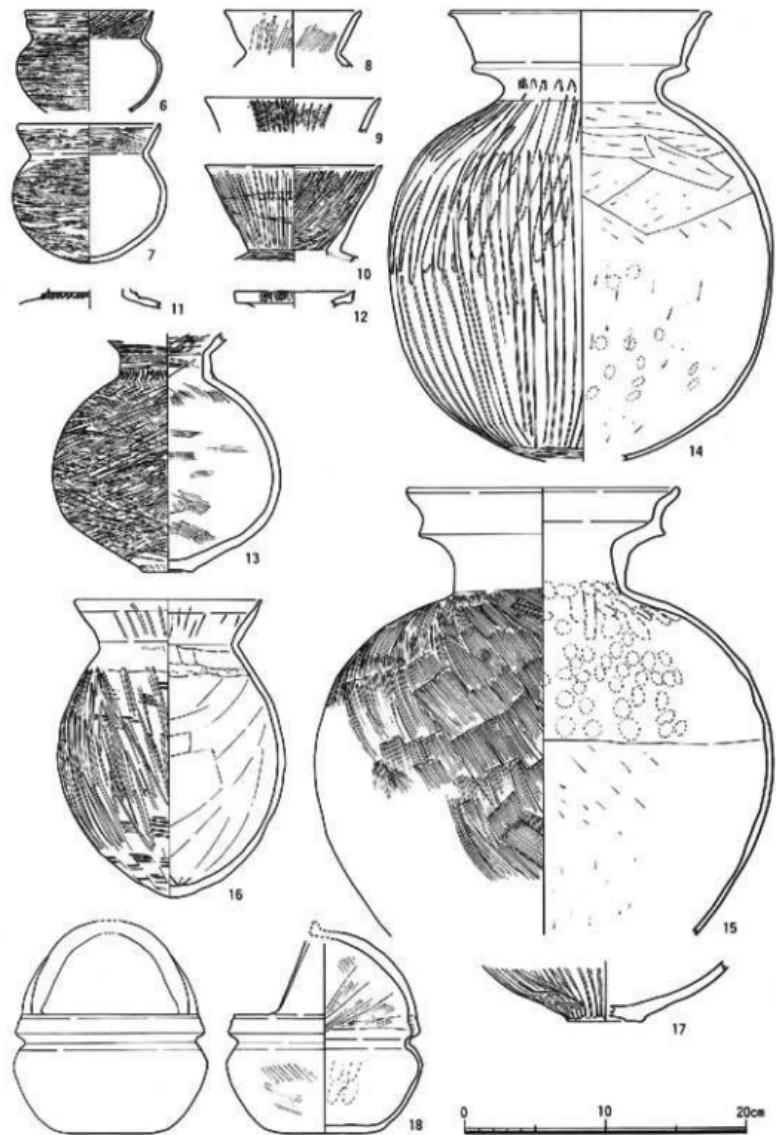


表2 土壌(1) 出土遺物観察表

第16図 土壌(1) 出土遺物実測図

*下段の番号は図版番号

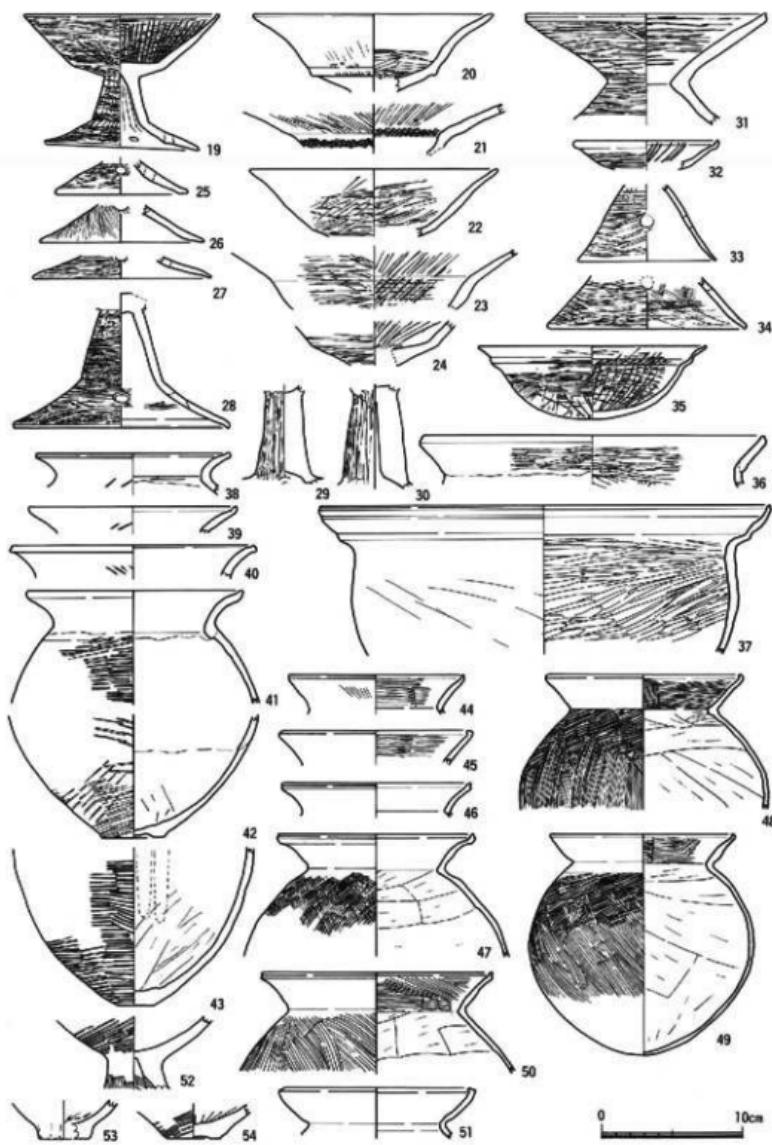
番号	器種	法量(cm)	形 態	外面調査	内部調査	色 著	動土	備 考
1 12	瓦器塊	口 径15.4 高台径 8.0 高台高 1.2 器 高5.75	丸くくぼむ底部から平球形の侈部に至る。口縁部は直線的に伸びる、高台は大型で「ハ」の字形に開く	下半ヘラケズリ後4分割の密なヘラミガキ、底面ヨコナデ、高台ヨコナデ	体部密なヘラミガキ、見込み一方向の密なヘラミガキ	黒漆色	やや粗	ほぼ完存、和泉型
2 12	瓦器塊	口 径15.85	平坦な底部から一旦盛り出し、半球形の侈部に至る。口縁部はわずかに外反し、内に沈巣が一圓する	挫おさえ、ヘラケズリ後密なヘラミガキ、高台ヨコナデ	体部密な横ヘラミガキ、見込み複数ジグザグ状ヘラミガキ	黒漆色	密	厚、大和型、内外に油漬
3	土師器	口 径 9.8	浅い平球形の底盤から矮な腰を持ち、外反する「て」の字形の口縁部、西側には巻き込むように丸く終わる	口縁部ヨコナデ、底部ナデ	口縁部ヨコナデ、底部ナデ	乳灰色	精良	%



第17図 溝を伴う造構出土遺物実測図—1

表3 満を伴う遺構出土遺物観察表一 (6~20) [第15回参照]

番号	器種	法量(cm)	形 独	外観調査	内観調査	色 調	粘土	備 考
6 13	小型壺	口 径 9.1 高 9.1	最大径は口径を優ぐ、内側する口 縁部、端部は尖る	上半ハケナデ後密 下半ハラケズリ後 粗いヘラミガキ	口縁部ハケナデ後 明灰灰色	精良	分	
7 13	小型壺	口 径 10.2 高 9.0	最大径は口径を優ぐ、内側のみの 口縁部、端部はつまみ上げる	下半ナデ、上半ハ ケナデ後密な板へ ラミガキ	口縁部粗いハケナ デ、体部ナデ	淡灰茶色	精良	はげ立形
8	直口壺	口 径 9.7	外傾する口縁部、端部は尖る	腹ヘラミガキ	ハケナデ	淡茶色	精良	
9	直口壺	口 径 12.5	外傾する口縁部、端部は尖る	ハケナデ後粗ヘラ ミガキ	ハケナデ後粗ヘラ ミガキ	乳茶色	やや粗	
10 13	直口壺	口 径 12.6 11 径12.6	外傾する口縁部、端部は尖り、内 に沈緑がめぐる	ハケナデ後放射状 ヘラミガキ	ハケナデ後放射状 ヘラミガキ	明橙色	精良	口縁部充存
11	加胸壺	—	瓶底部にキサミ目入り駆出凸部	腹ヘラミガキ	下半おさえ後ナデ	乳茶色	やや粗	
12	加胸壺	口 径 8.4	端部つまみ上げ、面を持つ、端面 に刺突紋・竹管押圧形跡			乳茶色	やや粗	
13	複合 口縁壺	口 径 3.5 最大径15.1	下ぶくれの体部、わずかに突出す る上げ底、直立した後外反する口 縁部、腹曲部にキサミ目	底部ハラケズリ、 体部ハケナデ後密 なヘラミガキ	体部ハケナデ後ナ デ、口縫部密なヘ ラミガキ	明橙色~乳 白色	やや粗	頂部以下完全 体部下半~底 部に黒斑
14 13	複合 口縁壺	口 径 18.2 最大径27.1	準形に近い体部、外に梗を持ち、 二段に屈曲する口縁部、端部は外 傾する面を持つ	ナデ後装飾的なハ ラミガキ	下半おさえ後ハ ラケズリ	乳灰色	密	口以上 底部に黒斑
15 13	複合 口縁壺	口 径 19.0 最大径31.2	上位で張る体部、外に無い梗を持ち、 二段に屈曲する口縁部、端部は 丸くつまみ上げる	ハケナデ	下半ハラケズリ、 上半おさえ後ナ デ	淡灰茶色	密	分
16 13	長颈壺	口 径 13.1 最大径16.1 器 高21.4	張りの少ない倒卵形の体部、外傾 する口縁部、端部は尖る、底部は 尖り気味の小さな平底	右上リタキ後ヘ ラケズリ後ナデ	腹ヘラミガキ	淡茶灰 色	密	口縁部・体部 下半張付着
17	壺	底 径 5.4	わずかに突出するドーナツ底	ヘラミガキ	ナデ	乳灰色~明 褐色	やや粗	黒斑あり
18 14	手造形 土器	器 高15.1	深い碗形の体部、突出しない丸み のある平底、口縁部は二段に屈曲 して立ち上がる。ドーム部は丸い	ハケナデ後ナデ	ドーム部ハケナデ 指おさえ、ナ デ	淡灰 色	やや粗	
19 14	高杯	口 径 13.9 高 11.1 器 高 9.5	水平な杯底部、前方へ伸びる口縁 部、兩面つまみ上げられる。都部 は柱状部から強く肩轍し、端部は 面を持つ、底には5唇の孔	杯底部~柱状部へ ラケズリ後ヘラミ ガキ、(杯部・瓶部 は密、柱状部は粗)	杯部ヘラミガキ後 放射状ヘラミガキ 柱状部絞り目、縦 帶ナデ	明橙色	精良	はげ立形
20	高杯	口 径 17.1	外に丸い梗を持ち、外側する口縁 部、端部は丸い	ハケナデ・ナデ後 放射状ヘラミガキ	ナデ後杯底部放射 状ヘラミガキ、口 縫部後ヘラミガキ	灰褐色	やや粗	



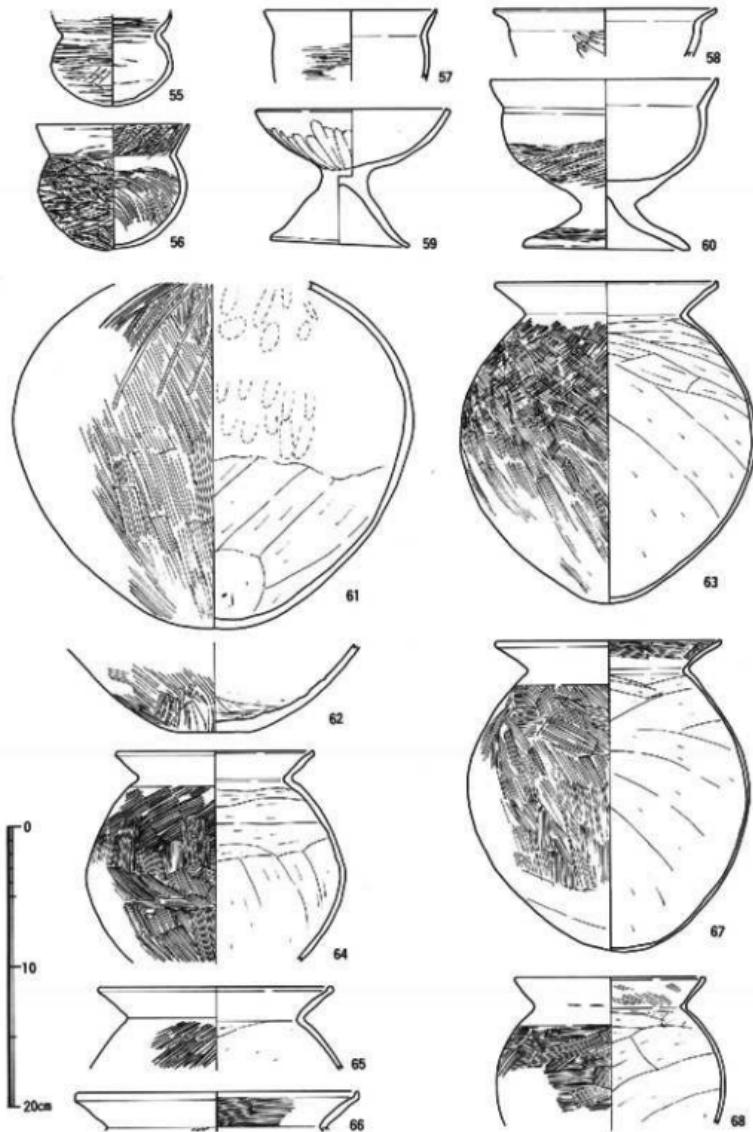
第18図 溝を伴う造構出土遺物実測図－2

表4 溝を伴う遺構出土遺物観察表-2 (21~35)

番号	器種	法量(cm)	形 態	外側調整	内面調整	色 調	地土	備 考
21	高杯	-	二段に屈曲する杯部、屈曲部内外に6条一組の櫛目状波状紋	ナゲ後放射状ヘラミガキ	ナゲ後放射状ヘラミガキ	淡茶色	やや粗	
22	高杯	口 径17.9	杯底部から丸みを持って屈曲する山根部、端部丸く終わる	ナゲ後密なヘラミガキ	ナゲ後密なヘラミガキ	明褐色~灰褐色	密	黒土
23	高杯	-	二段に屈曲する杯部	ナゲ後密な乱方向ヘラミガキ	ナゲ後密な放射状ヘラミガキ	乳茶色	やや粗	
24	高杯	-	一段に屈曲する杯底部	杯底部ヘラケズリナゲ後密な横ヘラミガキ	ナゲ後密な放射状ヘラミガキ			
25	高杯	幅 径9.6	端部は外へつまみ出され丸く終わる、4孔を持つ	密な横ヘラミガキ	ナゲ	淡茶色~明褐色	精良	裾部完存 黒土
26	高杯	幅 径11.9	端部は尖り気味に丸く終わる、1孔残存	ハケナデ(粗)	ハケナデ(粗)	淡灰色	やや粗	
27	高杯	幅 径12.7	低い肩部部、端部は下へつまみ出される、1孔残存	密な横ヘラミガキ	乳茶色	密		
28	高杯	幅 径15.4	柱状部から丸く屈曲する杯部、端部は下へつまみ出、丸みのある面となる、4孔(3孔残存)	柱状部ヘラによる面取、全体をハケナゲ後密な横ヘラミガキ	ハケナデ後ナゲ	明褐色	精良	脚部分
14	高杯	-	中央の柱状部、外反して端部へ続く、杯底部は深く凹む、1孔残存	端部ナデ	灰黄色	やや粗		柱状部完存
30	高杯	-	中央の柱状部、屈曲して端部へ続く、杯底部は水平	端部ナデ	灰茶色	やや粗		
31	鼓形 器台	口 径17.1	「く」の字形を呈する。端部側面は凹面となる	密な横ヘラミガキ	端部ハケナデ	乳灰色~明褐色	密	受部完存
14	小型 器台	口 径10.2	丸みのある浅い皿形の受部、端部はつまみ上げれる	密な横ヘラミガキ	ヨコナデ後放射状ヘラミガキ	褐色~灰褐色	密	
33	小型 器台	幅 径9.9	丈高の器部、端部は尖る、1孔残存	ヘラにより削取り密な横~乱方向ヘラミガキ	ナゲ	淡乳茶色	やや粗	
34	小型 器台	幅 径12.0	端部は下へ丸くつまむ、1孔残存	ナゲ後密な横ヘラミガキ	ハケナデ	淡茶色	やや粗	
35 14	小型 器	口 径16.4 高 5.3	半球形の体部、二段に屈曲する口部、端部尖り気味に終わる	ヘラケズリ後上位に密なヘラミガキ	密ヘラミガキ後放射状ヘラミガキ	明褐色	精良	3kg以上

表5 溝を伴う遺構出土遺物観察表一 3 (36~50)

番号	特徴	法量(cm)	形態	外向調整	内面調整	色調	胎土	備考
36	大型体	口 径24.5	体部から「く」の字形に屈曲する口縫部、端部は外傾する面となる	無い横ヘラミガキ	無い横ヘラミガキ	灰黄色	やや粗	
37 14	大型鉢	II 径32.3	深い体窓、二段に屈曲する口縫部、端部はつまみ上げられる	ナゲ	ヘラミガキ	明褐色	密	
38	堀	口 径13.8	丸く屈曲し、外反する口縫部、端部は外傾する面となる	右上りタタキ	ナゲ			
39	堀	口 径14.8	直線的に開く口縫部、端部はつまみ上げられ、丸く終わる	右上りタタキ				
40	堀	口 径17.3	外反する口縫部、端部はつまみ上げられ、外傾する面となる	左上りタタキ				
41 15	堀	口 径15.4	体部から丸く屈曲し、身外反する口縫部、端部はつまみ上げられ、丸く終わる	分割成板、右上り～水平タタキ	ナゲ	淡茶色	やや粗	
42	堀	底 径 4.6	強く弧る体部から、わずかに突出するドーナツ底	下位右上り・上位左上りタタキ	ナゲ	外面乳灰色 内面黄灰色	やや粗	底部完存
43	堀	底 径 2.7	張りの少ない体部、わずかに突出しないドーム	左上り～水平タタキ、底面もタタキ	ヘラケズリ後ナゲ			
44	堀	口 径12.5	丸みを持って外反する口縫部、端部はつまみ上げ、凹面となる	口縫部ハケナデ、 体部タタキの痕跡	口縫部ハケナデ 体部ヘラケズリ	淡茶灰色	密	
45	堀	口 径13.5	外反する口縫部、端部は内につまれ、外傾する面となる		口縫部ハケナデ	灰色	やや粗	外面張付着
46 27	堀	口 径13.4	「く」の字形に外反する口縫部、端部はつまみ上げ、凹面となる	体部ヘラケズリ		乳灰色	やや粗	
47 15	堀	口 径13.4	強く弧る体部から「く」の字形に外反する口縫部、端部はつまみ上げ、外傾する凹面となる	右上りタタキ後ハ ケナデ	体部ヘラケズリ	黑色	やや粗	外面煤付着
48 15	堀	II 径13.7	体部から「く」の字形に屈曲し、直線的に伸びる口縫部、端部はつまみ上げ、外傾する丸みのある面となる	右上りタタキ後ハ ケナデ	口縫部ハケナデ 体部ヘラケズリ	淡灰色	やや粗	外面口縫部～ 体部上半部付着
49 15	堀	II 径13.0 最大径16.1 高 高15.8	体部から「く」の字形に屈曲し、直線的に伸びる口縫部、端部はつまみ上げ、外傾する丸みのある面となる	右上りタタキ後ハ ケナデ	口縫部ハケナデ 体部ヘラケズリ	茶褐色	やや粗	外面体部中位 位煤付着
50 14	堀	口 径16.4	体部から「く」の字形に外反する口縫部、端部はつまみ上げ、直立する凹面となる	ハケナデ	口縫部ハケナデ、 体部ヘラケズリ	淡灰色	密	54



第19図 溝を伴う造構（南東の集積）出土遺物実測図

表6 溝を伴う遺構出土遺物観察表一4 (51~54)

番号	器種	法量(cm)	形 態	外面調整	内面調整	色 調	胎土	備考
51	瓶	口 径13.4	内溝する口縁部、腹部はわずかに肥厚し、内傾する面となる		体部ハラケズリ	乳白色	密	口縁部~体部 外面に擦付着
52	台付壺	—	台形の脚台	体部右上りタタキ 脚部ハケナダ	体部ナダ、脚部ハ ケナダ	乳茶色	やや粗	脚部完存
53	鉢	底 径 3.8	突出する平底	ナダ	ナダ	乳茶色	やや粗	劣
54	甕	底 径 3.9	突出しない平底	右上がりタタキ	ナダ	茶褐色	やや粗	劣

表7 溝を伴う遺構(南東部の集積)出土遺物観察表一1 (55~64)

番号	器種	法量(cm)	形 態	外面調整	内面調整	色 調	胎土	備考
55	小型壺	最大径 8.6	口縁と最大径はほぼ同じ。内溝する口縁部、腹部は尖りまみ	ハラケズリ・ナダ 後腰ハラミガキ	口縁部密な横・ハラ ミガキ、体部ナダ	灰青色	密	劣、口縁部 欠損
56	小型壺	口 径10.7 最大径10.6 器 高 8.9	口縁と最大径はほぼ同じ。高錐的 な口縁部、腹部は丸く終わる	体部下半ハラケズ リ、上半ハケナダ 後腰ハラミガキ(下 平削、上半削)	口縁部ハケナダ後 放射状ハラミガ キ、体部ハケナダ 後ナダ	赤茶色	密	完存、口縁部 ~体部に黒斑
57	鉢	口 径12.3	張りの少ない体部、内溝込みに伴 ひる口縁部、端部は尖る	体部密な横ハラミ ガキ	ナダ	明褐色	やや粗	体部に黒斑
58	鉢	口 径13.9	半球形の体部、口縁部は直線的に 伸び、端部つまみ上げる	無いハラミガキ	ナダ	乳茶色	やや粗	
59	高杯	口 径13.6 厚 径 9.8 器 高9.65	半球形の体部に台形の縁部、口縁 部は外側する面、端部は尖り まみに丸く終わる	ハラナダ	ナダ	明褐色~赤 茶色	粗糲	完存、東部陶 戸内系?
60	台付鉢	口 径16.2 厚 径12.1 器 高11.7	半球形の体部に内側して窪く低い 脚台、口縁部は外傾し、端部つま み上げる	ナダ後腰部下平 脚部下平に密なヘ ラミガキ	ナダ	乳茶色	密	完存
61	甕	最大径20.8	扁平な倒卵形の体部	ハケナダ後肩部に 放射状ハラミガキ	下部ハラケズリ、 上半折れおさえ	乳茶色~明 褐色	やや粗	劣、複合口縁 部
62	甕	底 径 4.8	体部から突出しない平底	ハケナダ	ハラケズリ	淡茶褐色	やや粗	底部完存、古 墳系
63	甕	口 径15.8 最大径21.0 器 高23.1	倒卵形の体部、尖り底、「く」の字 形に外反する口縁部、端部はつま みあげ、外傾する面となる	右上りタタキ後ハ ケナダ	ハラケズリ	茶褐色	やや粗	ほぼ完存、外 面に擦付着
64	甕	口 径13.9 最大径18.3	球形の体部、「く」の字形に外反す る口縁部、端部はつまみあげ、外 傾する面となる	右上りタタキ後ハ ケナダ	ハラケズリ	暗褐色	やや粗	劣、外側体部 に擦付着

表8 溝を伴う造形（南東部の集積）出土遺物観察表一2 (65~68)

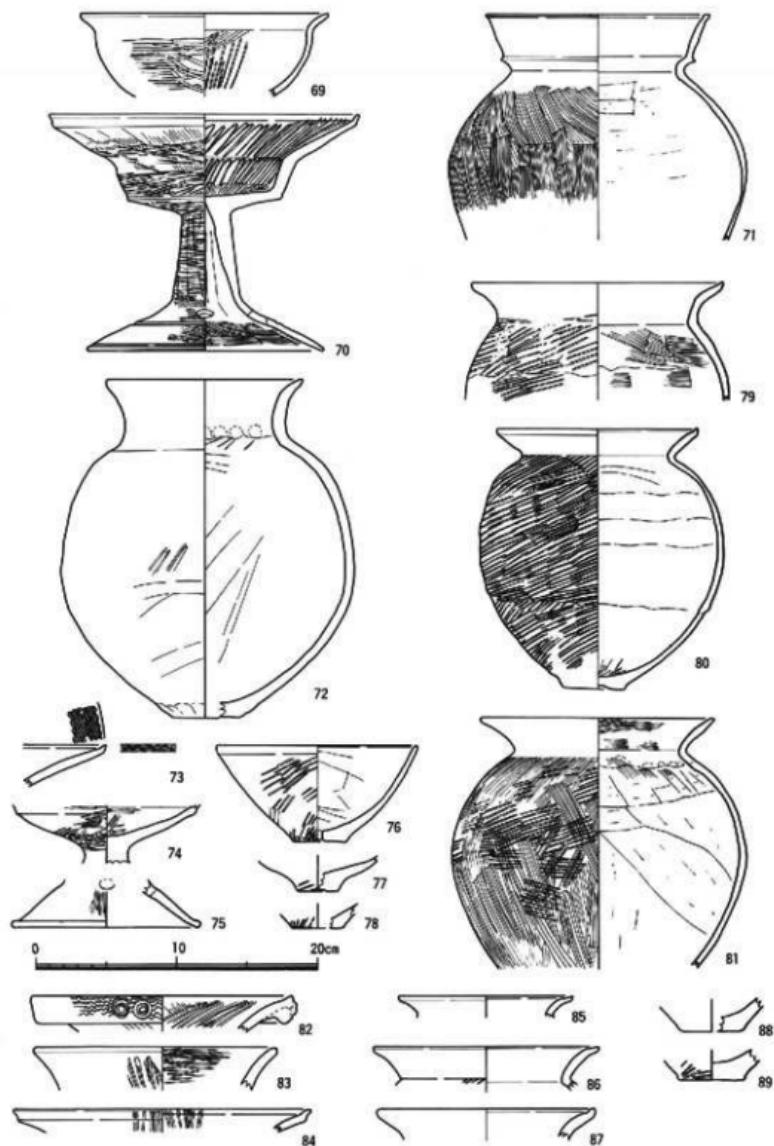
番号	器種	法量(cm)	形態	外因調整	内面構造	色調	胎土	備考
65	壺	口 径16.6	「く」の字形に外反する口縁部、端部は丸くつまみ上げられる	右上りタキ	ヘリケズリ	灰茶色	やや粗	口縁部另、外 面に焼付層
66	甕	口 径20.2	「く」の字形に外反する口縁部、端部はつまみ上げられる	右上がりタキ	口縁部ハケナデ	灰茶色	やや粗	
67	壺	口 径16.0 最大径20.1 器 高22.4	側部の体部、丸底、「く」の字形に外反する口縁部、端部は丸くつまみ上げられる	ハケナデ	口縁部ハケナデ、体部ヘラケズリ	外面淡茶色 内面乳灰色	密	ほぼ完存
68	甕	口 径15.2 最大径16.0	球形の体部、内消する口縁部、端部は内に肥厚し、水平平面となる	ハケナデ	口縁部ハケナデ、体部ヘラケズリ	淡茶色	密	体部外側に焼 付層

表9 土壤(3)出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形態	外因調整	内面構造	色調	胎土	備考
69	鉢	口 径17.7	半球形の体部、斜方へ開く口縁部、端部は丸みのある面を持つ	直な模ヘラミガキ	ナデ後放射状ヘラ ミガキ	淡茶灰色	やや粗	%
70	高杯	口 径21.85 柄 高16.55 器 高16.9	二段に屈曲する口部、両端は立ち上がる、中空の柱状部、柄に4個の円孔と2条の沈線	柱状部ヘラで留 取、杯・柱状部密 なヘラミガキ、端 部ハケナデ	新郎内面3段の放 射状ヘラミガキ、 柱状部絞り目、端 部ハケナデ	明褐色～淡 茶褐色	粘良	ほぼ完形
71	壺	口 径15.9 最大径11.3	後を持ち、二段に屈曲する口縁部は肥厚する	ハケナデ(上半粗、 下半密)	ヘリケズリ	乳灰色	やや粗	另、様・炭化 物付層

表10 土壤(4)出土遺物観察表一(72~76)

番号	器種	法量(cm)	形態	外因調整	内面構造	色調	胎土	備考
72	短颈壺	口 径13.9 最大径21.0 底 径 4.6 器 高24.0	球形の体部、突出しない平底、外 反する口縁部、端部は丸い	タキ後ナデ	ケズリ後ナデ	淡茶色	やや粗	
73	高杯	—	端部はつまみ上げられ、面を持つ、 内面口縁部・端部に燒造き痕状紋	ナデ微密なヘラミ ガキ	直なヘラミガキ	乳白色	密	
74	高杯	—	杯底部と口縁部の境に棱を持つ	ハケナデ後 ヘリミガキ	直なヘラミガキ	外側茶褐色 内側墨灰色	やや粗	
75	高杯	口 径14.5	端部は肥厚し、内傾する面を持つ 1孔残存	放射状ヘラミガキ	ナゲ	乳灰色	やや粗	
76	鉢	口 径14.6 底 径 3.8 器 高 6.7	碗形、口縁端部は尖る、わずかに 突出する平底、底部中央に円孔	右上りタキ	ハケ後ナデ	淡茶灰色	粗	另



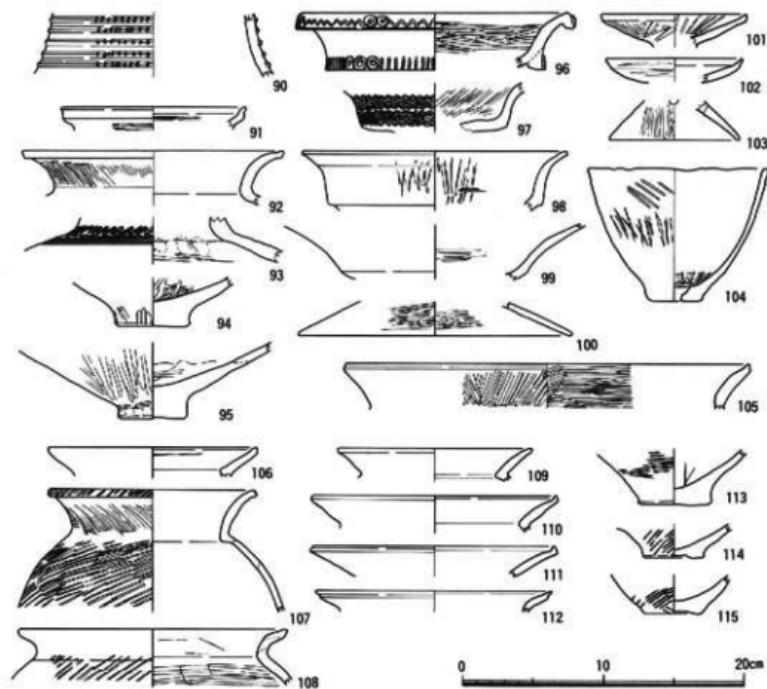
第20図 土壌（3）、土壌（4）、溝状造構（2）出土遺物実測図

表11 土壤(4)出土遺物観察表-2 (77~81)

番号	器種	法量(cm)	形 異	外側調整	内側調整	色 調	胎土	備考
77	鉢	底 径 2.8	体部から突出する上げ底	右上りタキ	不明	茶褐色	やや粗	
78	鉢	底 径 3.5	体部から突出しない平底	外側右上りタキ		黒茶色	粗	
79	甌	口 径18.2	丸く外反する口輪部、底部はわずかにつまみ上げられる	右上りタキ	ハケナデ	灰色~茶褐色	密	
80	甌	11 径14.3 底 径 4.3 最大径17.4 高 高18.7	蝶形の体部、わずかに突出する「 <u>丁</u> 」の字形に屈曲する口輪部、通常つまみ上げ	分割底、下半右上がりタキ。上下連續螺旋タキ	ナデ	茶灰色~黑色	粗	完形
81	甌	口 径16.65 最大径21.2	蝶形の体部、「く」の字形に屈曲する口輪部、端部尖る	下半左上りタキ 後粗いハケナデ、 上半右上りタキ 後細かいハケナデ	ヘラケズリ	茶褐色	粗	
82	広口甌	口 径18.6	外反する口輪部、端部は肥厚する波状紋+竹管押捺印跡	密なハラミガキ	密なハラミガキ	茶褐色	やや粗	
83	甌	口 径16.1	外傾する口輪部、端部は丸い	横ハラミガキ	横ハラミガキ	灰色	やや粗	
84	高杯	口 径21.3	口輪端部は外へつまみ出される	放射状ハラミガキ	放射状ハラミガキ	茶褐色	やや粗	
85	甌	口 径12.4	口輪端部はつまみ上げられる			明褐色	やや粗	
86	甌	口 径16.1	「く」の字形に外反する口輪部、底部はわずかにつまみ上げられる	右上りタキ		淡茶褐色	やや粗	口輪基部
87	甌	口 径15.4	丸く外反する口輪部、底部は丸くつまみあげられる			明褐色	やや粗	
88	甌	底 径 3.9	体部から突出しない平底	不明	ナデ	淡茶褐色	やや粗	外面に墨付有
89	甌	底 径 4.4	体部からわずかに突出する平底	右上りタキ	ヘラナデ	茶褐色	やや粗	

表12 溝状遺構(2)出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形 異	外側調整	内側調整	色 調	胎土	備考
82	広口甌	口 径18.6	外反する口輪部、端部は肥厚する波状紋+竹管押捺印跡	密なハラミガキ	密なハラミガキ	茶褐色	やや粗	
83	甌	口 径16.1	外傾する口輪部、端部は丸い	横ハラミガキ	横ハラミガキ	灰色	やや粗	
84	高杯	口 径21.3	口輪端部は外へつまみ出される	放射状ハラミガキ	放射状ハラミガキ	茶褐色	やや粗	
85	甌	口 径12.4	口輪端部はつまみ上げられる			明褐色	やや粗	
86	甌	口 径16.1	「く」の字形に外反する口輪部、底部はわずかにつまみ上げられる	右上りタキ		淡茶褐色	やや粗	口輪基部
87	甌	口 径15.4	丸く外反する口輪部、底部は丸くつまみあげられる			明褐色	やや粗	
88	甌	底 径 3.9	体部から突出しない平底	不明	ナデ	淡茶褐色	やや粗	外面に墨付有
89	甌	底 径 4.4	体部からわずかに突出する平底	右上りタキ	ヘラナデ	茶褐色	やや粗	



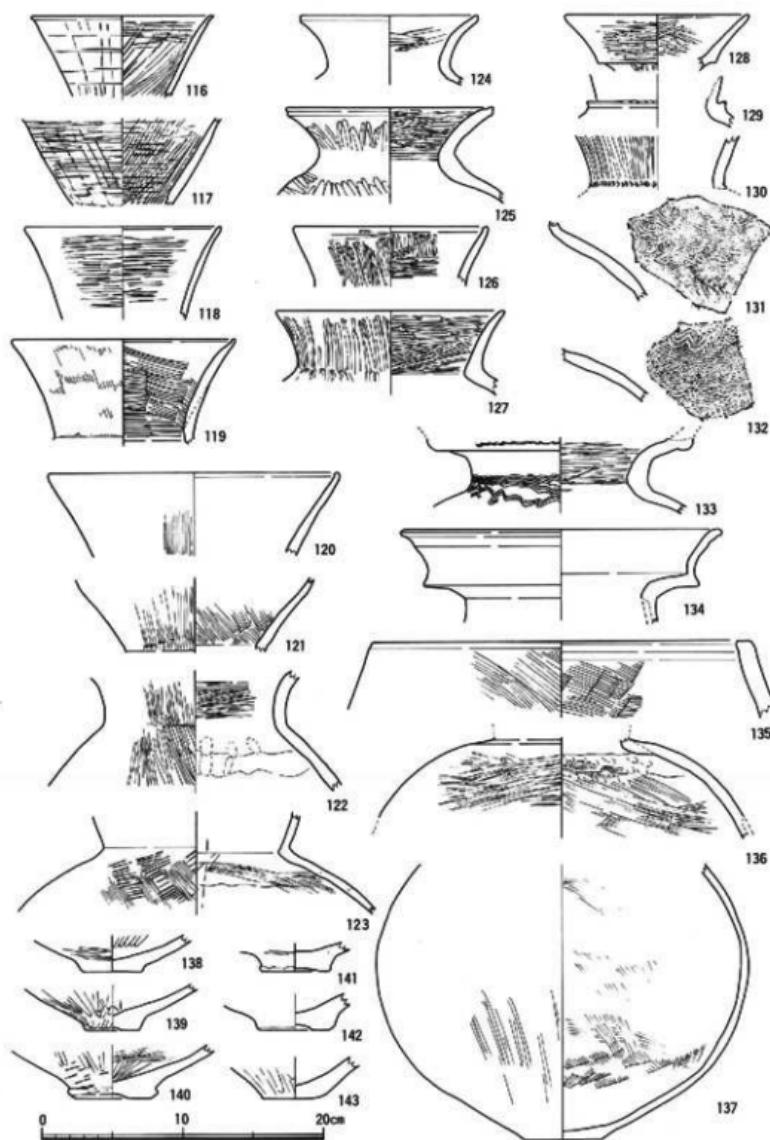
第21図 落ち込み出土遺物実測図

表13 落ち込み出土遺物観察表一 (90~93)

番号	部種	法量(cm)	形 態	外面調整	内面調整	色 調	粒土	備 考
90 17	壺	—	刻口付きの貼付凸縁り壺	ナデ	ナデ	淡茶色	粗	⑤壺 I様式新段階
91	壺	口 径13.0	屈曲して立ち上がる口縁部、 密な横ヘラミガキ	密な横ヘラミガキ	密な横ヘラミガキ	淡茶色	密	⑥壺
92 17	壺	口 径18.3	外反する口縁部、端部はつまみげ 面を持つ	ハケナデ	横ナデ	淡茶色	やや粗	⑦壺
93	壺	—	頸と肩の凹曲部に筋隔と波状紋と 直線紋	ヘラミガキ	ナデ、指おさえ	外面淡茶色 内面灰色	やや粗	⑧壺

表14 落ち込み出土遺物観察表—2 (94~108)

番号	器種	法量(cm)	形 無	外因構造	内因構造	色 標	胎土	備考
94 17	豆	底 径 5.3	体部から突出する平底	ヘラミガキ	ハケナダ後ヘラミ	乳灰褐色~墨 灰色	密	底部充存、④ 層
95	表 底 径 4.9	体部から突出する平底端部は丸み のある面を持つ	ヘラミガキ、底部 側面指捺記	ナデ	淡褐色	密	底部充存、④ 層	
96 17	器台 口 径19.3	口縁端面に2個1組の竹管押捺印 が浮き+壓搾き波状紋、唇部の 配付凸部に3個1組の竹管押捺印 紋+壓搾き列点紋		密な横ヘラミガキ	褐色~灰茶 色	やや粗	④層	
97 17	高杯		水平な杯底部から外反する杯縁、 外面に2条の壓搾き波状紋	ナデ	ナデ	乳茶色	やや粗	另、④層
98 17	高杯 口 径18.8	杯底部から外反する口縁部、端部 は外折する型となる	ヨコナダ後程い横 ヘラミガキ	ヨコナダ後程いへ ミガキ	淡灰褐色	粗	④層	
99	高杯	-	杯底部から外反する口縁部、	不明	密な横ヘラミガキ の痕跡	淡茶褐色~ 弱褐色	やや粗	④層
100	高杯	径 19.5	端部は丸く終わる	ハケナダ・密なヘ ラミガキの痕跡	ハケナダ・密なヘ ラミガキの痕跡	明褐色	密	④層
101	小型 器台	口 径10.3	浅い逆台形の受部、端部はつまみ 上げられ、丸みのある面を持つ	密なヘラミガキ	ヨコナダ後放射状 ヘラミガキ	乳茶色	やや粗	受部另、④層
102	小型 器台	口 径 9.7	浅い半球形の受部、端部はつまみ 上げられる	複数ヘラミガキ	ナデ後放射状ヘ ラミガキ	淡灰褐色	稍良	④層
103	小瓶 器台	高 径 9.35	複合形の口縁部、端部は尖る、1 孔残存	密な横ヘラミガキ	ナデ	淡褐色	密	④層
104 17	瓶	口 径12.6 底 径 4.0 高 高9.35 孔径0.5~1.0	浅い瓶形の体、器口部、体部から 突出する平底、腹中央に燒成前 の孔を持つ	左トリタタキの横 ヘケナダ・ナデ	ハケナダ、ナデ	淡茶褐色~ 淡褐色	やや粗	另、④層
105	大型瓶	口 径28.9	外反する口縁部、端部はつまみ上 げられ、直立する圓面となる	密な横ヘラミガキ	密な横ヘラミガキ	茶褐色	やや粗	④層
106	壺	口 径15.0	内汚ぎみに伸びる口縁部、端部は 丸くつまみ上げる			灰茶色	やや粗	④層
107 17	壺	口 径14.8	体部から外反する口縁部、端部は トへつまみ、外傾する面となる、 口縁部にヘラによる割み口	体部右上がりタタ キ口縁部ハケナダ	ナデ	淡茶色	やや粗	④層
108	壺	口 径18.9	体部から丸く外反する口縁部、端 部は丸く終わる	右上リタタキ	粗いハケナダ、ナ デ	淡茶色	やや粗	④層



第22図 VI層出土遺物実測図-1 (116~143)

表15 落ち込み出土遺物観察表-3 (109~115)

番号	器種	法量(cm)	形態	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
109	甕	口 径13.9	「く」の字形に外反する口縁部、端部はわずかにつまみ上げられる			灰黑色	やや粗	⑤層
110	甕	口 径17.5	「く」の字形に外反する口縁部、端部は丸くつまみ上げられ、面となる			淡灰茶色	やや粗	⑥層
111	甕	口 径17.1	「く」の字形に外反する口縁部、端部は丸くつまみ上げられ、外側する面となる			淡茶色	やや粗	⑥層
112	甕	口 径16.9	丸みを持って外反する口縁部、端部は上方へつまみだされる			茶褐色	やや粗	⑥層
113	甕	底 径5.25	体部から突出する平底	右上がりタタキ後 底面凹	ナゲ	茶褐色	やや粗	⑥層
114 17	甕	底 径4.3	体部から突出するドーナツ底	右上がりタタキ後 底面ナゲ	ナゲ	淡茶灰褐色 黒灰色	密	底部充てん、⑤ 層
115 17	甕	底 径4.05	体部から突出しない上げ底	右上がりタタキ後 底面ナゲ	ナゲ	外面乳灰色 内面褐色	やや粗	底部充てん、⑤ 層

表16 VI層出土遺物観察表-1 (116~122)

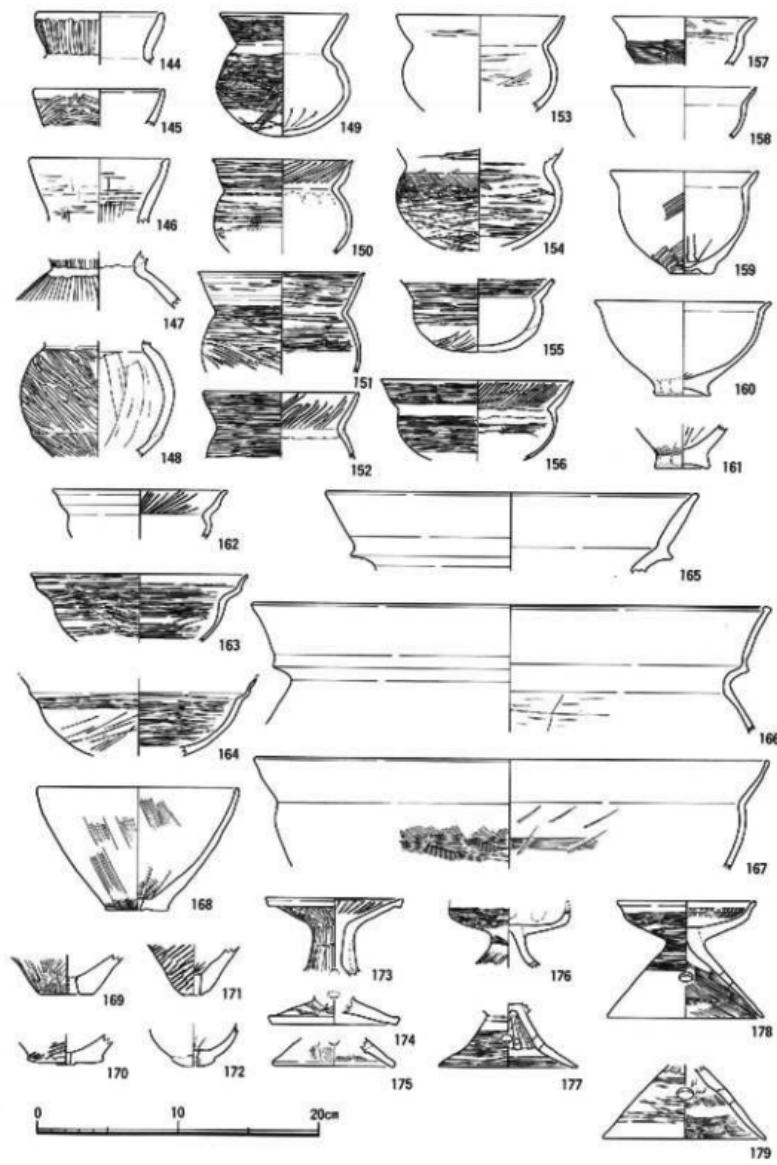
番号	器種	法量(cm)	形態	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
116	直口甕	口 径12.9 最大径	直線的に伸びる口縁部、端部は外へ丸くつまみだされる	ハケナデ+後側い横 ヘラミガキ	ハケナデ+上半部 な横ヘラミガキ、 下半放射状ヘラミ ガキ	淡茶色	密	
117	直口甕	-	わずかに内溝気味に伸びる口縁部	ハケナデ後唇な横 ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	淡茶色-明 褐色	密	
118	直口甕	口 径13.9	わずかに外反気味に伸びる口縁部、端部は丸くつまみ上げられる	密な横ヘラミガキ	密な横ヘラミガキ	淡茶色	密	
119	直口甕	口 径15.8	外反気味に伸びる口縁部、端部は丸くつまみ上げられる	ハケナデ後ナゲ	ハケナデ、体部に ヘラケズリ	淡茶色	やや粗	
120	直口甕	口 径20.4	内溝気味に伸びる口縁部、端部は内に巻き込む	ハケナデ		灰茶色	やや粗	
121	直口甕	-	内溝気味に伸びる口縁部	ハケナデ	ハケナデ	黄褐色	やや粗	
122	短颈甕	-	直立する頸部、外反する口縁部に外反する口縁部	密な横ヘラミガキ	口縁部直な横ヘラ ミガキ	外面乳茶色 内面茶褐色	やや粗	

表17 VI層出土遺物観察表-2 (123~137)

番号	器種	法量(cm)	形態	外観調査	内面調査	色調	胎土	備考
123	壺	-	内湾気味に立ち上がる腹部	右上がりタタキの後ハケナデ	ハケナデ	外面乳茶色 内面灰黑色	やや粗	
124	広口壺	II 径12.5	外反して聞く口縫部、縫部はつまみ上げられ、面を持つ	横ヘラミガキ				
125	広口壺	口 径14.9	体部から丸みをもって屈曲し、外反して聞く口縫部、縫部はつまみ上げられ、凹面を持つ	縫ヘラミガキ	横ヘラミガキ、指おさえ	乳灰色	やや粗	
17								
126	広口壺	口 径13.8	体部から内湾気味に伸びる口縫部、縫部は丸く立ち上がる	縫ナミヘラミガキ	縫ナミヘラミガキ 後下半に微な横ヘラミガキ	淡茶色	やや粗	
127	広口壺	口 径16.0	体部から「く」の字形に屈曲し、外反する口縫部、縫部は尖り気味	縫ヘラミガキ	口縫部直後ヘラミガキ、体部ナデ	淡茶色	やや粗	
128	複合 口縫壺	II 径12.9	屈曲部の枝は無い、口縫部は直線的に伸びる、縫部は丸く終わる	II縫部横ヘラミガキ 縫部放射状ヘラミガキ	直線部横ヘラミガキ	黄茶色	やや粗	
129	切削壺	-	体部と縫部の屈曲部に斜め背つき凸帯を貼り付ける	ナデ、ヨコナデ	ナデ	乳灰色	粗	
130	加輪壺	-	体部と縫部の屈曲部にヘラによる割込み目状	縫ヘラミガキ	ナデ	淡茶色	やや粗	
131	加輪壺	-	縫部に4条の縦引き波状紋	縫ヘラミガキ、ヨコナデ	指おさえ、ナデ	乳茶色	やや粗	
132	加輪壺	-	縫部に3条の縦引き波状紋と2条の横引き波状紋を交互に施す	縫ヘラミガキ	ナデ	外面乳茶色 内面灰黑色	やや粗	
133	複合 口縫壺	-	肩部から頸く外反する口縫部、複合口縫部は接合部で欠損、縫部に横引き波状紋3条	ナデ	口縫部直後ヘラミガキ、体部ナデ	淡灰茶色	粗	
17								
134	複合 口縫壺	口 径22.3	直立する縫部から水平に両いた後、斜面して外反する複合口縫部、縫部は外傾する面となる	不明	不明	明褐色	やや粗	
135	複合 口縫壺	口 径26.6	内斬する複合口縫部、縫部は水平な面となる	粗いハケナデ	粗いハケナデ	茶灰色	粗	
136	壺	-	半球形の肩部	ハケナデ後窓なヘラミガキ	指おさえ、ハケナデ	淡茶色	やや粗	
137	壺	径 5.3 17	球形の体部、わずかに突出する平底 最大径26.5	ヘラミガキ、底部側面ナデ、底面に木葉痕	ハケナデ、底部ナデ	外面黄茶色 内面灰黑色	やや粗	

表18 VI層出土遺物観察表一3(138~152)

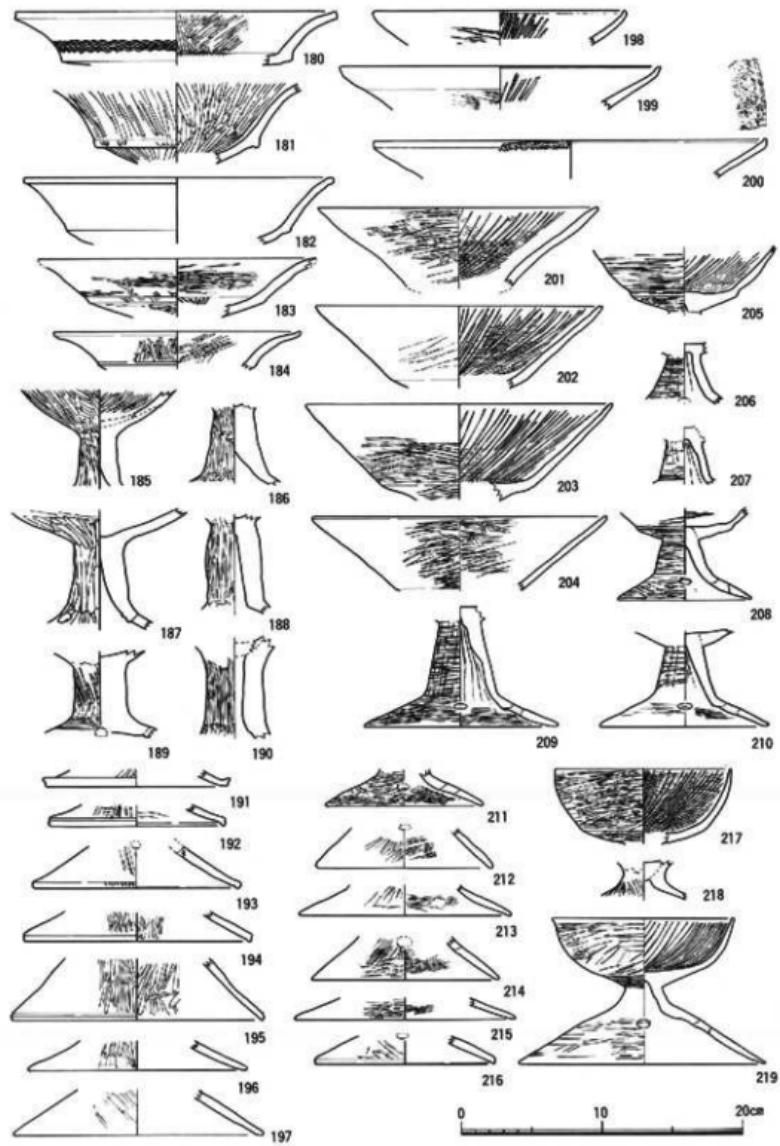
番号	基盤	法蓋(cm)	形態	外表面性状	内面調査	色調	胎土	備考
138	壺	底 径 4.4	体部から突出する平底	ナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	外面灰褐色 内面淡褐色	やや粗	底部完存、黒墨あり
139	壺	底 径 3.95	体部から突出するドーナツ底	審な放射状ヘラミガキ	ナデ	外型茶灰色 内面黒褐色	やや粗	底部完存
140	壺	底 径 5.2	体部から突出するドーナツ底	右上リタキ後、 放射状ヘラミガキ 後摺ヘラミガキ	無	黄茶色	やや粗	
141	壺	底 径 5.1	体部から突出する上げ底	ヘラミガキ、底部 横凹ナダ、本葉痕	くもの糸状のハケ の痕跡	灰黑色	やや粗	底部完存
142	壺	底 径 4.8	体部から突出するドーナツ底	ナデ	くもの糸状のハケ の痕跡	乳灰色	やや粗	底部完存
143	壺	底 径 4.35	体部から突出しない平底	ヘラミガキ、底部 ヘラケズリ	ナデ	淡茶褐色	やや粗	底部完存、外 底面に模様有
144	小型壺	口 径 8.0	体部から屈曲した後内側して立ち 上がる口縫部、端部はつまみ上げ、 内傾する面となる	ヨコナデ後横い模 ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ	黄茶色	やや粗	
145	小型壺	口 径 9.2	内側して立ち上がる右口縫部、端部 が丸く終わる	ヨコナデ後横い模 ヘラミガキ	ヨコナデ、ナデ	黄茶色	やや粗	
146	小型壺	口 径 9.7	高級的に立ち上がった後内側する 口縫部、端部は内傾斜する山となる	ナデ後横い模ヘラ ミガキの痕跡	審な横ヘラミガキ、 放射状ヘラミガキ	黄茶色	やや粗	
147	小型壺	-	肩部と口縫部の屈曲部のみ遺存	無い模ヘラミガキ 底部にヨコナデ	ナデ、ヨコナデ、 複合部に摺おさえ	乳茶色	やや粗	
148	小型壺	最大径10.9	蝶形の体部、底部の複合痕跡に 残る	ヘラミガキ	ナデ	乳灰色	やや粗	体部有
149	小型壺	口 径 9.0 最大径 9.6 器 高 8.8	口縫と腹縫はほぼ同じ、扁平な蝶 形の体部、直線的に伸びる口縫部、 端部は丸く終わる	底部ナデ、肩部ハ ケナデ後密な模ヘ ラミガキ	ナデ、ヨコナデ	淡茶色	やや粗	完存
150	小壺	口 径 9.9 最大径9.65 器 高 8.8	口縫と腹縫はほぼ同じ、口縫部は 内側し、端部は外へつまみ出され、 尖って終わる	ナデ・ハケナデ後 密な横ヘラミガキ	体部ナデ、口縫部 ヨコナデ後放射状 ヘラミガキ	明茶色	やや粗	口縫部有、体 部完存
151	小型壺	口 径11.8 最大径11.3	口縫と腹縫はほぼ同じ、口縫部は 直線的に伸び、端部はわずかに外 へつまみ出される	密な横ヘラミガキ	体部上平・口縫部 ハケナデ後密な模 ヘラミガキ、体部 下平ナデ	乳茶色	やや粗	
152	小壺	口 径11.1	丸みのある「く」の字形に屈曲し、 内側して伸びる口縫部、端部は尖 り気味に終わる	密な横ヘラミガキ	体部ナデ、口縫部 ヨコナデ後放射状 ヘラミガキ	乳茶色	やや粗	



第23図 VI層出土遺物実測図一2 (144~179)

表19 VI層出土遺物観察表一4 (153~167)

番号	器種	法量(cm)	形態	外面調査	内面調査	色調	胎土	備考
153 18	小鉢	口 径11.9 最大径10.8	口径と腹径はほぼ同じ、口縁部は内凹して伸び、縁部は丸く終わる	口縁部になじむ横 ヘラミガキの痕跡	体部ハケナデの痕 跡	乳茶色	やや粗	
154	小型鉢	最大径11.7	口径と腹径はほぼ同じ、口縁部は内凹する	体部下平ハラケズ リ、上半ハケナデ 後ヘラミガキ	ナデの後横ヘラミ ガキ	淡茶色	やや粗	
155	小型鉢	最大径9.25	口径は腹径を凌ぐ、体部は半球形、 口縁部は直線的に伸びる	体部下平ハラケズ リ	体部ナデの後横ヘ ラミガキ	乳灰色	やや粗	
156 18	小型鉢	口 径13.8 最大径11.3	口径は腹径を凌ぐ、体部は半球形、 口縁部は内凹し、縁部は尖る	ヨコナデ後密な横 ヘラミガキ	体部ハケナデ後ナ デ、口縁部密な横 ヘラミガキ後放射 状ヘラミガキ	茶褐色	密	
157	小型鉢	口 径10.2	体部に稜を持つ、口縁部は外反し て伸び、縁部は丸く終わる	ハケナデ	体部ハラケズリ、 口縁部ハケナデ	淡灰色	やや粗	体部に黒斑
158	小型鉢	口 径10.3	半球形の体部、口縁部は内凹気味 に伸び、縁部は尖る	ナデ	ナデ	淡茶色	やや粗	体部に黒斑
159	小型鉢	口 径10.05 底 径 3.15 器 高 7.3	深い下厚形の体部、底部は突出す るドーナツ底、口縁部は内凹気味 に伸び、縁部は尖る	右上りタッキ、底 面に本茎底残る	ナデ	灰茶色	やや粗	下半充
160 18	小型鉢	口 径12.4 底 径 4.0 器 高 6.7	碗形の体部、底部は突出する上げ 底、口縁部は外反し、縁部は丸く 終わる	ナデ、底側面倒お さえ	ナデ	淡茶灰色	やや粗	下半充
161	小型鉢	底 径 3.9	体部から突出する上げ底	ハケナデ、底側面 倒おさえ	ナデ	乳灰色	やや粗	
162	小型鉢	口 径11.8	体部から二段に屈曲する口縁部、 縁部は尖り氣味で終わる	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ後 放射状ヘラミガキ	暗青茶色	密	
163 18	小型鉢	口 径15.5	深い半球形の体部から二段に屈曲 する口縁部、縁部は尖り氣味で終 わる	体部下平ハラケズ リ後密な横ヘラミ ガキ	密な横ヘラミガキ	淡茶色	精良	
164	小型鉢		半球形の体部から二段に屈曲する 口縁部、縁部は欠損	体部下平ハラケズ リ後上半密な横ヘ ラミガキ	密な横ヘラミガキ	淡茶色	密	
165	大型鉢	口 径26.5	外に長い棱を持って屈曲した後、 直線的に伸びる口縁部、縁部はつ まみ上げ氣味で水平な面を持つ	ヨコナデ	ヨコナデ	淡乳茶色	やや粗	
166 18	大型鉢	口 径36.9	外に棱を持って屈曲した後、外反 して伸びる口縁部、縁部はわずか に肥厚し、丸みのある面を持つ	ヨコナデ	体部ハラケズリ	外面灰色 内面茶灰色	密	
167 18	大型鉢	口 径36.6	半球形の体部から内凹して伸びる 口縁部、縁部は外翻する間となる	底ハケナデ後横ハ ケナデ	ハケナデ後ナデ	淡茶色	密	



第24図 VI層出土遺物実測図－3 (180~219)

表20 VI層出土遺物観察表－5(168～182)

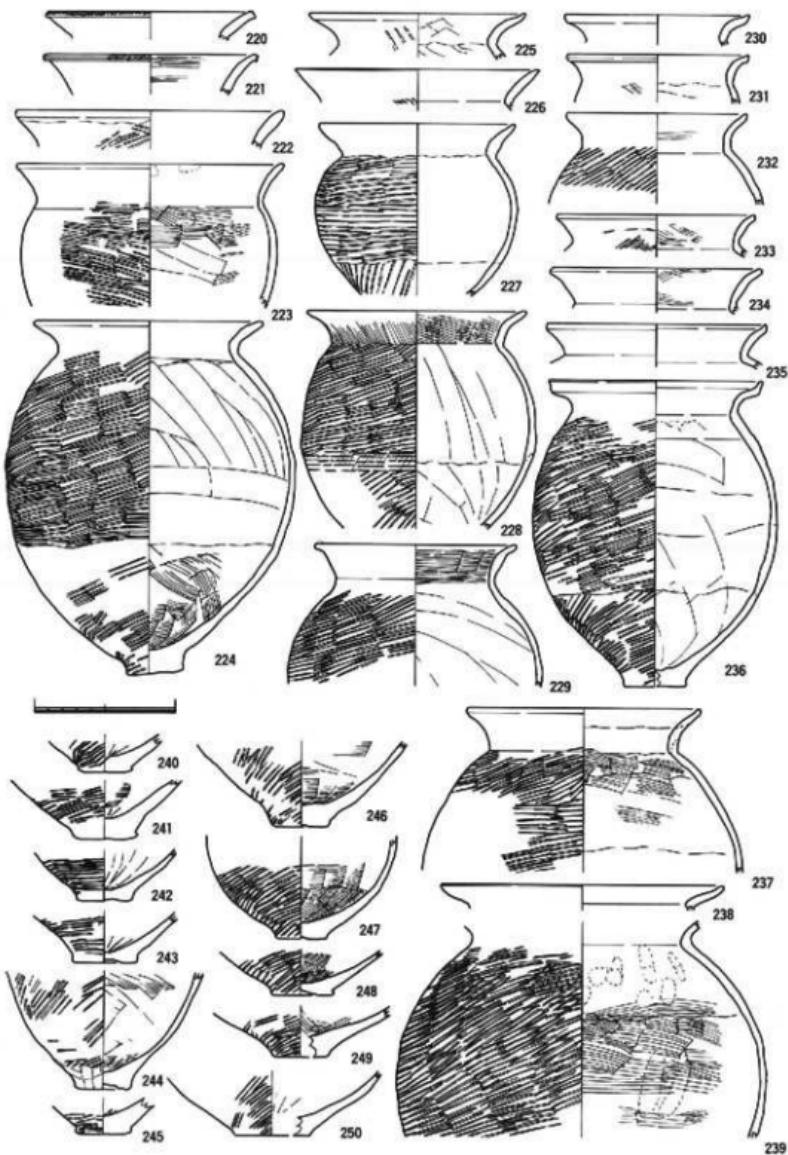
番号	器種	法量(cm)	形 種	外観調査	内面観察	色 調	計上	備考
168	有孔鉢	口 径14.1 底 径4.45 器 高 8.9 孔 徑0.5-0.7	造形の底部からわずかに突出する平底、焼成前の穿孔	右上りタタキ後ハ ケナデ	ハケナデ、底部にくもの巣状のハケ の圧板	淡茶灰色	やや粗	
169	有孔鉢	底 径 4.0 孔 径0.5-0.6	体部から突出しない平底、焼成前の穿孔	ヘラミガキ、底面 ナデ	ナデ	淡茶灰色	やや粗	
170	有孔鉢	底 径 5.5 孔 径 1.3	体部から突出する平底、焼成前の穿孔	右上りタタキ、底 側面-底面ナデ	ナデ	淡黄茶色	やや粗	
171	有孔鉢	孔 径 1.1	尖り底、焼成前の穿孔	右上りタタキ	底部にくもの巣状 の工具痕	淡茶色	粗	底部完存
172	有孔鉢	孔 径0.3-0.5	丸い体部からわずかに突出する底、 焼成前の穿孔	ナデ	底部にくもの巣状 の工具痕	底白色	審	
173	小型 器台	11 径 9.7	小空の脚柱部から直線的に聞く受部、 底部は上下につまみだされ外 傾する四面となる、脚柱下部に1 孔残存	底面ヘラミガキ	ヨコナデ後受部に 放射状ヘラミガキ	外面茶褐色 内面黃褐色	やや粗	柱状脚部定存
174	小型 器台	横 径 8.8	脚柱部から直線的に聞く受部、船 部は上下につまみだされ外傾する 面となる、脚柱下部に1孔残存	密な品向面ヘラミ ガキ	ナデ	淡茶色	審	
175	小型 器台	横 径 8.5	直線的に聞く受部、底部は丸みの ある面となる、1孔残存	ハケナデ	ハケナデ	明黄褐色	やや粗	
176	小型 器台	-	受部は水平な底から内傾して立ち 上がる、脚柱部は外反する、3孔 を持つ。(2孔残存)	受部密な横ヘラミ ガキ、船筋密な丸 方向ヘラミガキ	受部ヨコナデ、 底ヨコナデ	淡茶色-黑 褐色	審	口縁部-脚 部欠損
177	小型 器台	横 径 9.9	水平な受部底から外反する脚柱 部、船筋は尖る。1孔を持つ	ヘラによる面取り 後下下に密な横ヘ ラミガキ	上半に絞り目道 存、下半ナゲ後密 な横ヘラミガキ	淡茶色-明 褐色	審	脚部ほぼ完存
178	小型 器台	11 径 9.7 器 高 11.2	浅い皿形の受部、口縁部は外反し 脚部は丸く終わる、底部は逆三角 形、船筋は尖る。4孔を持つ	ナゲ後受部-底部 上半に密な横ヘ ラミガキ	受部ヨコナデ後放 射状ヘラミガキ、 底部ハケナデ	明褐色	審	受部完存、器 身
179	小型 器台	横 径11.5	底部内溝気味に聞く逆三角形、 船筋は尖り気味に丸く終わる。4 孔を持つ。(3孔残存)	ハラケズリ後粗い 横ヘラミガキ	ハラケズリ後下半 ハケナデ	明褐色	審	
180	高杯	口 径22.8	杯底部から外に後を持ち、外反す る口縁部、底部はつまみ上げ、外 傾する面となる。口縁下部に船筋 を波状紋	ナデ、ヨコナデ	ヘラミガキ	乳白色	審	
181	高杯	-	外に凸状の棱を持ち、外反する 口縁部	ヘラミガキ、棱付 近はヨコナデ	ヘラミガキ	淡灰茶色	やや粗	杯縁部、口縁 部欠損
182	高杯	口 径21.5	外にぬい縁を持ち、外反する口縁 部、底部は丸みのある面をもつ	ナデ・ヘラミガキ の痕跡	ナデ・ヘラミガキ の痕跡	淡灰茶色	やや粗	

表21 VI層出土遺物観察表-6(183~197)

番号	器種	法量(cm)	形態	外面調整	内部調整	色調	胎土	備考
183	高杯	-	外に無い縁を持ち、外反する口縁部、端部は欠損	ヘラミガキ、後付 近はヨコナデ	口縁部横ヘラミガキ、杯底部放射状 ヘラミガキ	外面茶褐色 内部灰茶色	やや粗	
184	高杯	口 径17.3	外に無い縁を持ち、外反する口縁部、端部はつまみ上げ、丸みのある面となる	ヘラミガキ、後付 欠損近はヨコナデ	ハケナデ後ヘラミ ガキ	灰茶色	やや粗	外面に黒度
185	高杯	-	半球形の杯底部、中空の脚柱状器	密なヘラミガキ	杯部放射状ヘラミ ガキ	淡茶色-黒 褐色	やや粗	柱状部完存、 杯底部汚
186	高杯	-	中空の脚柱状器から外反して聞く 部位へ至る	密なヘラミガキ	続り日、ナデ	灰茶色	やや粗	柱状部文存
187	高杯	-	浅めで直線的な杯底部、中空の脚 柱状器から外反して部位へ至る、 3孔を持つ	杯部上位横ヘラミ ガキ、下位・部位 放射状ヘラミガキ、 柱状部横ヘラ ミガキ	杯部杯部ヘラミ ガキの痕跡、柱状部 続り日、ナデ	乳白色	やや粗	柱状部完存
188	高杯	-	中空の脚柱状部、内に縁を持って 部位へ至る	密な縫ヘラミガキ	柱状部続り日、部 位ハケナデ	乳茶色	やや粗	柱状部完存
189	高杯	-	中空の脚柱状部、杯底部・部位は 水平近く大きく開く、1孔残存	杯底部ナデ、柱状 部密な縫・部位密 な縫ヘラミガキ	杯底部ヘラミガキ 締結ナデ	灰茶色	やや粗	%
190	高杯		中空の脚柱状部	密な縫ヘラミガキ	部位・杯底部ナデ	乳茶色	やや粗	%
191	高杯	柄 径12.9	外反する部位、端部は上へつま 上げられ、外傾する面となる	粗い放射状ヘラミ ガキ	不明	淡茶色	やや粗	
192	高杯	柄 径12.3	外反気味の端部、端部は下へつま まれ、側面には沈縫が一列する	放射状ヘラミガキ	ナデ	淡茶色	素	
193	高杯	柄 径14.3	直線的に聞く部位、端部は下へ丸 くつまれ、上端面には削み目が 施される、1孔残存	ヘラミガキ	不明	淡黄茶色	やや粗	
194	高杯	柄 径16.0	直線的に聞く部位、端部は下へわ ずかにつまれ、凹面となる	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明褐色	やや粗	
195	高杯	柄 径17.6	外反気味に聞く丈高的部位、端部 は下へわずかにつまれ、上端に 沈縫状のくぼみが一列する	粗いヘラミガキ	粗いヘラミガキ	淡茶色	やや粗	
196	高杯	柄 径15.3	外反50度に聞く部位、端部は丸く 終わる	密なヘラミガキ	ナデ、ヨコナデ	淡茶色	やや粗	
197	高杯	柄 径17.6	直線的に聞く部位、端部は丸く終 わる	密なヘラミガキ	ナデ、ヨコナデ	淡茶色	やや粗	

表22 VI層出土遺物觀察表一7(198~212)

番号	器種	法量(cm)	形 異	外観調査	内面調査	色 調	胎土	備考
198	高杯	II 径17.9	内溝気味に開く杯口縁部、端部はつまみ上げられる	密な横ヘラミガキ	帶な放射状ヘラミガキ	淡茶色~灰黒色	青	
199	高杯	口 径22.5	直線的に開く杯口縁部、端部はつまみ上げられ、水平な面となる	密な横ヘラミガキ	帶な放射状ヘラミガキ	淡茶色	やや粗	
200	高杯	口 径32.8	直線的に開く杯口縁部、端部はつまみ上げられ、外に直立する面となる、側面に細縫き波状紋			灰白色	青	
201	高杯	口 径19.9	外反して大きく開く杯口縁部、端部は尖る	ハケナデ後密な乱方向ヘラミガキ	ハケナデ後密な放射状ヘラミガキ	茶灰色	粗良	
202	高杯	IJ 径20.2	杯底部から丸く屈曲し、直線的に大きく開く杯口縁部、端部は尖り気味に丸く終わる	下半ハラケズリ後 亂方向ヘラミガキ	ハケナデ後密な放射状ヘラミガキ	外側茶褐色 内面青灰色	粗良	外面に黒斑
203	高杯	II 径21.9	水平な杯底部から丸く屈曲し、直線的に大きく開く杯口縁部、端部は尖る	杯底部~口縁部下 手ヘラケズリ後密	ハケナデ後密な放射状ヘラミガキ	外側茶褐色 内面青灰色	青	
19								
204	高杯	II 径20.7	直線的に大きく開く杯口縁部、端部はつまみ上げ気味に丸く終わる	密な乱方向ヘラミガキ	ハケナデ後密な乱方向ヘラミガキ	外側茶褐色 内面青灰色	青	内面に黒斑
205	高杯	—	水平な杯底部から優しく持てて屈曲し、内溝気味に開く杯口縁部	杯底部ヘラケズリ 後密な後ヘラミガキ	ヨコナデ後密な放射状ヘラミガキ	茶灰色	粗良	杯底部充存
206	高杯	—	杯底部から外反して開く脚部、1孔残存	ヘラによる面取り 後横ヘラミガキ	絞り目	乳茶色	青	柱状部充存
207	高杯	—	杯底部から直線的に開く脚部、内に優しく持てて端部へ至る	ヘラによる面取り 後横ヘラミガキ	柱状部に絞り目	淡茶色	青	柱状部充存
208	高杯	招 径9.6	水平な杯底部から優しく持てて屈曲し、口縁部に單る、脚部は外反して開き、端部は尖る、4孔を持つ	密な横ヘラミガキ	ナデ、II脚部に密 ヘラミガキの痕跡	茶灰色	粗良	脚部充存
19								
209	高杯	招 径13.95	水平な杯底部、脚部状部は直線的に開き、内溝気味に開く脚部に至る、4孔を持つ	柱状部ヘラによる 面取り後密に密	柱状部に絞り目、 脚部にハケナデ	茶褐色	青	脚部充存
19								
210	高杯	招 径12.1	直線的に開く尖窓の脚柱部から屈曲し、直線的に開く脚部に至る、4孔を持つ	柱状部ヘラによる 面取り後密に密	柱状部に絞り目、 脚部にハケナデ	淡茶灰色	粗良	脚部以上
19								
211	高杯	招 径10.9	脚柱状部から丸く屈曲し、内溝して開く脚部に尖る、端部は尖り気味に終わる、1孔残存	ハケナデ後密な乱 方向ヘラミガキ	ハケナデ	茶褐色	青	
212	高杯	招 径21.3	内溝気味に開く尖窓の脚部、端部は丸く終わる、1孔残存	乱方向ヘラミガキ	ハケナデ	明褐色	青	



第25図 VI層出土遺物実測図—4 (220~250)

表23 VI層出土遺物観察表－6 (213~227)

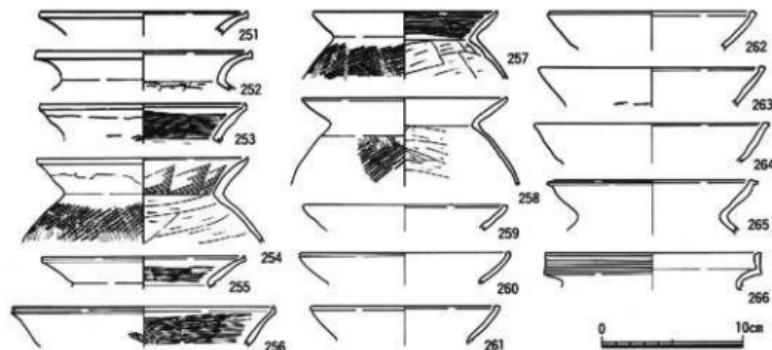
番号	器種	法量(cm)	形 動	外觀調査	内面調査	色 質	胎 土	備考
213	高杯	杯 径15.0	外反気味に聞く扁平な縁部、端部は尖り気味に終わる	放射状ヘラミガキ	ハケナデ	外面灰褐色 内面黄褐色	やや粗	
214	高杯	杯 径13.0	直線的に聞く尖高の縁部、端部は尖り気味に丸く終わる。1孔残存	上平放射状、下平 底ヘラミガキ	ハケナデ	黄茶色	密	
215	高杯	杯 径15.5	直線的に聞く扁平な縁部、端部は下へつまれ、側面に沈線状のくぼみが現れる。1孔残存	密な乱方向ヘラミ ガキ	ハケナデ	茶褐色	密	
216	高杯	杯 径12.5	内湾気味に聞く扁平な縁部、端部は下へつまれ、側面に沈線状のくぼみが現れる。1孔残存	粗い乱方向ヘラミ ガキ	ナデ	黄褐色	密	
217	高杯	口 径12.5	輪型の杯部、縁部は尖る	杯底部ヘラケズリの後全体を密な乱 方向ヘラミガキ	ハケナデ後溶た放 射状ヘラミガキ	淡赤茶色	精良	
218	高杯		外反して聞く脚高	密なヘラミガキ		黄茶色	精良	
219	高杯	口 径12.5 杯 径17.65 器 高10.4	柄型の杯部、縁部は外へわざかに つまれ、尖り気味に丸く終わる。 縁部は内湾気味に大きく聞く。1 孔を持つ	杯底部～脚頂部へ ラケズリの後全体 を粗い乱方向ヘラ ミガキ	ヨコナデ後溶た放 射状ヘラミガキ	淡灰色～赤 茶色	精良 ほぼ完存	
220	甕	口 径14.5	外反する口縁部、縁部は外傾する 面となる。縁部上面にヘタによる 沈線 細目紋	ヨコナデ	ヨコナデ	黄茶色	やや粗	
221	甕	口 径14.7	外反する口縁部、縁部は直立する 面となる。端部にヘタによる沈線 細目紋	ヨコナデ	ハケナデ	淡茶色	粗	
222	甕	口 径19.0	外反する口縁部、縁部は直立する 丸みのある面となる	右上りタキ	ヨコナデ	淡赤茶色	やや粗	
223	甕	口 径18.9 最大径18.3	張りの少ない体部から丸く外反す る口縁部。縁部は丸く終わる	水平～左上りタキ 牛	粗いハケナデ	茶褐色	粗	
224	甕	口 径12.9 最大径20.0 底 径 3.8 器 高25.2	輪形容の体部から丸く外反する口 縁部。縁部は丸みのある出となる。 底部は突出する平底	分割成形左上りタ キ、接合部以下 ナデ	ナデ、接合部以下 ハケナデ	外面茶褐色 内面茶灰色	やや粗 ほぼ完存、外 面黒付着	
225	甕	口 径15.3	丸く外反した後内凸する口縁部、 縁部はつまみ上げられる	左上りタキ	ナデ	淡赤褐色	やや粗	
226	甕	口 径17.4	直線的に聞く口縁部。縁部は尖り 気味に終わる	左上りタキ	ヨコナデ	赤茶色	やや粗	
227	甕	口 径18.7 最大径14.5	輪形容の体部から丸く斜曲し、内 湾気味に聞く口縁部。縁部は尖り 気味に丸く終わる。	分割成形、水平一 片下りタキ、 接合部以下右上り タキ	ナデ	白灰色	やや粗 底部欠損	
20								

表24 VI層出土遺物観察表一9(228~242)

番号	器種	法量(cm)	形 態	外周調整	内周調整	色 横	胎土	備考
228 226	甕	口 径16.0 最大径16.6	側卵形の体部から外傾した後外折して聞く口縁部、端部は丸く終わる	分割成形、右上りタタキ、接合部に水平タタキ後ハケナダ	ナデ、口縁部ハケナデ	外周明灰褐色、内周乳灰色	やや粗	外面に擦付着
20								
229 20	甕	口 径14.2 最大径16.1	外傾した後外折して聞く口縁部、端部は丸く終わる	分割成形、右上りタタキ、接合部にナダ	ナデ、口縁部ハケナデ	淡灰色~明褐色	やや粗	
230	甕	口 径15.1	外反する口縁部、端部はつまみ上げられる	ヨコナデ	ヨコナデ	暗褐色	やや粗	
231	甕	口 径12.9	張りの少ない体部から、丸く屈曲する口縁部、端部はつまみ上げられ、沈堆が一列する	ハケナデ	指おさえ、ヨコナデ	外周灰茶色	やや粗	
232	甕	口 径12.8	体部から直立した後外折する口縁部、端部はつまみ上げられ、直立する面となる	分割成形、右上りタタキ	ナデ、ヨコナデ	乳白色	やや粗	
233	甕	口 径13.9	体部から外反する口縁部、端部は直立する面となる	右上りタタキ	ハケナデ	外周黑褐色 内周淡茶色	やや粗	
234	甕	口 径14.7	体部から外反する口縁部、端部は外傾する面となる	ヨコナデ	ハケナデ	淡茶色	やや粗	
235	甕	口 径15.6	体部から外反する口縁部、端部はつまみ上げ、外傾する面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	暗赤茶色	やや粗	
236 20	甕	口 径15.0 最大径17.3 底 径 4.4 高 度 22.0	倒卵形の体部から外反する口縁部、端部は直立し、円錐となる。底部は突出する平底	分割成形、右上りタタキ、接合部ナダ	ナデ、指おさえ	外周茶褐色 内周淡茶色	やや粗	以上、外面に擦付着
237 20	甕	口 径16.5	体部から直立した後内済時に聞く口縁部、端部はつまみ上げられ、丸みのある面となる	右上りタタキ、	ナデ、ハケナデ	外周茶灰色 内周明褐色	やや粗	外面に擦付着
238	甕	口 径20.2	内済気味に聞く口縁部、端部はつまみ上げられ、水平な面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色	やや粗	外向に擦付着
239	甕	最大径26.3	張りの強い大型の体部	右上りタタキ	指おさえ、ナデ、ハケナデ	黄茶色	やや粗	外周下部に擦付着
240	甕	底 径 3.5	体部からわずかに突出する平底、内底面は丸くくぼむ	右上りタタキ、底面ナダ	ナデ	赤茶色	やや粗	
241	甕	底 径 3.4	体部からわずかに突出する平底	水平~右上りタタキ、底側面~底面ナダ	ハケナデ、ナデ	外周茶褐色 内周黑灰色	やや粗	以上
242	甕	底 径 3.8	体部から突出する平底、外底面はわずかにくぼむ	水平~右上りタタキ、底側面~底面ナダ	ナデ	黒褐色	やや粗	底部充存

表25 VI層出土遺物観察表-10(243~257)

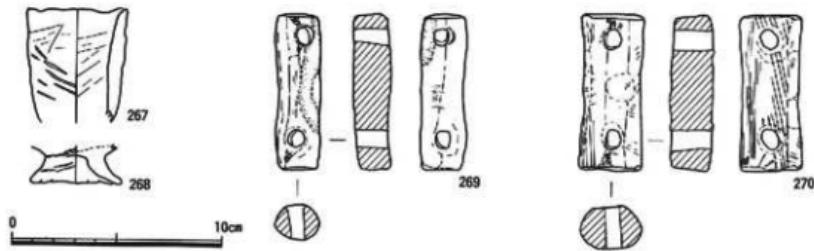
番号	器種	法量(cm)	形態	外側調整	内側調整	色調	施上	備考
243	壺	底 径 4.7	体部から突出するドーナツ底	水平タキ、底側面～底面ナデ	ナデ	淡灰茶色	やや粗	底部充存
244	壺	底 径 3.5	張りの少ない体部から突出するドーナツ底	分割成形、右上りタキ、ナデ、底側面ヘラによる削取り後ナデ	ハケナデ、ナデ	外面白灰色 ～明褐色 内面切削色	やや粗	
245	壺	底 径 3.5	体部から突出する平底	右上りタキ、底側面ヘラの圧痕、底面ナデ	ナデ	外面赤茶色 ～淡茶色 内面淡灰色	やや粗	底部充存、内面に無化物付着
246	壺	底 径 3.8 20	張りの大きい体部から突出する平底、外底面はわずかにくぼむ	分割成形、右上りタキ、底面ナデ	ハケナデ	外面赤茶色 内面灰茶色	やや粗	
247	壺	底 径 3.65 20	球形の体部から突出する小さい平底、外底面はわずかにくぼむ	分割成形、右上りタキ、底面・接合部ナデ	ハケナデ	外面赤茶色 内面淡茶灰色	やや粗	底部充存
248	壺	底 径 4.45	張りの大きい体部から突出するドーナツ底	右上りタキ、底面ヘラケズリ	ハケナデ	外面赤茶色 内面黄灰色	やや粗	底部充存
249	壺	底 径 3.8	張りの大きい体部から突出する	右上りタキ	ハケナデ	外面赤茶色 内面茶褐色	やや粗	
250	壺	底 径 5.3	張りの大きい体部からわずかに突出する	右上りタキ	ナデ	淡茶色	やや粗	
251	壺	口 径 4.1	外反する口縁部、端部はつまみ上げられ、外傾する面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	外面黒灰色 内面茶褐色	やや粗	外面に漆付着
252	壺	口 径 15.1	内に棱を持ち、強く外反する口縁部、端部はつまみ上げ、面を持つ	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	淡茶灰色	やや粗	
253	壺	口 径 14.6	内に棱を持ち、外反する口縁部、端部はつまみ上げ、面を持つ	ヨコナデ	ハケナデ	茶褐色	やや粗	
254	壺	口 径 15.2	内に棱を持ち、外傾した後外反する口縁部、端部は丸くつまみ上げられ、立ち上がる	口縁部ヨコナデ、体部右上りタキ後ハケナデ	口縁部ハケナデ、体部ヘラケズリ	淡茶褐色	やや粗	口縁部
255	壺	口 径 14.3	体部から「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部、端部はつまみ上げられ、凹凸となる	ヨコナデ	ハケナデ	淡茶色	やや粗	
256	壺	口 径 18.5	内湾気味に開いた後外反する口縁部、端部は著しくつまみ上げられ、凹凸となる	ヨコナデ、ハケナデ	ハケナデ	淡茶色	やや粗	
257	壺	口 径 13.3 20	体部から「く」の字形に屈曲し、内湾気味に開いた口縁部、端部はわずかにつまみ上げられ、丸みのある面となる	右上りタキ後ハケナデ	口縁部ハケナデ、体部ヘラケズリ	淡灰色	やや粗	



第26図 VI層出土遺物実測図-5 (251~266)

表26 VI層出土遺物観察表-11(258~266)

番号	器種	法栄(cm)	形 異	外面彫痕	内面彫痕	色 囲	胎土	備 考
258	甕	口 径14.6	体部から「く」の字形に屈曲し、内湾気味に開く口縁部、西部は丸みのある面となる	右上りタキ後ハケナデ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	茶褐色	やや粗	
259	甕	口 径14.2	内湾気味に開く口縁部、南部は巻また、外傾する面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	外表面灰褐色 内面灰茶色	やや粗 外側に漆付着	
260	甕	口 径14.7	内湾する口縁部、西部は巻き込まれ、外傾する丸みのある面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	外表面黒灰色 内面灰茶色	やや粗 外側に漆付着	
261	甕	口 径13.1	内湾する口縁部、端部は内にわずかに肥厚し、外傾する面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	外表面黒灰色 内面灰茶色	やや粗 外側に漆付着	
262	甕	口 径14.4	内湾する口縁部、端部は内に肥厚し、外傾する面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白色	やや粗	
263	甕	口 径15.5	直線的に伸びる口縁部、端部は肥厚し、水平な面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	外表面褐色 内面灰茶色	やや粗	
264	甕	口 径16.6	直線的に伸びる口縁部、端部は肥厚し、水平な面となる	ヨコナデ	ヨコナデ	灰茶色	やや粗	
265	甕	口 径13.9	体部から丸く屈曲し、内湾して開く口縁部、端部は肥厚し、外傾する面となる	ヨコナデ	口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	淡灰茶色	やや粗	
266	甕	口 径15.2	体部から丸く屈曲した後外反し、上方へ拡張する口縁部、端部側面に唇引き直線状	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶灰色	やや粗 古檜系	



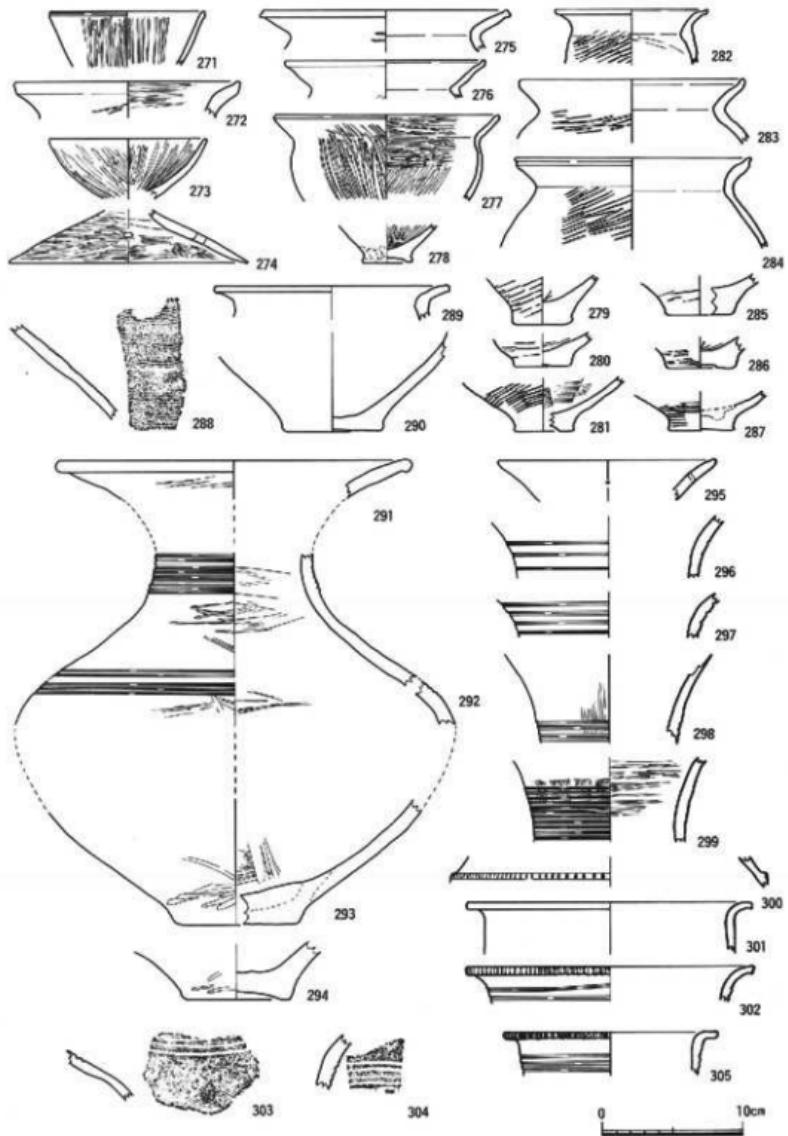
第27図 VI層出土遺物実測図-6 (267~270)

表27 VI層出土遺物観察表-12(267~270)

番号	器種	法量(cm)	形・黒	外面調査	内面調査	色・調	胎土	備考
267	製塙 土器?	口 径 4.6	橢形の体部、丸底、腹口縁	左上リタキ、ヘラケズリ	ヘラケズリ	乳灰色	密	
268	製塙 土器?	幅 径 4.1	「」の字形に開く高台状の脚台 つまみ上げられ、水平な面となる	右上リタキ、指おさえ	不明	黒灰色~赤 茶色	やや粗	二次焼成をう ける
269	土錐	長さ 7.4	両端に孔を持つ有孔式の土錐、断 面は円形~梢円形、孔の周囲に粒 くずれ板	手すくね		乳茶色	密	
270	土錐	長さ 7.4 最大径 2.9 孔径0.6~0.9	両端に孔を持つ有孔式の土錐、断 面は扁平な梢円形、孔の周囲に粒 くずれ板	手すくね、ハケナ デ		茶褐色	やや粗	

表28 VII層出土遺物観察表-1 (271~276)

番号	器種	法量(cm)	形・態	外面調査	内面調査	色・調	胎土	備考
271	直口壺	口 径11.0	外側する口縁部、腹部には内に沈線 状の窓が二個ある	ナゲ後縫ハラミガ キ	ナゲ後縫ハラミガ キ	明褐色~褐 灰色	密	6-C
272	広口壺	口 径16.0	丸く外反する口縁部、窓部はつま み上げられ、面を持つ	ナゲ後縫ハラミガ キ	密な横ハラミガ キ	明灰褐色	やや粗	2-A-3-A
273	高杯	口 径11.2	楕形の杯部、端部丸く終わる	長いハラミガキ	ナゲ後縫状ハラ ミガキ	茶灰色	密	2-A-3-A
274	高杯	口 径17.2	直線的に開く楕形、端部は尖る形 に外反する口縁部、窓部はつまみ あげ、外傾する面となる	密な横ハラミガ キ、ハケナデ	ヘラケズリ後上半 ナデ、下半ハケナ デ	茶褐色	密	2-A-3-A, 273と 同一個体か?
275	壺	口 径17.5	丸みのある「く」の字形に屈曲する 口縁部、窓部はつまみ上げられ、外 傾する面となる	タキの痕跡	ナデ	明灰褐色	やや粗	2-A-3-A
276	壺	口 径14.1	「く」の字形に屈曲する口縁部、端 部はつまみあげ跡跡でえみのある街 路	右上がりタキの 痕跡	ヘラケズリ	茶褐色	やや粗	2-A-3-A



第28図 VII層(271~281)、VIII層(282~287)、IX層・X層(288~302)、II層(303~305)出土遺物実測図

表29 VII層出土遺物観察表-2 (277~281)

番号	器種	法量(cm)	形 異	外面調査	内面調査	色 調	粘土	備考
277	鉢	口 16.0	体部から丸く屈曲する口縁部、端部は外傾する面となり、沈縫が一周する	縫ハラミガキ	下平放射状ハラミガキ、下平横ヘラミガキ	灰茶色～黒 灰色	やや粗	2-A-3-A、外 面底に添付 着
278	鉢	底 径 3.6	体部から突出する上部底	底側面～底内摺お さえ後ナデ	ナデ後ヘラミガキ	乳灰色	やや粗	2-A-3-A、277と 同一個体か?
279	甌	底 径 4.4	体部から突出する平底、口縁部、 底部は尖りぎみ	右上がりタタキ、 底側面～底内摺ナデ	ナデ	赤茶色～黒 茶色	やや粗	6-C
280	甌	底 径 4.05	体部から突出するドーナツ底	右上がりタタキ	ナデ	茶褐色	やや粗	6-C、底部充 存炭化物付着
281	甌	底 径 4.5	体部から突出するドーナツ底	右上がりタタキ、 くもの足状のハケ ナデ	くもの足状のハケ ナデ	淡褐色～黒 灰色	やや粗	3-B-3-C

表30 VIII層出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形 異	外面調査	内面調査	色 調	粘土	備考
282	甌	口 径15.8	丸みのある「く」の字形に屈曲す る端部はつまみ上げ、丸みのある 面となる	右トリ一水平タタ キ	ナデ	明灰茶色～ 色	粗	3-D口縁
283	甌	口 径15.8	丸みのある「く」の字形に屈曲す る端部、端部は内湾して立ち上 がり、丸く終わる	右トリ一水平タタ キ	ナデ	明灰茶色～ 灰茶色	粗	3-D口縁
284 21	甌	口 径16.8	体部から丸く外反する口縁部、端 部はつまみ上げられ、凹面となる	右上がりタタキ	ナデ	淡茶色	粗	4-B、口縁部 完全存以下
285	甌	底 径 4.4	体部から突出する平底	右上がりタタキ	不明	灰茶色	やや粗	6-C
286	甌	底 径 4.8	体部から突出するドーナツ底	右上がりタタキ	ハケナデ	外側淡茶色 内面黒灰色	やや粗	3-C、底部充 存
287	甌	底 径 4.5	体部から突出する平底	右トリ一水平タタ キ	不明	墨灰色	やや粗	3-D

表31 IX層・X層出土遺物観察表-1 (288~290)

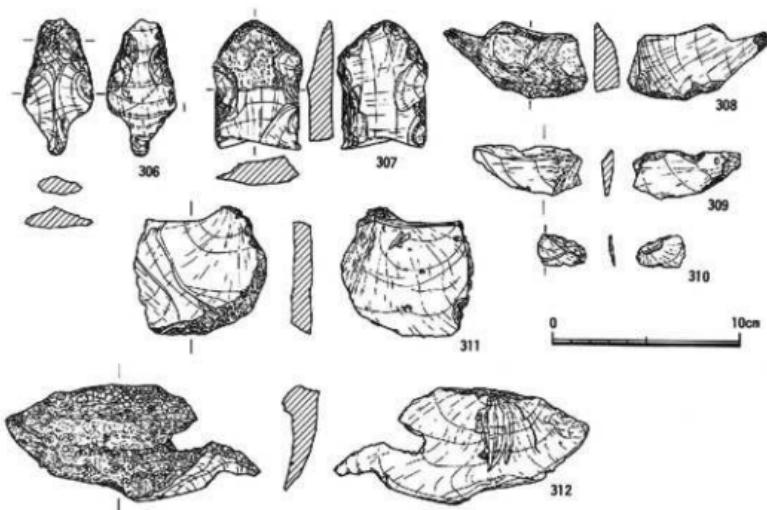
番号	器種	法量(cm)	形 異	外面調査	内面調査	色 調	粘土	備考
288	盃	-	大きく広がる肩部～腹部、5条以 上の垂直直縫紋	ナデ	擦おさえ、ナデ、 絞り口残存	乳褐色	やや粗	6-D、直縫
289	甌	口 径16.4	「く」の字形近くに屈曲する口縁 部、端部は丸みのある面となる	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	淡乳茶色	粗	3-B-4-B、X 層
290 21	甌	底 径6.65	体部から突出する平底	ナデ	ナデ	淡茶色	粗	3-B、4-B、X 層

表32 IX層・X層出土遺物観察表-2 (291~302)

番号	器種	法量(cm)	形態	外表面調	内面調査	色調	胎土	備考
291	壺	口 径25.0	外反する口縁部。縁部は丸みのある器となる	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	淡茶色	粗	5-C, X層
292	壺	-	筒状の圓い底部に大きく両く腹部へラッカ仕上げ紋様部に8条以上、	底部ハケナダ、肩部粗いハラミガキ	ナデ、粗いハラミガキ	外側淡茶色	粗	5-C-6-D, X層
293	壺	底 径 8.8	体部から突出する平底	ハラミガキ、底部側面-底面ナダ	ハケナダ後粗いハラミガキ	外側赤茶色 内面黒灰色	粗	5-B-5-C, X層、外側に布の付痕
294	壺	底 径 7.9	体部から突出する上部底	ナラ後粗いハラミガキ	ナデ	淡茶色	粗	6-B, X層、底部充存、黒斑
295	壺	II 直13.4	外反する口縁部、縁部は丸く終わる。焼成前の小孔あり	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	淡乳灰色	やや粗	6-D, X層
296	壺	-	筒形の底部から外反して口縁部へ至る。ハラッカ仕上げ紋3条以上	ナデ	ナデ	淡茶色	やや粗	5-D, X層
297	壺	-	筒形の底部から外反して口縁部へ至る。ハラッカ仕上げ紋4条以上	ナデ	ナデ	淡褐色	粗	5-B, X層
298	壺	-	筒形の底部から外反して口縁部へ至る。ハラッカ仕上げ紋3条以上	粗いハケナダ	ナデ	淡茶色	やや粗	4-C, X層
299	壺	-	筒形の底部から外反して口縁部へ至る。ハラッカ仕上げ紋11条以上	ハケナダ	粗いハラミガキ	淡茶色	やや粗	4-D, X層
300	壺	-	底部に糊み目付凸帯を貼付ける	ナデ		黒灰色	やや粗	3-D, X層
301	壺	口 径20.2	体部から丸く外反する口縁部、縁部は丸みのある器となる	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	淡茶色	やや粗	5-C-6-C, X層
302	壺	口 径20.4	体部から外反する口縁部、縁部にヘラによる割み目、底部にヘラによるハラッカ仕上げ	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	淡茶色	やや粗	6-C, X層、外側に焼付着

表33 X層出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形態	外表面調	内面調査	色調	胎土	備考
303	壺	-	外反する口縁部、3条以上のヘラッカ仕上げ紋	ハケナダ	ナデ	外側淡茶色 内面茶褐色	やや粗	3-C
304	壺	-	大きく広がる腹部、上方に3条以上のヘラッカ仕上げ紋	ナデ、ハラミガキ	ナデ	淡乳茶色	やや粗	3-C
305	壺	口 径15.0	体部から水平に傾曲する口縁部、底部にヘラによる割み目、底部に	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ	淡茶色	やや粗	3-C、外側に焼付着



第29図 石器未成品、剥片実測図

表34 石器未成品・剥片法量表

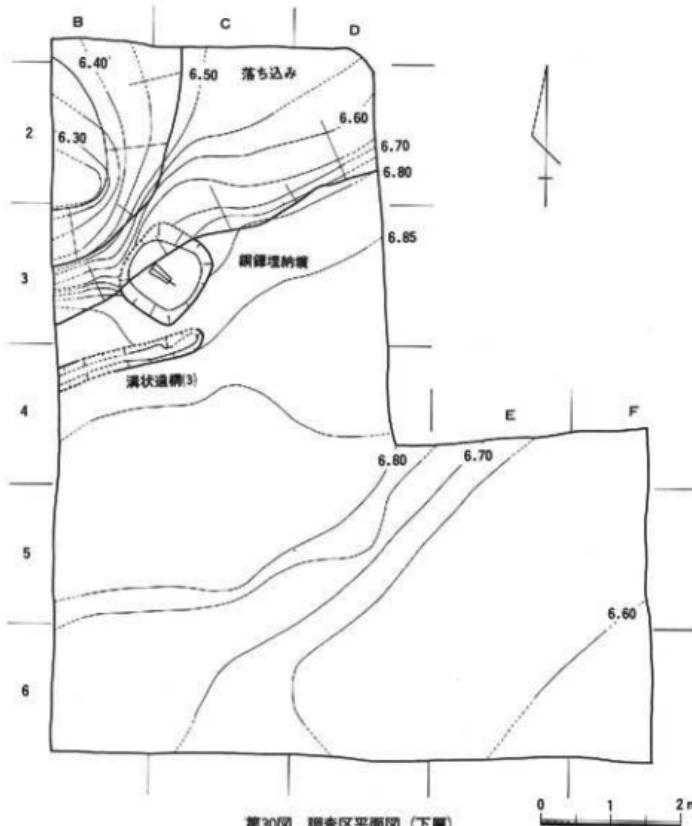
番号	器種	法量(cm)	石材	出土土器	出土地区
306	石鏃未成品?	現存長 最大幅 厚さ 7.35 3.6 1.1	サスカイト	X層	5-E
307	石剣未成品?	現存長 最大幅 厚さ 6.85 4.8 1.35	サスカイト	X層	4-B
308	加工のある剥片	現存長 最大幅 厚さ 4.1 6.7 1.35	サスカイト	X層	5-F
309	加工のある剥片	現存長 最大幅 厚さ 2.6 6.7 0.6	サスカイト	Ⅴ層	4-C
310	剥片	現存長 最大幅 厚さ 1.7 2.55 0.15	サスカイト	Ⅴ層	5-C
311	剥片	現存長 最大幅 厚さ 6.9 7.0 1.15	サスカイト	X層	5-E
312	剥片	現存長 最大幅 厚さ 6.25 13.5 2.0	サスカイト	VI層	-

第7章 銅鐸と銅鐸埋納壙

第1節 調査の経過

銅鐸の周辺を精査しはじめたところ、前述の古墳時代初頭の土壙（1）が、弥生時代終末期の溝状造構（2）を切っており、この溝が銅鐸の上層を通るという層位関係が明らかになった。

さらに銅鐸のまわりを精査したところ、埋納壙（後に埋納施設と判明）の輪郭が判明した。幅30~40cm余である。



第30図 調査区平面図（下層）

さらに銅鐸の埋納状況を知るために、補助的なトレンチを銅鐸に対し直角に入れたところ、前述の埋納壙の縁は、立ち上がっている粘土層で、枠のようなものに銅鐸が納められているよう見えた。周辺の地層を検討した結果、灰黒色の粘土が埋納壙の輪郭であると理解できた。しかし、調査を進めるなかで、銅鐸を包みこむ赤褐色の粘土と、その外側の灰黒色の粘土がやや外側に傾いているのが観察できたので、埋納壙ということに若干の疑問が生じた。赤褐色の粘土は、分析の結果、銅鐸の酸化第一銅が浸透したものと判明したが、外側の灰黒色の粘土は埋納壙の壁面としては、やや不自然な立ち上がりをしているので、埋納壙というよりも、銅鐸を覆う施設ではないかという考え方を抱き、さらに広範囲に地層を検討することにした。

補助トレンチを銅鐸に沿って鉢の方向にも入れることにした。実際は、粘土質であるため、地層を見分けるのが困難であり、地層の究明は銅鐸を取り上げてからすることにし、銅鐸を取り上げる準備をした。銅鐸を取り上げた後、地層を検討した結果、IX層で一辺約1.3m（推定復元一辺約1.4m）四方の大きさの掘り形が検出された。したがって、当初埋納壙と考えていたものは、埋納施設であることが判明した。（第31図）

なお、掘り形を検出中、銅鐸の南側で銅鑄1点を発見した。（T.P.+6.69m）遺構全体を切り取り保存するため、銅鑄の出土地点も残すこととしたので、南側の掘り形は少し掘り足りない部分がある。この銅鑄は、弥生時代中期後半から後期に作られたものと考えられ、同種のものが大阪府下出土の例にみられる。ただ、銅鐸とともに埋められたものか、偶然まぎれこんだものかは、今後の検討課題である。

なお、銅鐸埋納壙の切り込み層で、溝状遺構（3）を確認した。この遺構は、銅鐸埋納壙の南約40cmの位置に、磁北に対して76°東に振った方向に、幅約50cm、深さ約25cmで、2.2mを検出した。弥生時代後期の土器の小破片を少量採集した。（第38図）

第2節 埋納壙と埋納施設

埋納壙は、推定復元では、一辺1.4mの隅丸方形となる。長辺が1.29m（推定復元1.4m）、短辺が1.15m（推定復元1.4m）、深さは約40~50cmで、鉢の方が浅くなっているが、やや大きな掘り形である。（第31図）

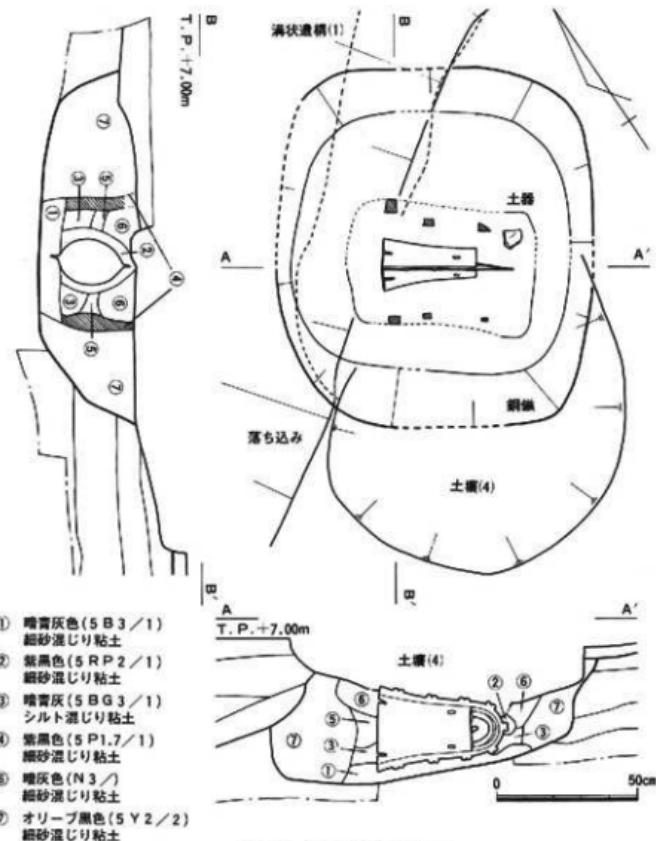
その中央部に、南東方向に約67cm、南西方向に幅約42cmの長方形に粘土を敷き、その粘土層の中央に銅鐸の縁を突き刺すように横向きに、しかも、銅鐸の中心線が水平になるように立てられていた。鋤身内上には自然に入りこんだものではなく、別の場所の土が詰められていた。きわめて計画性に富んでいる。

次いで、銅鐸のまわりに粘土が貼りつけられているように観察できたが、酸化第一銅の関係

があるので、粘土を押しつけたと決めがたい点もあるが、粘土を貼りつけた可能性が強い。

さらに、銅鐸が倒れないように下部から粘土で固め、外側に灰黒色の粘土が鐸身の部分にだけ、棒のように立てられたことがわかる。埋納施設の役割を果しているのであろう。ただ、上部はすでに弥生時代終末期の溝や古墳時代初頭の土壌(4)によって切られているので判らないが、この灰黒色の粘土は、鐸身全部を覆っていた可能性が強いといえる。

銅鐸埋納の仕方をみると、大きな掘り形の中央部に①層暗青灰色(5B3/1)細砂混じり粘土を敷き、鐸身内部に土を詰めた銅鐸を直立させて置き、鐸身に②層紫黒色(5RP2/1)細砂混じり粘土を巻く。次いで銅鐸が倒れないように下部に③層暗青灰色(5BG3/1)シルト混じり



第31図 銅鐸埋納塚平面断面図

粘土を詰め、④層紫黒色（5 P1.7/1）細砂混じり粘土を棒のようにあてがい、さらに鐸身の上まで周囲を埋め戻し、最後に⑦層オリーブ黒色（5 Y2/2）細砂混じり粘土で上部の鰐の部分を覆ったと考えられる。

なお、土壤分析調査の結果から、埋納施設内の粘土（①層・④層）は発掘区域内の粘土ではなく、鐸身内部の土と同様、別の場所のものが使われていた。¹⁾

かようにみると、大きな埋納壙は、銅鐸を納めるための施設と、それを作る作業空間を確保するために作られたものであることがわかった。銅鐸を埋納するために、丁重に作業がすすめられたことが理解される。

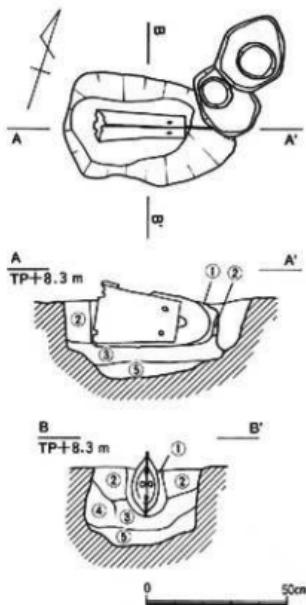
このような銅鐸の埋納壙と埋納の仕方に、もっとも似ている例は、徳島市名東遺跡で発見された銅鐸埋納壙がある。参考のために引用すると、調査者は次のように推定している。²⁾

「平面形が長辺約60cm×短辺約35cmの隅丸長方形を呈し、深さ約30cmを測る銅鐸の埋納壙が検出された。（第27図）土壙内の埋土は1～5層に細分される。銅鐸の埋納の順序を復原してみると、第1段階隅丸長方形の土壙を掘り込む。

第2段階5の灰黄色極細砂質シルトを約5cmの厚さに敷く。

第3段階4の淡黄色砂質シルトに黄灰色砂質シルトが混在する土で南側の壁面を埋め、3の淡黄色砂質シルトに淡黄灰色シルトがブロック状に混在する土を埋め、銅鐸を埋納する空間部（長辺約43cm×短辺約14cm、深さ約20cm）を残すように2の淡黄色シルトにより埋め戻す第4段階銅鐸の鰐を上下にして置き、2の暗灰黄色細砂質シルトをかぶせることにより銅鐸の埋納を完了する。なお、すべての埋土に木炭の細片が含まれ、1と5は類似の層で、2・3・4は基本的に地山と同質であり地山の再利用と思われる。」という。（第32図）

春日町の場合と比べてみると、名東遺跡の銅鐸は、鰐の下方が水平に置かれているのが注目される。



第32図 名東遺跡の銅鐸埋納壙

1)川崎地質株式会社「跡部遺跡第5次（春日町1丁目45-1）土壤分析調査報告書（1990、2）

2)一山典・勝浦康守「徳島市名東遺跡出土の銅鐸」（『考古学雑誌』第13巻第4号、1988、3）

第3節 出土銅鐸（第33図～第37図）

第1項 紋様について（第33図・第36図）

出土した銅鐸は、若干酸化第一銅の変化はみられるものの、保存状態は良好である。一般に扁平錘式の全面一区流水紋銅鐸とよばれるものである。

全高16.65cm、錘高13.65cm、鐸身平均高33cm、鍔を含む舞幅19.2cm、舞の長径15.2cm、舞の短径10.6cm、鍔を含む裾幅30.4cm、裾の長径24.1cm、裾の短径16.5cmである。内面突帯は裾より4.4～5.7cmをめぐる。鐸身の厚さは2.5～5mmで、重さは4.7kgである。

さて、銅鐸の紋様について若干詳しく記してみよう。湯まわりが良い方をA面、補鋲の目立つ方をB面と呼ぶことにする。なお、A面は北東側、B面は南西側に向けて埋納されていた。まず錘についてみると、錘は外縁・菱環・内縁の3つの部分にわかれるが、このうち、内縁は無紋である。外縁は、突線によって3つの紋様帯に区画されている。外側から、第1紋様帯～第3紋様帯と呼び分ける。

外縁第1紋様帯は、両面とも内向鋸歯紋帯からなるが、A・B面で若干異なっている。A面は鋸歯紋15個、B面は14個である。A面の鋸歯紋の斜線は6～7条一組で、斜線の方向は1個ずつ互い違いであるが、B面の鋸歯紋は斜線が5～6条一組で、斜線の方向は向かって左の6個が右方向に、右の8個が左方向に向いている。飾耳は2条の突線を組み合わせた双頭渦紋で頂部中央と、そこから錘脚までのほぼ2分の1の位置の左右に1個ずつ、あわせて2個つけられている。

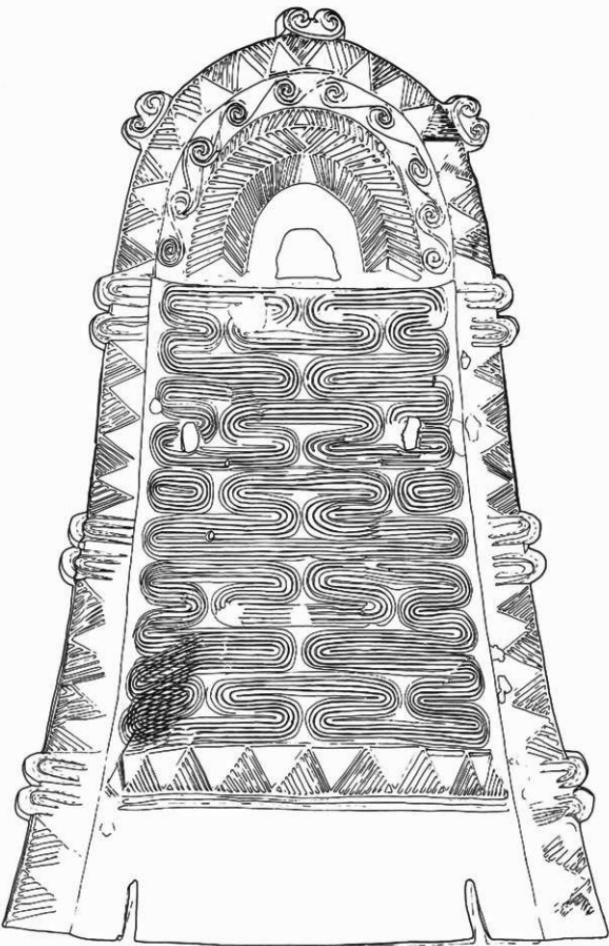
外縁第2紋様帯は、9個の「第1種連続渦紋」（佐原・町田）からなるが、A面はS字方向の連続渦紋、B面はZ字方向の連続渦紋と、逆方向に施されている。

外縁第3紋様帯には平行斜線が施されているが、菱環紋様帯とともに、3段の綾杉紋を構成している。とくにA面では「三日月形」を呈しており、脚錘から施されていないのが注目される。また、平行斜線の中央は「ハの字形」で終わり、三角形の凹面を呈している。

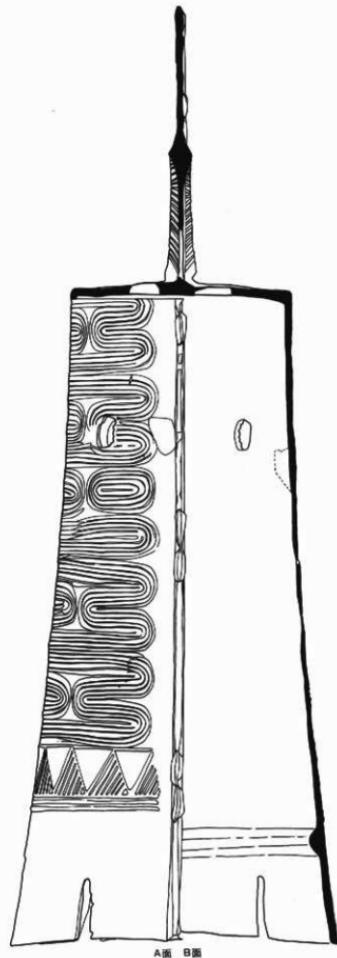
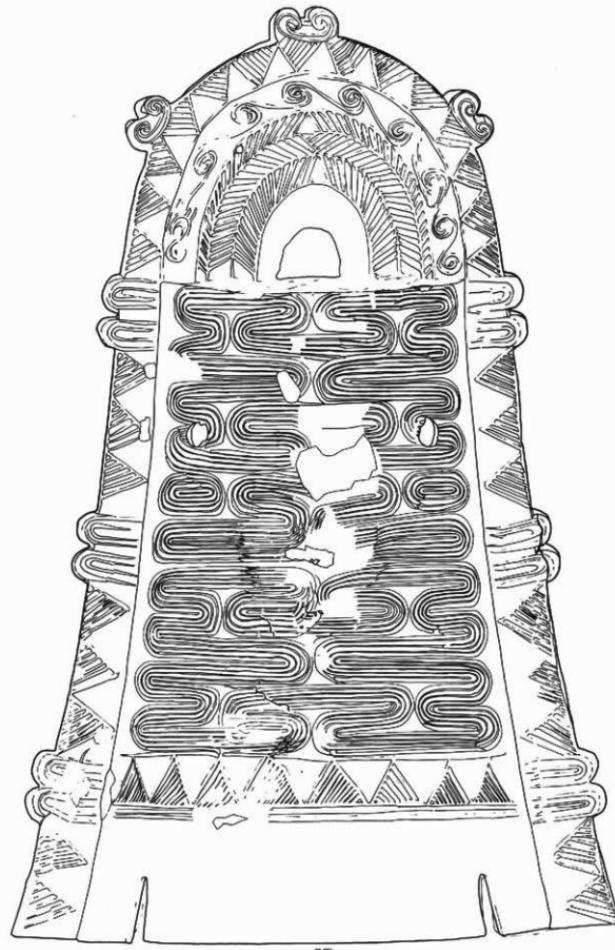
菱環紋様帯は軸線をもたない綾杉紋で、佐原らがいう「D・C」であるが、先の外縁第3紋様帯と重ねることによって、三重の綾杉紋を呈している。

次いで鍔であるが、錘の外縁第1紋様帯が延長したもので、上・中・下の3か所に飾耳を配している。飾耳は、A・B両面とも突線で二重のU字形を作り、それを二段重ねた形のものである。

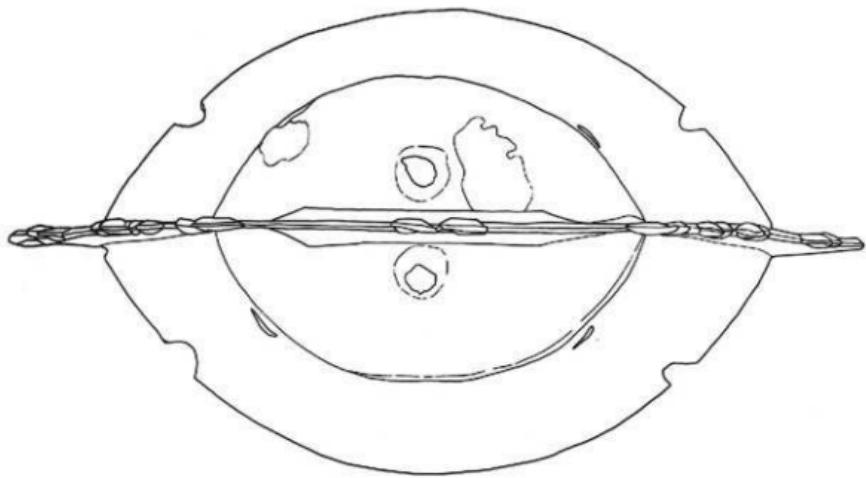
A面では、左右とも6～8条一組の鋸歯紋が、上段・中段に4個ずつ、下段に2個配されている。内部の斜線の方向は、左鍔上段上から「右上り・右上り・左上り・右上り」、中段は「右上り・右上り・右上り・左上り」、下段は「右上り・右上り」である。右鍔は、上段が「左上



A面

A面 B面
第33図 銅鏡立面 S=1:2

B面



第34図 銅鐸舞面（B面／A面） S=1:2

銅鐸の法量表

[重さ] (kg)	[厚さ] (cm)	(cm)	(cm)
4.7	鎌最大厚(A面右側) (A面左側) (中央)	1.2 1.4 1.2	鰐(A面左側上段端部) (基部) (A面左側中段端部)
総高 46.65	鎌外縁端	2.5~3.0	(基部) 0.4~0.45
鎌高 13.65	鎌内縁端	2.0~2.5	(A面左側下段端部) 0.2~0.25
身平均高 33	舞(A面)	0.4~0.55	(基部) 0.5~0.65
舞幅(長)(鍔含む) 30.4	舞(B面)	0.5~0.7	[型持ち穴] cm cm
舞幅(短) 16.5	身(A面)	0.25~0.45	舞(A面側)長径×短径 1.15×1.0
舞幅(長) 15.2	(B面)	0.1~0.5	(B面側) 1.35×0.95
舞幅(短) 10.6	柄(A面)	0.25~0.5	身(A面右) 柄×横 1.6×1.1
内面突帯(幅) 0.12~0.15	(B面)	0.3~0.55	(A面左) 1.55×1.4
(厚さ) 0.55~0.75	鰐(A面右側上段端部)	0.25~0.3	(B面右) 1.5×1.4
鎌脚幅(A面右側) (A面左側) (中央)	(基部)	0.35~0.4	(B面左) 1.3×1.2
鎌孔最大幅 3.2	(A面右側中段端部)	0.25~0.4	柄(A面右) 3.1×1.2
鎌孔高 2.4	(基部)	0.5~0.55	(A面左) 3.0×1.7
	(A面右側下段端部)	0.25~0.3	(B面右) 3.2×1.25
	(基部)	0.5~0.7	(B面左) 3.3×1.3

り・右上り・左上り・右上り」、中段が「右上り・左上り・右上り・左上り」、下段が「右上り・右上り」である。この斜線の方向は、鈕の第1紋様帯から連続して、おおむね「互い違い」になるように配されている。

B面は、左右とも5～6条一組の鋸歯紋が、上段・中段に3個ずつ、下段に2個配されている。内部の斜線の方向は、左鱗がすべて「右上り」、右鱗がすべて「左上り」で、A面とは異なり、鈕の第1紋様帯から連続して、およそ「左右対称」になるように紋様帯を構成している。

鐸身の紋様は、横帶紋をもたない全面一区の流水紋である。流水紋一帯あたりの突線の数は5条を基本とするが、一部に「迷路状」を呈するところもある。

流水紋は3段に分かれ、上段と下段は8個の反転部が8か所あり、背中合わせの反転部が7か所ある「8C7x」と呼ばれるものである。中段は凸字形を呈する流水紋と、凸字形の左右に横長の輪がメガネ状に配される「4C3x」と呼ばれるものである。反転部には、「割り付け」の細線が残っている。

下辺横帯紋は、1条の突線を配し、その直下に7～8条一組の鋸歯紋をA面に9個、B面には8個連ね、最下部に2条の突線を配している。A面では上の突線が、右端の3分の1まで2条施されている。A面の鋸歯紋の斜線の方向は、左の5個が「左上り」、右の4個が「右上り」である。B面の鋸歯紋の斜線の方向は、左の5個が「右上り」、右の3個が「左上り」である。

第2項 銅鐸の観察から推定される鋳造の問題

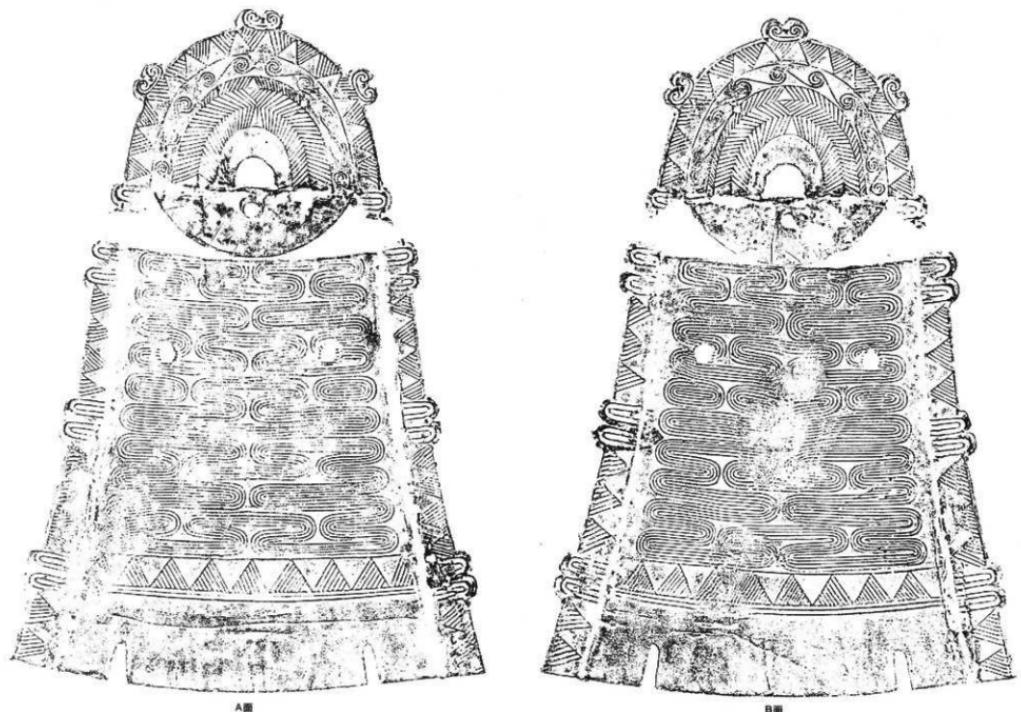
鋳型の外型は、舞の上面の凹凸が甚だしいことから石製鋳型と推察される。また、A面型が右上方へ3～5mm程度ずれている。

内型はB面中央下部に流水紋が食い込んだように見える部分があるので、外型か内型が動いて内型が外型に接したようである。したがって、これは内型が土製型（粘土混じり）であることを推察せしむるものである。また、A面の内面には、第37図に見る通りコウバリが認められる。

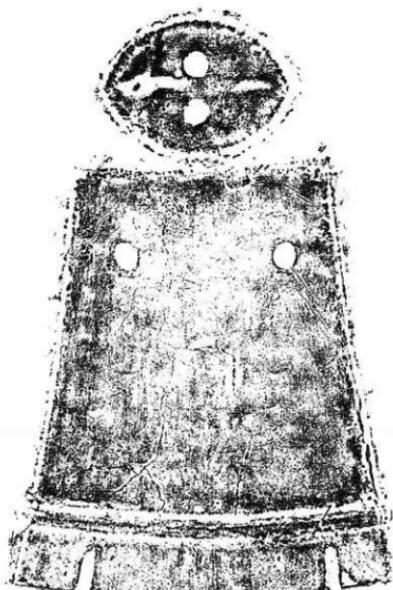
湯回りは、A面鐸身両脇の鱗付け根の部分とB面鐸身中央部があまり良くない。また、B面右鱗の付け根にはスラッグが付着している。なお、湯回り不良部と補鋳部分が一致しているのが注目される。また、注意すべきは、A・B両面とも裾端部から3.5～7cm付近（内面突帯附近）で湯を補足しているのが確認できる。

補鋳はA面鐸身に4か所（A1～A4）、B面鐸身に4か所（B1～B4）、A面右鱗からB面左鱗に貫通するのが4か所（1～4）、舞のB面側に2か所（5・6）の計14か所に認められる。

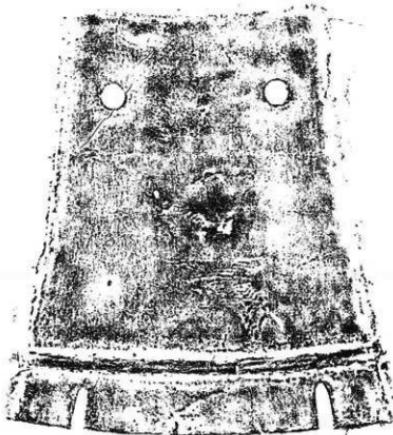
補鋳の仕方には3種類の違いが観察できた。鐸身内面の1例（B1）および舞内面を除いた補鋳のすべての内面に、打ち出し状の圧痕が認められる。鱗の補鋳はA面からB面へ貫通して



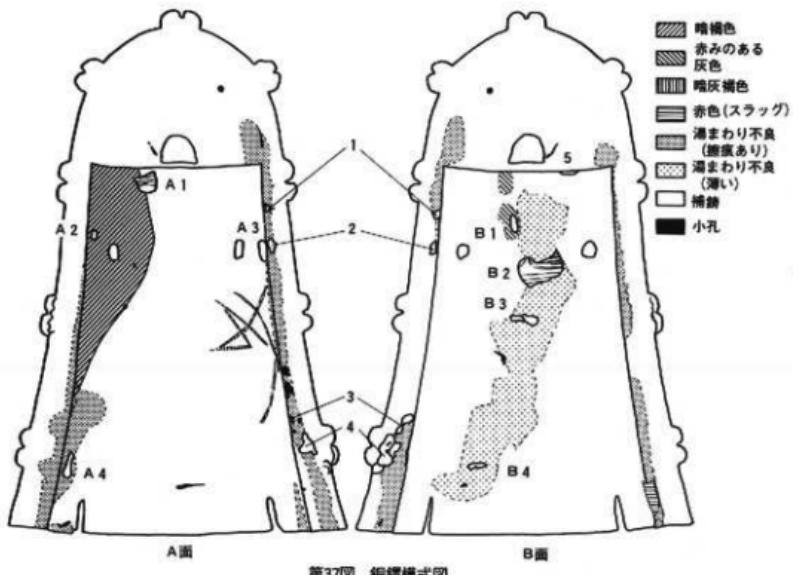
第36図 銅牌拓本(外面) S=1:3



A面



B面



第37図 銅鐸模式図

いる。また、A・B両面で一番大きな補鉄（A1・B2）には、刃物を用いて流水紋を補刻している。

本銅鐸の最終的な仕上げには、研磨が加えられている。研磨されている部分は、縁部のすべて、ならびに鐸身の型持ち穴と裾の型持ち穴の周囲、補鉄外面、補鉄B1内面、鰐の付け根である。縁部は、鰐の飾り耳の周囲がとくに磨かれており、なかでもU字形二段重ねの飾り耳の中央部には明瞭な刃物のアタリが認められる。逆に磨きの弱いところは鉢孔の上縁である。型持ち穴のうち、鐸身の型持ち穴は、両わきがよく磨かれており、鐸身の内部に向かって外から中へと鋭く磨かれている。補鉄外面は補鉄部分だけではなく、かなり広範囲に研磨されている。とくに補鉄A1・B2では流水紋の突線まで削り取っている。また、補鉄B1の内面には、他の補鉄内面にみられるような「打ち出し状の圧痕」はみられず、研磨のみが認められる。この補鉄B1と舞の補鉄6は他の補鉄とは表面の色調が異なっているが、内面の調整の差や鉢の違いなどは補鉄に使用した銅の成分の違いによるものかもしれない。なお、舞の補鉄6の内面は損傷が激しく、調整までは観察できなかった。

鰐の付け根部は、鰐の縁側が強く磨かれ、鐸身側は軽く磨かれている。とくにB面右鰐中段以下は、鋸歯紋頂点付近まで削っており、凹面を呈している。この部分は前述のスラグが付着している部分で、スラグを取りはずすために強く削り込んだものと考えられる。

第4節 一区流水紋銅鐸の類例

本銅鐸と同范のものは、現在のところ判明していないが、鐸身全面に流水紋を施した一区流水紋銅鐸は数例発見されている。

1、京都府与謝郡加悦町明石出土鐸

丹後の加悦町の須代神社の垣内的一角から出土したもので、紐の外縁ならびに縁にわずかなこぼれをみると、二次的な破損や錆損じが少ない美しい銅鐸である。鈎耳は二重の突線U字形で、肩の部分に左右1個ずつつけられている。

2、滋賀県野洲郡野洲町大岩山10号鐸

琵琶湖の東岸に美しい姿をしてそびえる近江富士、すなわち三上山から鏡山山塊の一丘陵の突端、野洲町の小篠原大岩山で、明治14年（1881年）に銅鐸が14個発見され、昭和37年（1962年）には新幹線工事用の土砂採集中に10個の銅鐸が発見された。

この10個のうち、9個は製造標紋銅鐸で、年代の異なる大・中・小の3個の銅鐸を入れ子にしたもののが3組あったということで注目された。残る1個が流水紋銅鐸で、約50m離れたところから出土した。

この銅鐸はやや大型で、一区流水紋である。鈎耳は春日町出土のものと同様鋸部に双頭渦紋が3個、鐸身部にU字形の鈎耳を左右に3個ずつつけている。また、標の横帶紋は鋸歯紋ではなく、連続渦紋である。

ところで、小篠原のような多数の銅鐸の発見から、これらはムラマラで所有していたものを

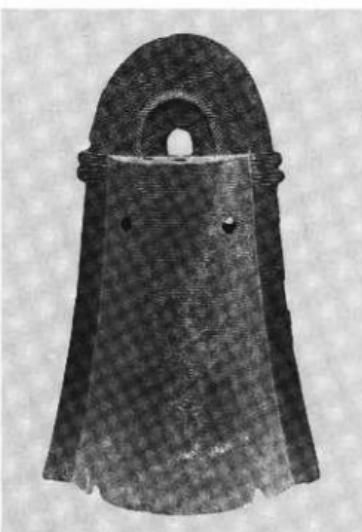


写真13 京都府与謝郡加悦町明石出土鐸

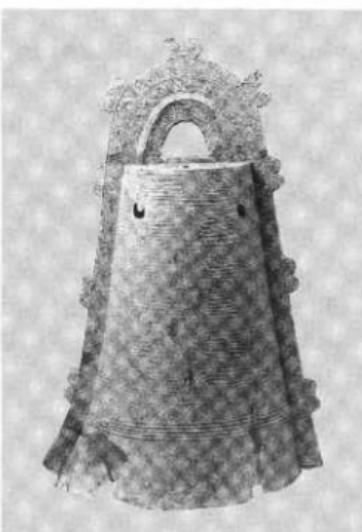


写真14 滋賀県洲郡野洲町大岩山10号鐸

集めたもので、ムラムラの統合を意味するものであるという解釈が生まれたのである。

3、和歌山市有本出土鐸

和歌山県では2例目の流水紋銅鐸である。和歌山市有本の紀ノ川南岸で発見された。銅鐸は水辺の砂礫中に埋まっていたようである。春日町出土のものとよく似ているが、細部は若干異なる。とくに鉢部には飾耳がない。

4、伝高知県香美郡出土鐸

幅の鋸歯紋帯から上の鐸身全面を流水紋で飾った中型の一区流水紋銅鐸である。鋸歯じが多いが補鑄し、施紋するなど丁重に補修している。後に鉢外縁の大半が破損したようである。

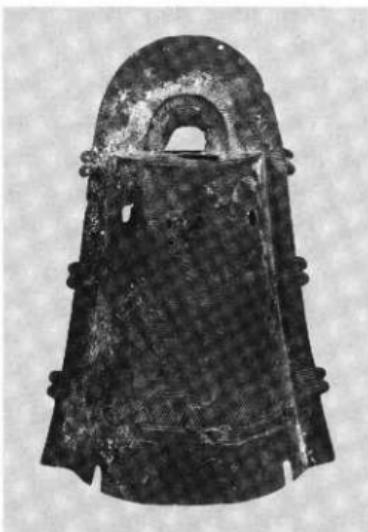


写真15 和歌山市有本出土鐸

5、愛知県宝飯郡御津町広石鐸

この銅鐸は、明治11年（1878年）、広石新宮山の道路工事中に出土した。愛知県下に現存する銅鐸のうち、唯一の流水紋銅鐸である。美しい流水紋で、春日町のものとよく似ているが、鉢には飾り耳がない。なお、愛知県愛知郡出土と伝えられる銅鐸の拓本（実物は不明）によれば、広石鐸と兄弟鐸である。



写真16 伝高知県香美郡出土鐸

6、鳥取市高住宮ノ谷出土鐸

片面の身部をすべて欠損しているが、幸い一面では原型をとどめている。いわゆる一区流水紋である。鉢は遺存するが、鉢の外縁はすべて欠けている。また、鰐も大部分が欠損している。

7、島根県邑智郡石見町中野字仮屋出土鐸

この銅鐸は、大正14年（1925）に出土した。錘に3か所、鑄に3対の飾耳をもつ一区流水紋である。春日町出土のものと似ているが、鐸身の断面はやや丸みをおびている。鑄の一面はかなり欠損し、とくに裾部の鑄は双方とも欠けている。（三木文雄先生の連絡によれば、平成元年夏、島根県の関係者が調査したところ、鑄の断片を検出し、銅鐸の出土土地を確認したとのこと。）

これら7例のうち、春日町出土の銅鐸の流水文とよく似ているものは、愛知県広石鐸と和歌山市有本鐸と京都府明石鐸の3例があげられる。



写真17 愛知県宝飯郡御津町広石出土鐸



写真18 島取市高住宮ノ谷出土鐸

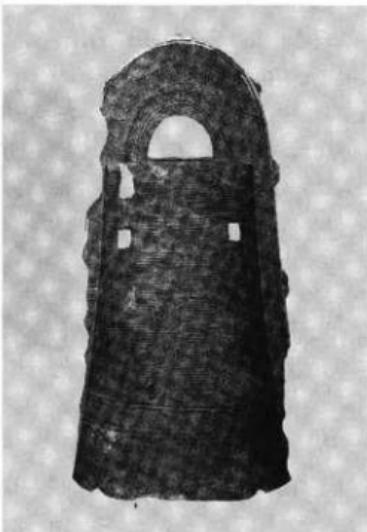


写真19 島根県邑智郡石見町中野字仮屋出土鐸

第5節 その他の出土遺物

第1項 溝状遺構（3）出土遺物

溝状遺構（3）からは、土器片がごく少量出土したが、すべて小破片である。図示したもののは弥生時代後期の壺（313）、高杯（314）である。

第2項 銅鐸埋納壙出土遺物

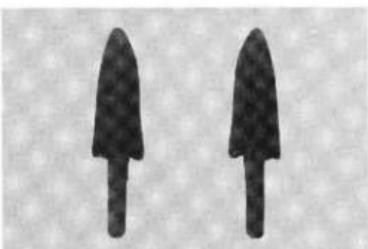
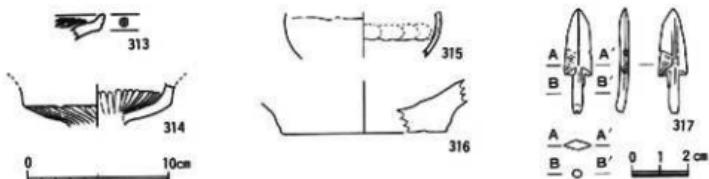


写真20 銅鐸

銅鐸埋納壙からは、弥生時代前期～中期の壺底部（316）、同中期の器種不明体部片、弥生時代中期以降の壺体部片（315）、銅鐸（317）が出土した。これらはすべて、埋納壙を最終的に埋め戻した土層である⑦層からの出土である。

銅鐸はいわゆる有茎鐸で、赤銅色を呈しており、ほとんど錫びていない。身の断面は菱形、茎の断面は円形を呈している。全長3.7cm、身の長さ2.35cm、身の最大幅0.9cm、身の厚さ0.4cm、茎の長さ1.3cm、茎の直径0.3cmを測る。同様の形態のものは数点出土しているが、大阪市瓜破遺跡出土のものがきわめてよく似ている。



第38図 溝状遺構（3）、銅鐸埋納壙出土遺物実測図

溝状遺構（3）出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形態	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
313	壺	-	つまみあげられた口縁部外側に竹管押印紋	ヨコナデ	密なヘラミガキ	外側灰茶色 内側灰茶色	やや粗 良好	
314	高杯	-	深みのある杯底部から、外汎ぎみの口縁部に至る	放射状ヘラミガキ	放射状ヘラミガキ	茶灰色	粗	

銅鐸埋納壙出土遺物観察表

番号	器種	法量(cm)	形態	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
315	壺	-	壺形の体部	ナデ	指おさえ・ナデ	外側灰色 内側灰茶色	密	
316 21	壺	底径2.3	突出する平底	ナデ	不明	淡褐色	粗	底部残存

第6節 跡部遺跡出土銅鐸のX線調査について

山口誠治（大阪文化財センター）

はじめに

近年の自然科学の急速な発達によって、考古資料にもハイテク技術を応用して多様な情報を得る試みが盛んに行われている。従来からの調査方法であれば肉眼観察のみで遺物の微細な特徴を記録してきたが、機器の開発やコンピューターの発達により人間の目以上にもっと微細な遺物の多様な情報を引き出してくれるようになってきている。

さて、X線は放射線の一種であり、そのほかにアルファ線、ベータ線、ガンマ線、中性子線などがある。そのうちアルファ線は陽子2個と中性子2個からできたヘリウム原子核の流れで透過力はたいへん弱いものである。ベータ線は電子の流れで、透過力が弱く数ミリのアルミ板で遮蔽できるほどである。ガンマ線、X線は粒子の流れではなく電磁波で透過力が大きいので応用面が広い放射線である。すなわち、この物質を透過する能力を使って文化財の組織を調査し多様な情報を得ているわけである。

今回出土した銅鐸に関しては紋様の状況や金属組織・鋳造の状態についてX線によって調査したのでここに報告する。

第1項 X線透過装置による銅鐸の調査

X線の透過装置による調査撮影は、文化財の構造や製作技法を調査するための方法のひとつである。この方法は、鉄剣象眼鏡の発見や仏像などの美術工芸品の優れた製作技法を明らかにし、さらに肉眼観察では分かりにくい構造や製作技法の解明にも威力を発揮する。

そこで、銅鐸の金属組織を解明するためや銅鐸の文様がなるべく歪みのないようにX線画像を得るための工夫を行なながら調査を行った。X線透過装置から発生するX線は円錐形状に資料に照射され、X線が垂直に照射される照射円の中心では正確な透過像が得られるのに対して照射円の中心から遠ざかれば遠ざかるほど歪んだ透過像になる。

この歪んだX線像であれば、組織や技法の調査を困難にする場合がある。そこで、なるべくX線の画像の歪みをなくす工夫として、展開X線透過装置を使用した。

第2項 展開X線透過装置について

歪みの少ないX線画像を得るために、照射円の周辺のX線を押さえて中心のみを使用し、連続的に照射する。なお、銅鐸を撮影した条件については、表1に示した。使用した装置は、X線発生装置とX線を線状に絞る扇形のスリット照射筒、回転試料台である。

表36 X線透過撮影の条件表

作業時間	撮影時電圧	透過時間(分)	回転試料台(回転数／分)
900分	190kV	9	500 試料表面速度 3.02cm／分

なお、この装置は奈良大学の西山要一助教授が開発されたもので、その装置を借用して撮影した。X線透過写真については、図版28、29に示している。

表1で作業時間としているのは銅鐸の表裏に面を撮影したトータルの時間であり、X線フィルムの現像にかかった時間は含んでいない。なお、銅鐸全体をカバーできるだけのX線フィルムがないので、銅鐸内部になるべく密着させるようにフィルムを切り22箇所に区切って撮影した。撮影の結果鐸身の部分が完全な円であれば歪みのない画像が得られると考えられるが、不完全で椭円の状態であるため歪みのない画像とはなりえない。しかし、部分的には歪みの少ない画像が作成できた。ただし、紐、鰯、飾り耳の部分だけは二重画像となる。

第3項 X線画像について(図版28・29を参照)

X線撮影時に銅鐸の両面を次のような肉眼観察によって、A面、B面に分けて撮影した。A面は保存状態が良好で銅鐸込みが良く文様が鮮やかな面で、B面は補鑄の目立つ面とした。

ところで、撮影したフィルムはペーパープリントにして、画像を強調し白黒の画像とした。画像で黒く強調されているところが銅鐸の厚い部分である。また、明暗がはっきりしていない

部分が薄い箇所になる。とくに、B面で補鋲している部分が強調され、補鋲箇所が鮮明になった。また、A面でも補鋲箇所が確認できた。

肉眼では表面にピンホールなどの巣（铸造時の浴湯中にガスが大気中に放出されず鉄物が凝固する際にできるもの）の発生は表面観察では確認できなかった。

しかし、X線画像によって鮮明にピンホールの状態が写し出された。そこでこれらのX線画像の結果から铸造時の湯口について考えてみたい。もしも、銅鐸のA面に湯口が設けられていたと仮定すると、反対側のB面では湯のまわりや文様の出が悪いために補修が多くなり、しづかがよったり文様の擦れが考えられる。だから、補鋲部分が少ないA面の方に湯口があった可能性がある。しかし、現在の調査では確実な湯口の位置を実証するのは難しい。また、巣の状態を見て湯口の存在を判断する材料になる可能性はあるが、もっと細部にわたって調査する必要があったと反省しているところである。

さらに部分的に文様の出が悪かったり欠損部分ができる場合には、補鋲をしたり蓋のような道具を用いて文様の補刻を行い手直しをするような丁寧な仕事をしていることには感心させられた。また、補鋲の調査をしていく過程で他の銅鐸の補鋲についても観察し情報収集しまとめると時代や地域の性格が解明できるのではないかと考えられる。現在そのための情報収集を行っているところである。不備な点も多いが以上でX線による調査の報告とする。

最後に調査に際して協力して頂いた奈良大学の西山要一助教授と写真図版の作成を行ってくれた当センターの片山彰一主任技師、笠井勉氏に深く感謝の意を表す次第である。

（参考文献）

- 1) 西山要一：「展開X線写真撮影法・半正射X線写真撮影法の開発」、奈良大学紀要 第18号、P89~99 (1990)

第7節 銅鐸についての試見

以上述べたように、八尾市春日町出土の銅鐸は、前述の古墳時代前期初頭の土壙（4）が弥生時代終末期の溝状造構（2）を切り込み、この溝状造構の下に銅鐸が埋納されていたという層位関係が明らかになったという点が注目される。春日町で出土した扁平錐式一区流水紋銅鐸は一口ではあるが、鐸を上下に直立した状態で、しかも、鐸身が水平になるよう極めて丁重に埋納されていたことが明らかになった。とくに、埋納場と埋納施設が判明したのは注目すべきであろう。

春日町の銅鐸と同じ状態で発掘調査された例は極めて少ないが、なかでも徳島市名東遺跡の銅鐸の埋納状態とよく似ている。名東の場合は下部の鐸を水平にしている点が春日町のものとは異なる。また、岡山県高塚遺跡の銅鐸や、浜松市前原遺跡の銅鐸は、鐸の上面を水平にしている点が注目される。このように、銅鐸の立て方に三種あるのは何か意味があるのであろうか。なお春日町出土のもののように一口の場合と、島根県荒神谷のように数口まとったものとは、それぞれ埋納の意味が異なると思われるが、これらについては、今後の検討課題である。

次いで、春日町出土の銅鐸は、河内平野の低地で、しかも現地表下2.5m (T.P. +6.7m) の低湿地に埋納されていたということは、現在までに発見された銅鐸の多くが、山腹や山麓、あるいは丘陵部で見つかっていることを考えると、今後、低地部の出土例も再検討を加える必要がある。河内では、京阪電鉄の高架工事中、大和田駅の橋脚部の作業中に袈裟襟紋銅鐸が3個入れ子状で出土した（現在国立歴史民俗博物館蔵）といわれているが、これは低地の砂礫層中であったと推察される。他は、前述した亀井遺跡から小破片が2点出土している。

一般的に、銅鐸は農耕に關した「まつり」に使われていたものと推定されており、その地域の中心的な役割を果した（担った）集団が所有し、伝世されていったものと考えられているが、筆者は必ずしも「農耕のまつり」に限定する必要はないと考えている。

このことに關して、筆者は「航海民の考古学」（『考古学ジャーナル』205号）と題し、ひとつの仮説を述べたことがある。詳しくはそれに譲るが、主旨は、山腹や山麓などから発見された弥生時代の銅劍や銅矛、銅鏡、銅鐸などは、古代の「海人の族」とくに海や潮などで航海に携わる族が、船を航行させるときの目印となる山、すなわち「山だて」あるいは「山あて」に使う「山のまつり」を使ったのではないかということである。たとえば豊後水道にある佐多岬の速水神社裏山、広島の木の宗山、倉敷の瑜伽山、讃岐の金比羅山、兵庫の保久良山、甲山などが挙げられるので、そのようなことを考えたわけである。

一般に、銅鐸は弥生時代のある時期に土中に埋められ使われなくなったといわれているが、春日町の場合は、少なくとも弥生時代終末期以前に埋納されたことは事実であり、銅鐸埋納場

内部の土器片が弥生時代中期のものであることから、埋納時期は中期にまでさかのほるかもしれないが、これについては今後の検討課題としたい。また、銅鐸1点が出土したが、これは同時埋納とみるのが妥当と考えられるが、これについても今後の検討課題としたい。

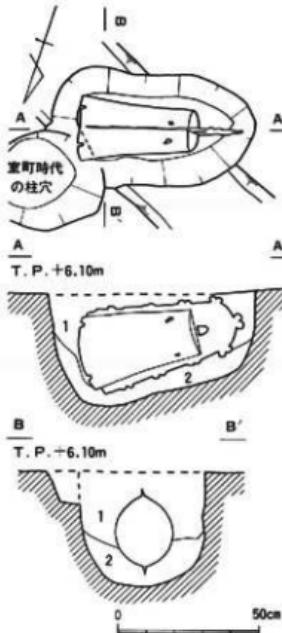
最後に、銅鐸はなぜ土中に埋められ使われなくなったかという問題が論じられ、銅鐸を土中に隠したとか、銅鐸は土の中に保管しておいて必要なときに掘り出して祀ったとか、あるいはまじないに使ったとかいう説があるが、筆者は春日町出土の銅鐸のように、鐸を上下に直立させ、丁重に埋納するということは、錫がある方向を指すことになり、その方向に何か意味があるかもしれないと考えている。春日町の場合は鉢が南東方向に向いており、その方向はちょうど大和の二上山の方向であって、最初筆者は二上山との関連があるのでないかと考えたが、正確には少し北によるので、二上山に関連するものではない。とすれば何か。ひとつの仮説として、太陽が昇る方向ではないかと考えたところ、偶然にも冬至の時に太陽が昇る方向であることが判った。したがって、冬至に関係があるとはいわないが、この方向については、今後いろいろと資料を集めて検討を試みる必要があると考える。



写真21 高塚遺跡出土銅鐸

補説

高塚出土の銅鐸は、春日町出土のものや、名東出土のものと異なり、鐸の上面が、水平になるように埋納されている点が注目される。



第39図 高塚遺跡の銅鐸埋納壙

第8章 むすび

八尾市春日町1丁目45-1の公共下水道工事にともなう事前調査によって、検出された銅鐸および銅鐸埋納壙。さらには古墳時代前期の遺物ならびに遺構についての概要は上記の報告どおりであるが、そのいくつかの問題点を記して、まとめとしたい。

第1節 遺跡の立地について

当遺跡は現地表下約2.5m（海抜T.P.+6.7m前後）の低湿地にあり、銅鐸が丁重に埋納されていた。なお、銅鐸埋納壙の下層は未調査であるため明らかでないが、下層の一部で弥生時代前期の土器片を採集している。

本遺跡にかぎらず大阪（中河内地方）の平野部に位置する遺跡は、いずれも低湿地に立地する。これは原大和川の流路に影響されているため、その多くが旧砂洲の微高地に立地しているのである。

集落跡や墓（群）などが低湿地に位置することは、瓜生堂遺跡や龜井遺跡などに代表されるが、銅鐸の埋納地が同じく低湿地で認められたことは、今後の銅鐸遺跡研究にひとつの指針を示すものといえる。もっとも、以前京阪電鉄の大和田駅の高架工事中に銅鐸3個が出土したことがあり、これは低湿地出土例といえるが、出土状況があまり明らかでないのが残念である。

八尾市内では龜井遺跡で銅鐸片が2点出土しているが完形品でないので、その意味は春日町の場合とは異なるといえる。また、八尾市の恩智の垣内山で流水紋銅鐸が、同じく都塚山で製婆搾紋銅鐸が出土しているが、いわゆる山腹であり、春日町の場合とは対照的である。

かかるることは、春日町出土の銅鐸と恩智出土の銅鐸を同じ次元で考えるべきものではないといえる。ということは、銅鐸以外の遺跡・遺物にもあてはまるることであり、平野の低湿地のそれと、山麓や山腹の遺跡・遺物は同次元で処理すべきものでないことは明らかである。

とくに河内平野のような地形のところでは、河内潟もしくは河内湖といわれていた時代から原大和川時代ともいるべき時代の旧地形を復元的に考慮する必要がある。もとより、現時点ではすべてを復元することは困難であるが、発掘調査された遺跡単位で旧地形を部分的に指図することは可能である。春日町の場合は発掘範囲が極めて狭く、周辺の様子は不明であるが、地質学的には、銅鐸埋納壙の極めて近いところに大量の水があると推定されている。

このように、個々の遺跡の状況をそれぞれの成果に基づいて旧地形の復元を試みることが、今後の研究におけるひとつの大きな課題である。

第2節 遺構について

銅鐸の出土状況は前述のとおりであるが、極めて丁重に埋納するために、一辯1.4mの隅丸方形の土壙を掘り、銅鐸の鋸が立てられるように粘土床をつくり、銅鐸内に周辯の土砂でない別の地の土砂をいれた銅鐸を、鐸身の中心線が水平になるように立て、倒れないように土をつめながら棒らしいものを立てている。鋸の上部の土壙のつめかたは古墳時代の土壙(4)と重なっているため不明であるが、棒に似た蓋がしてあったと推定される。

かかる丁重な埋納方法で埋納されていた類例として、徳島の名東遺跡出土銅鐸、岡山の高塚遺跡出土銅鐸、奈良の大福遺跡出土銅鐸などをあげることができる。(銅鐸講演会記録集) 今後、銅鐸出土にあたってはその埋納方法などの検討に資することができよう。

この銅鐸が埋納された後、古墳時代初頭に銅鐸埋納擴に隣接したところに、八角長方形（推定復元）の溝状の区画と、少し時期の下る（上層）梯形（南側不明）の溝状の区画が検出されたが、これはいずれも住居跡ではなく、土器の出土状況から考えて2回以上この区画内で土器を使った何かが行われたところと判断された。それが何であるかは明らかでないが、何かの「まつり」を行った跡と推定することができる。

銅鐸とは年代が下がるので直接かかわりはないといえるが、ほぼ同一場所であるという気がかかる。

銅鐸の場合、銅鐸の鉢の埋納方向が二上山の方を向いているので二上山との関係が推測されたが、実はその方向は冬至の日に太陽が昇る方向であり冬至にかかわるかもしれないと考えたが、これについては今後の研究にまちたい。

いまの段階では前述したように、近くに大量の水がある場所でのまつりが銅鐸の埋納に関わりがあり、また同じ場所で古墳時代初頭にまつりが行われたということが指摘できよう。

今回の調査によって得られた事実を元にして、いろいろな問題が提起されるが、銅鐸の成分分析などは奈良国立文化財研究所の方から報告をうけることになっているので、それにまちたい。

また、銅鐸の単独埋納と複数埋納の問題、さらには銅鐸の鋸を立てる埋納法と、入れ子に埋納する問題なども再検討すべき問題であろう。

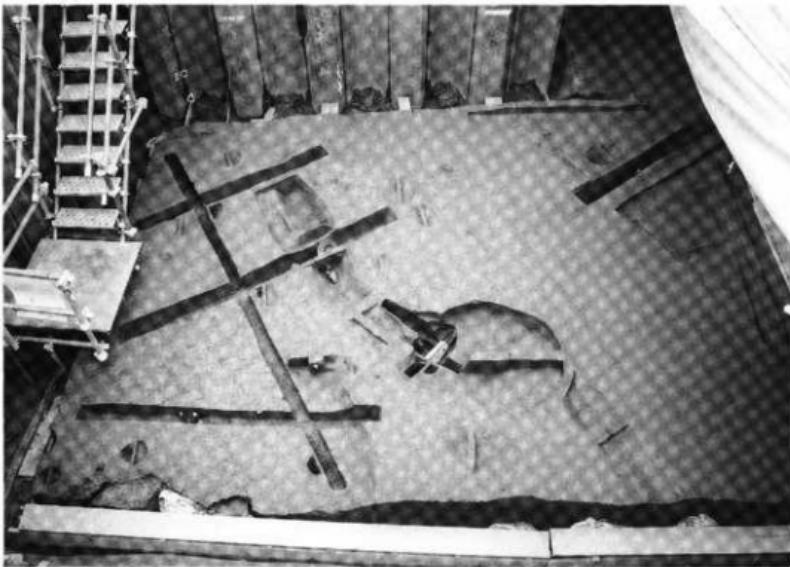
前述した銅鐸の埋納方向なども今後の課題のひとつである。なお、銅鐸の丁重な埋納の仕方、とくに春日町の場合を見ると、前期古墳の墓壙の掘り方と埋納施設のあり方とが似ているようなところもある。これらはいずれも今後の課題としておきたい。

図 版

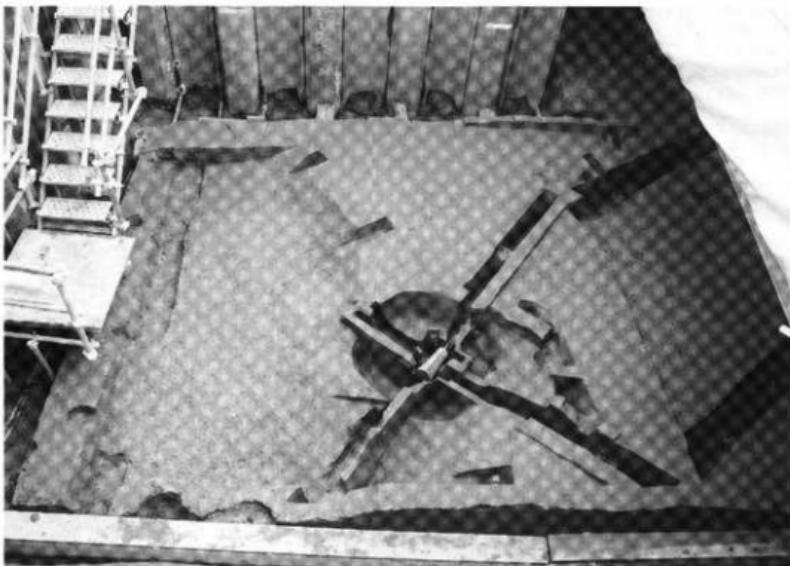


調査地周辺垂直写真 ($S = 1 / 100$)

図版
2



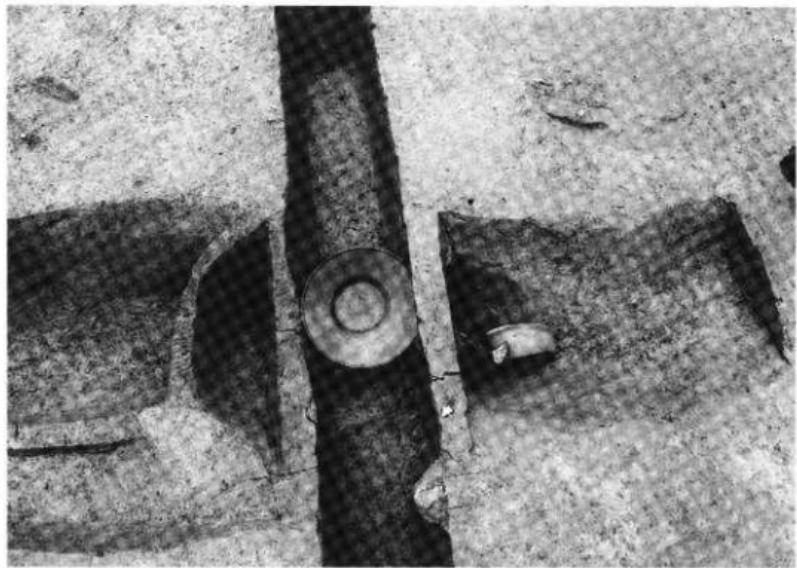
調査区北部上面(西から)



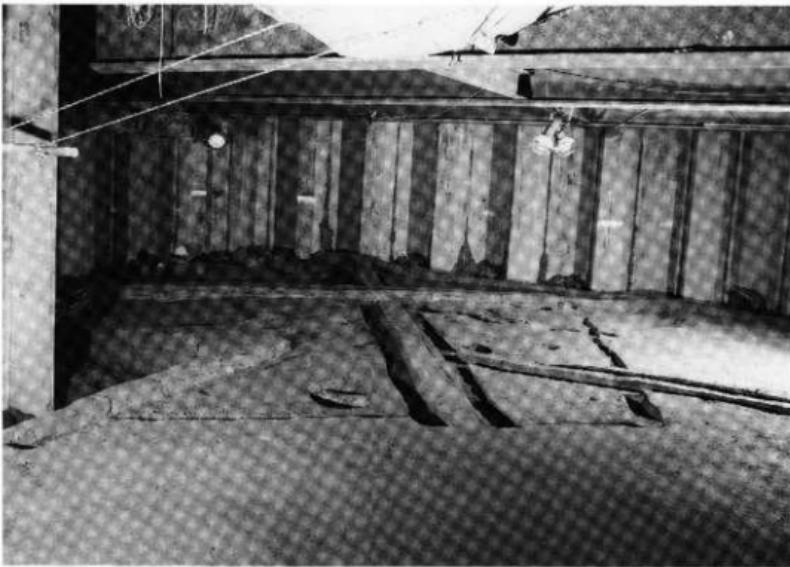
調査区北部下面(西から)



土壤(1) 遺物出土状況(北西から)



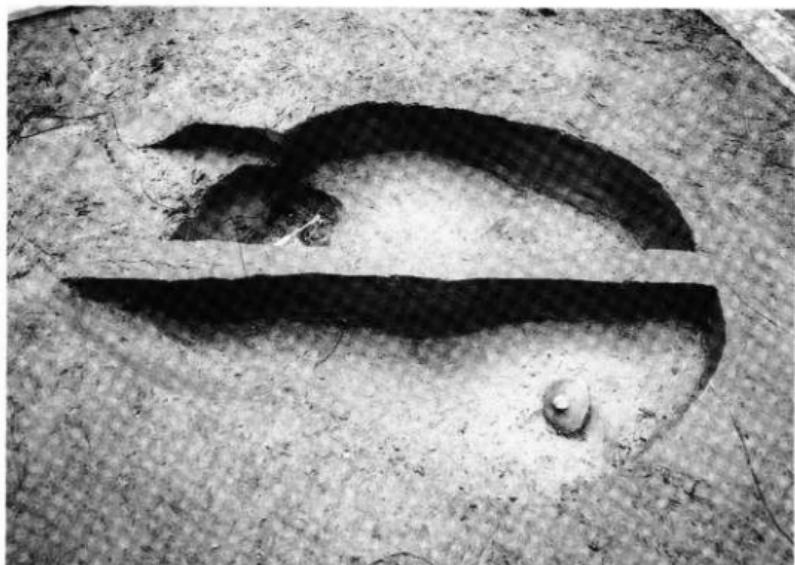
土壤(3) 遺物出土状況(北西から)



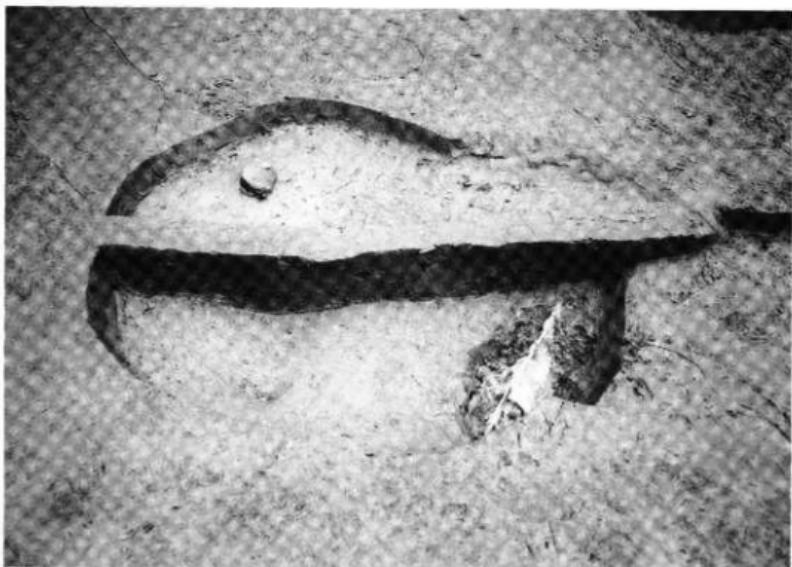
溝を伴う遺構(上面) (北西から)



同上 遺物出土状況(北西から)



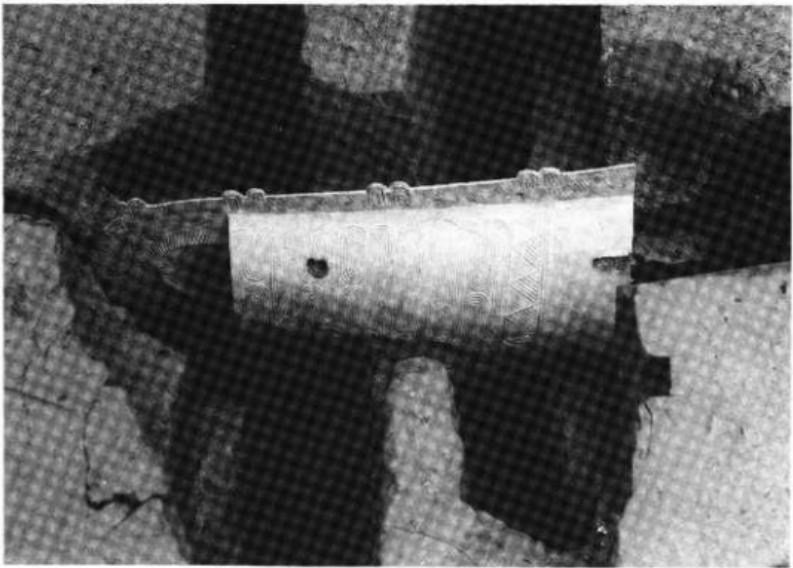
土壤(4)、銅鐸出土状況(西から)



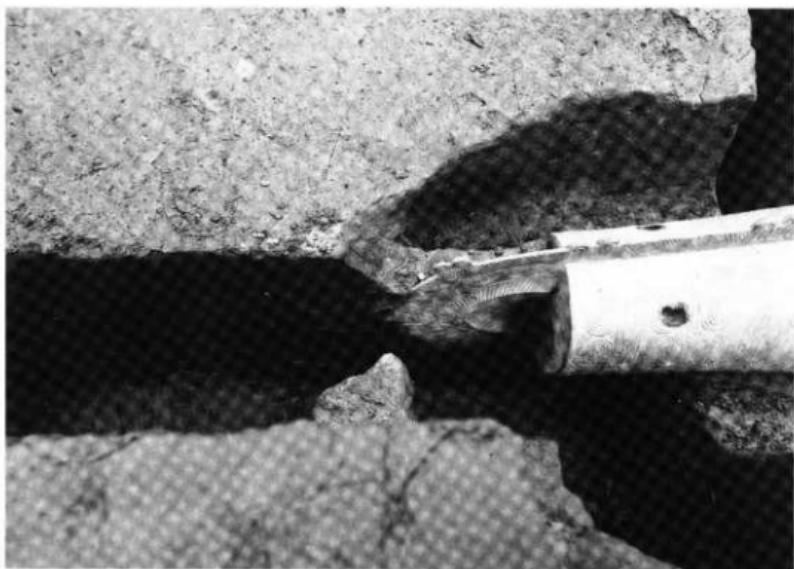
同上(東から)



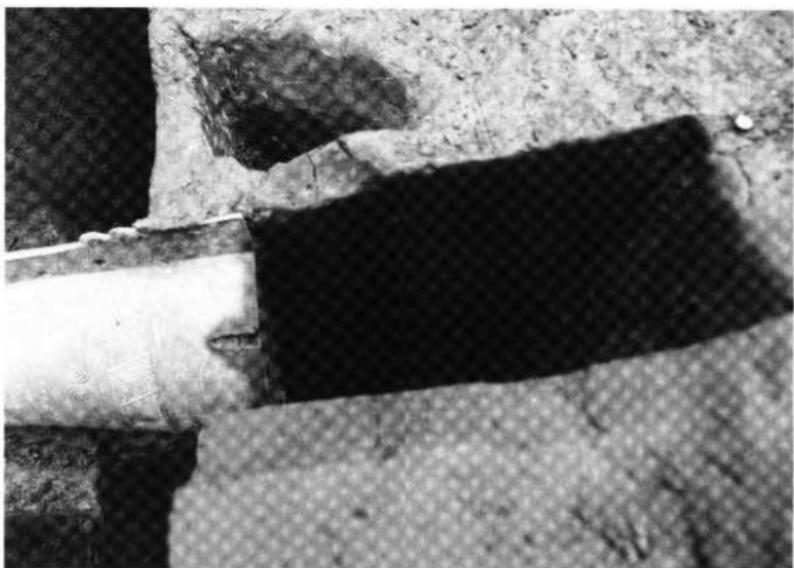
銅鐘埋納境内側振削（南西から）



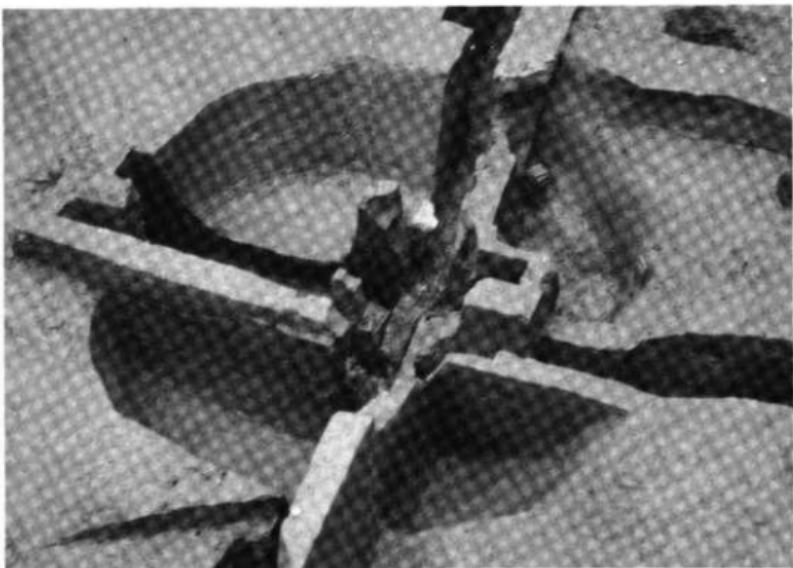
銅鐘埋納境内側完掘（北東から）



銅鑄埋納壠縱斷面(南東部—鉛側)



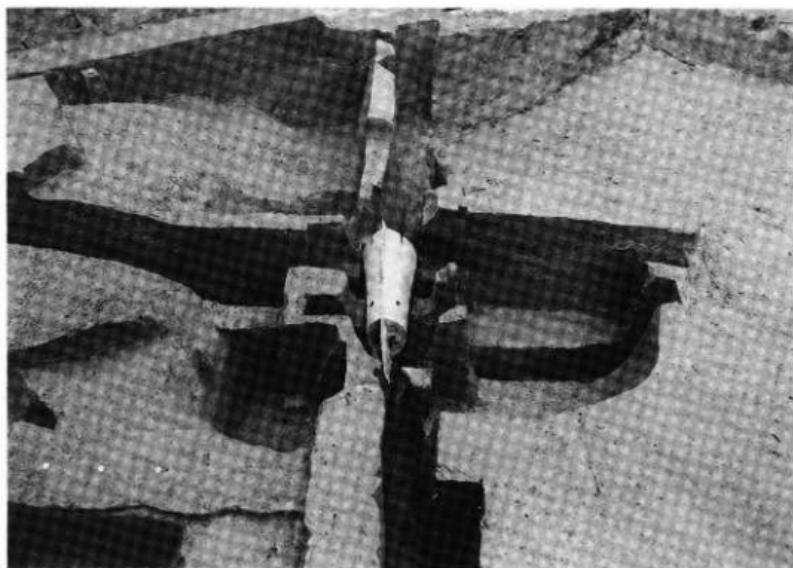
銅鑄埋納壠縱斷面(北西部—鉛側)



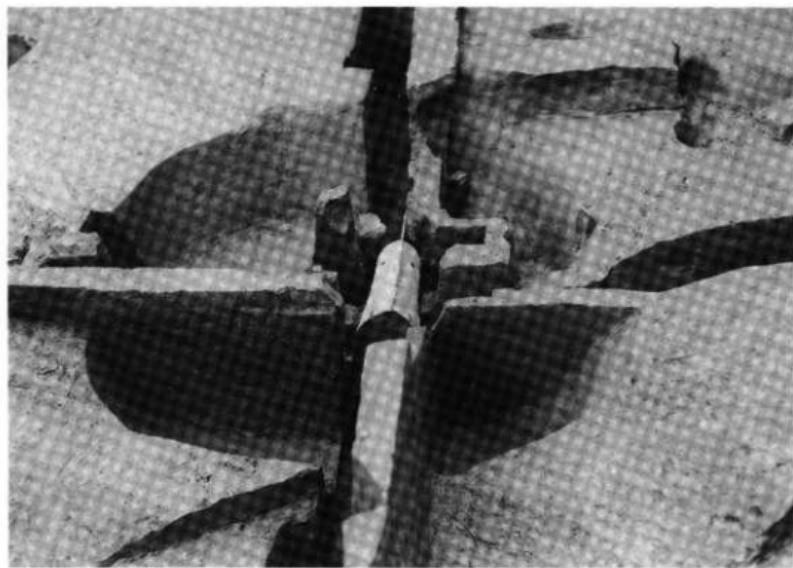
銅鐘埋納塚完掘(北西一据側から)



銅鐘埋納塚内銅鐘出土状況

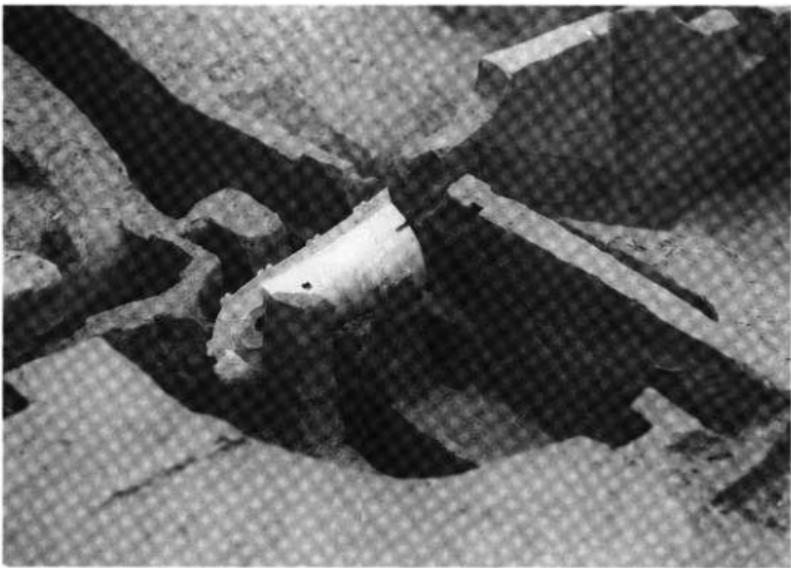


銅鐸埋納状況復元(南東から)

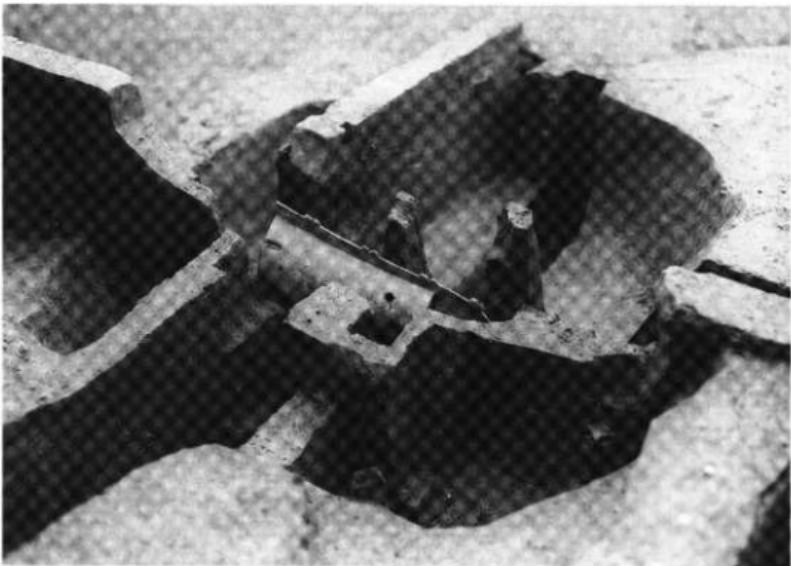


銅鐸埋納状況復元(北西から)

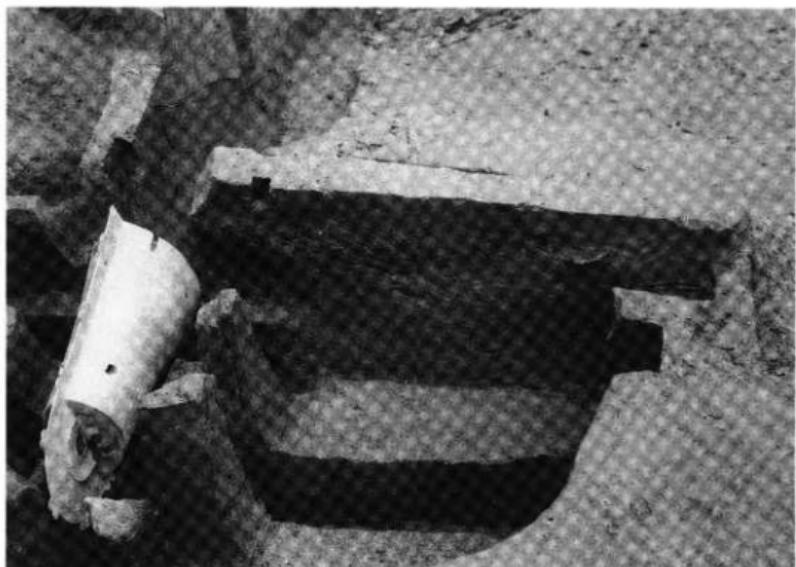
図版
10



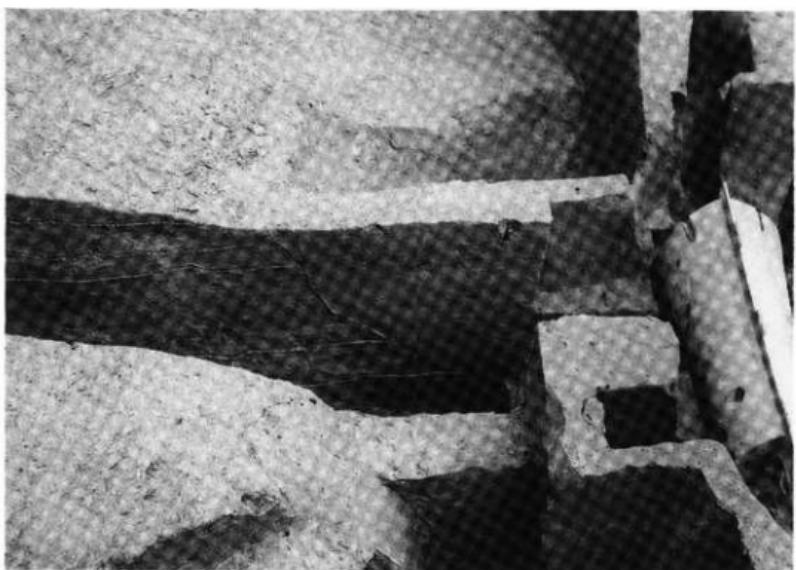
銅鐸埋納状況復元(北から)



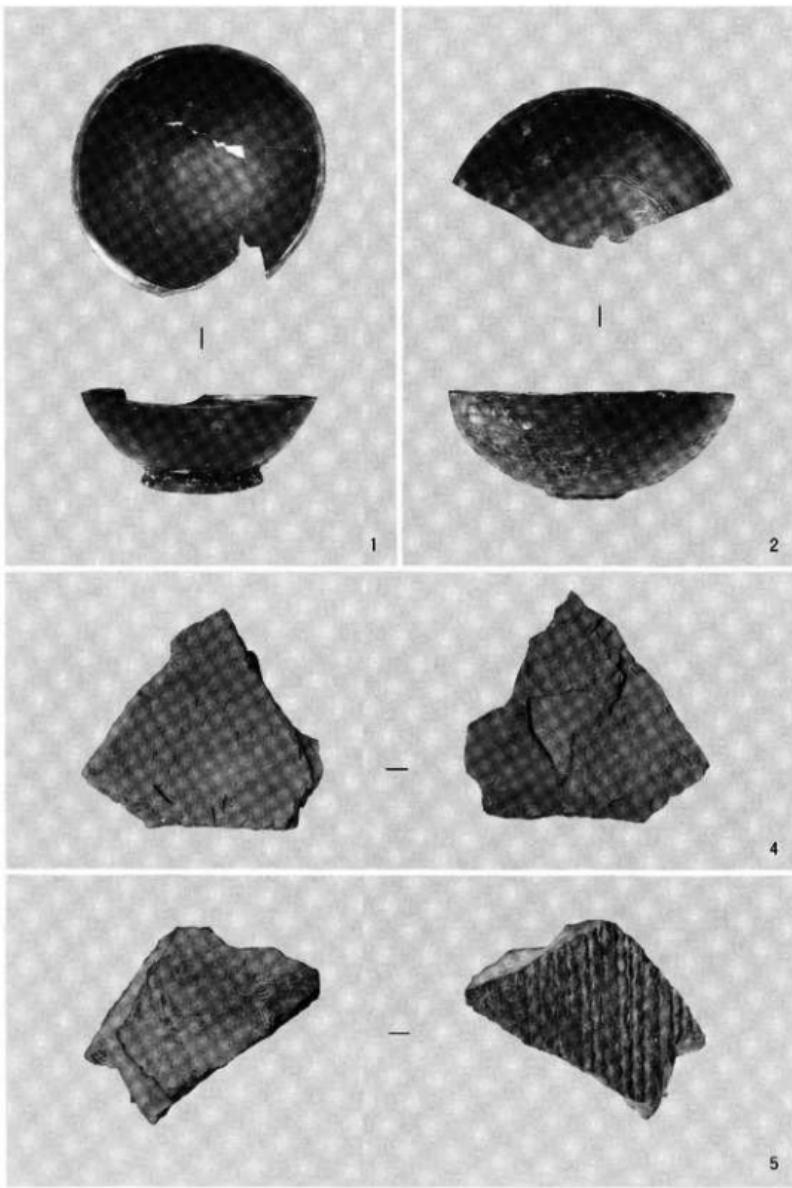
銅鐸埋納状況復元(南から)



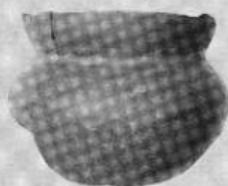
銅鍛埋納壙橫斷面北東側



銅鍛埋納壙橫斷面南西側



土壤(1)出土遺物



6



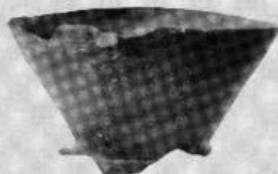
14



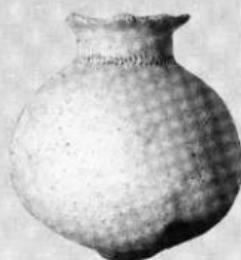
7



15



10

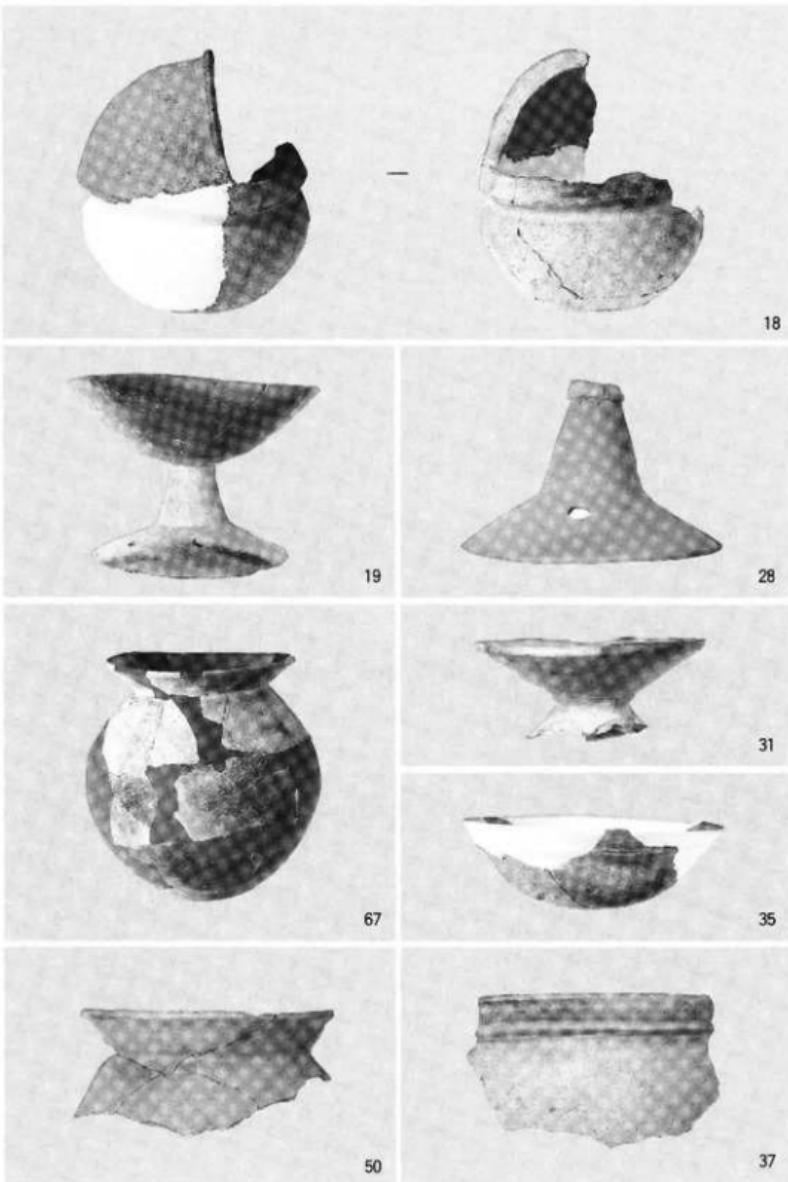


13



16

溝を伴う造構(上面)出土遺物-1



溝を伴う遺構(上面)出土遺物一2



41



56



47



59



48



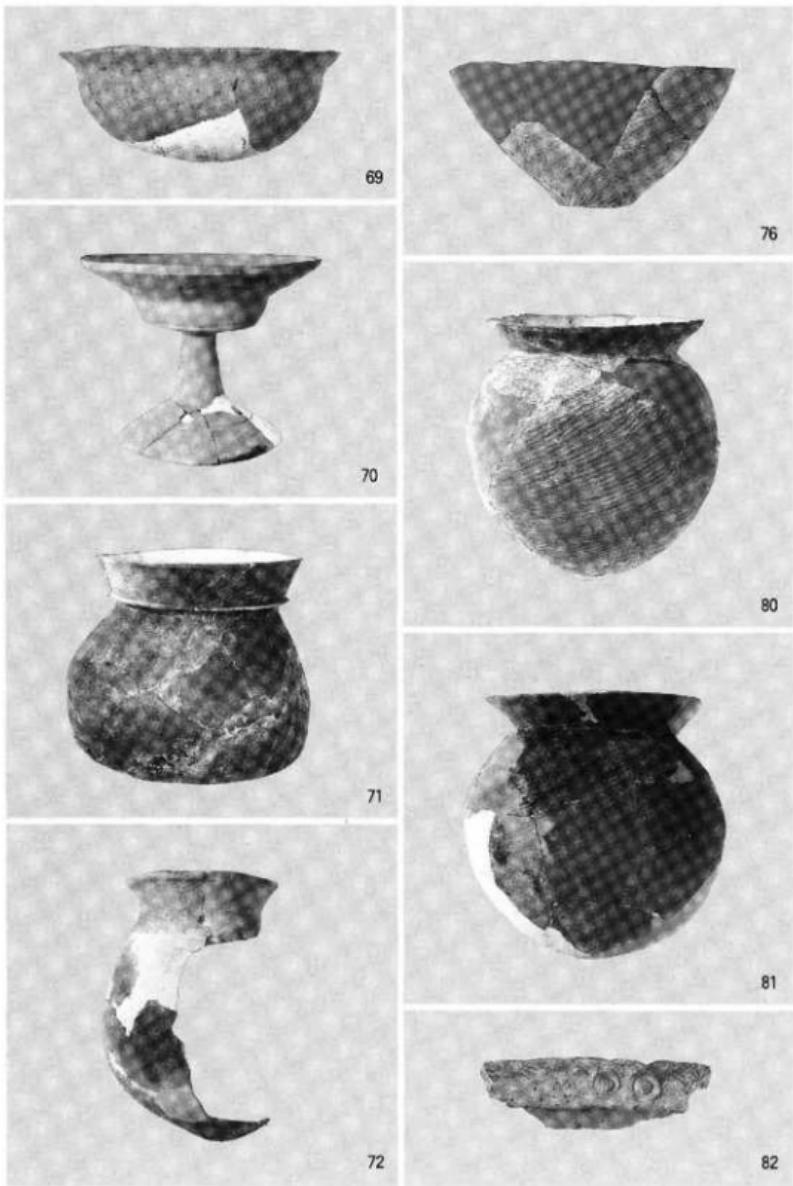
60



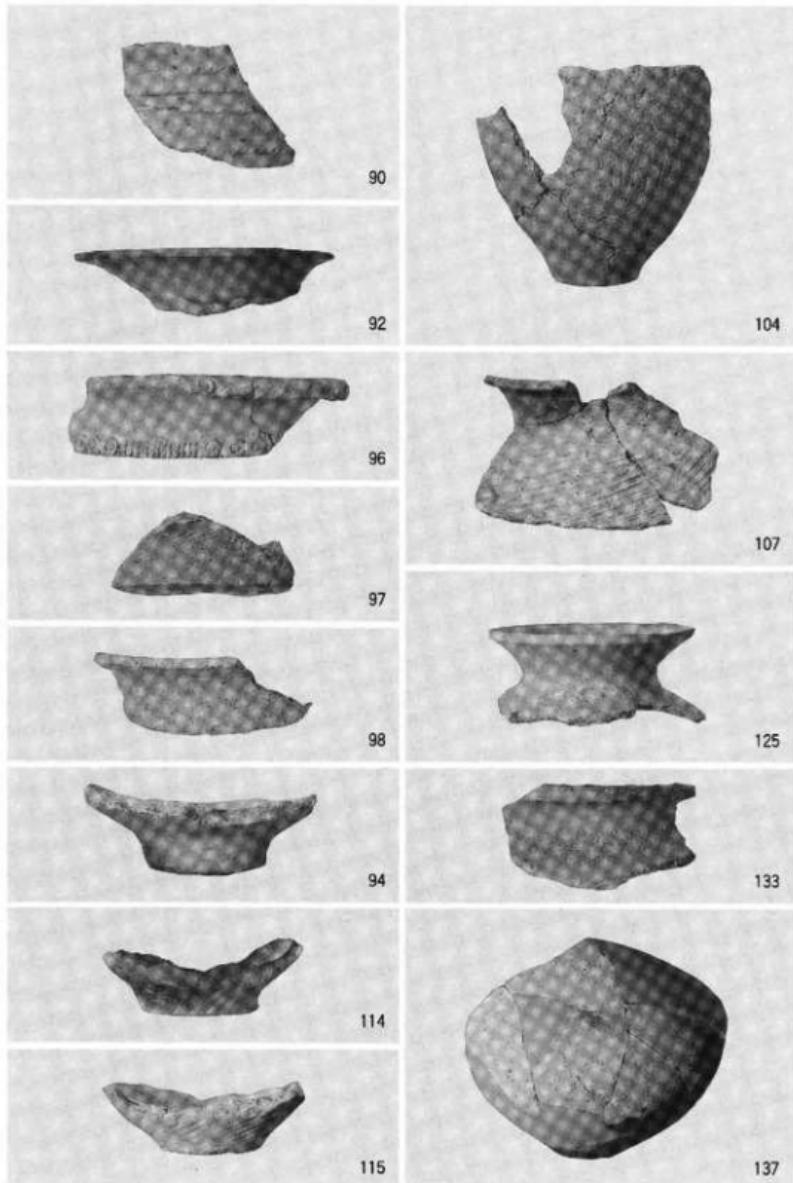
49



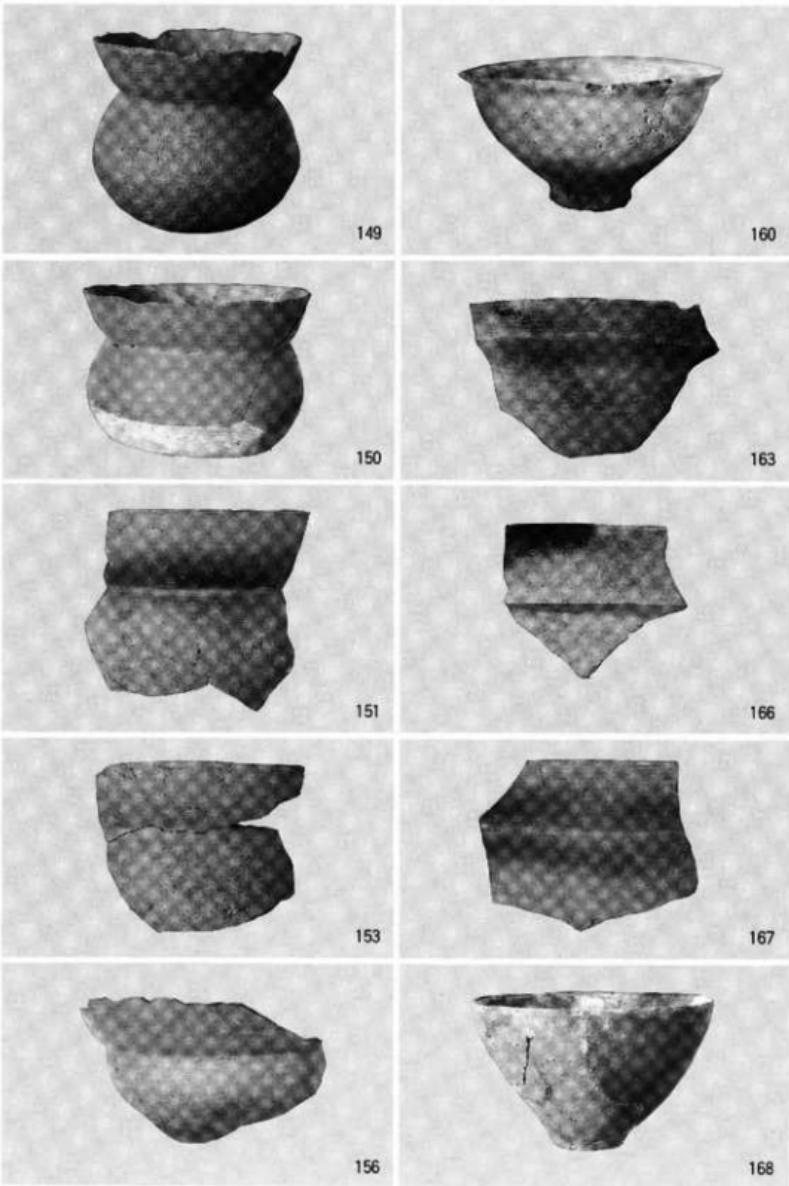
63



土壤(3)(69~71)、土壤(4)(72~81)、溝狀遺構(2)出土遺物(82)



落ち込み (90~115)、VI層出土遺物－1 (125~137)



VI層出土遺物－2



177



208



178



209



181



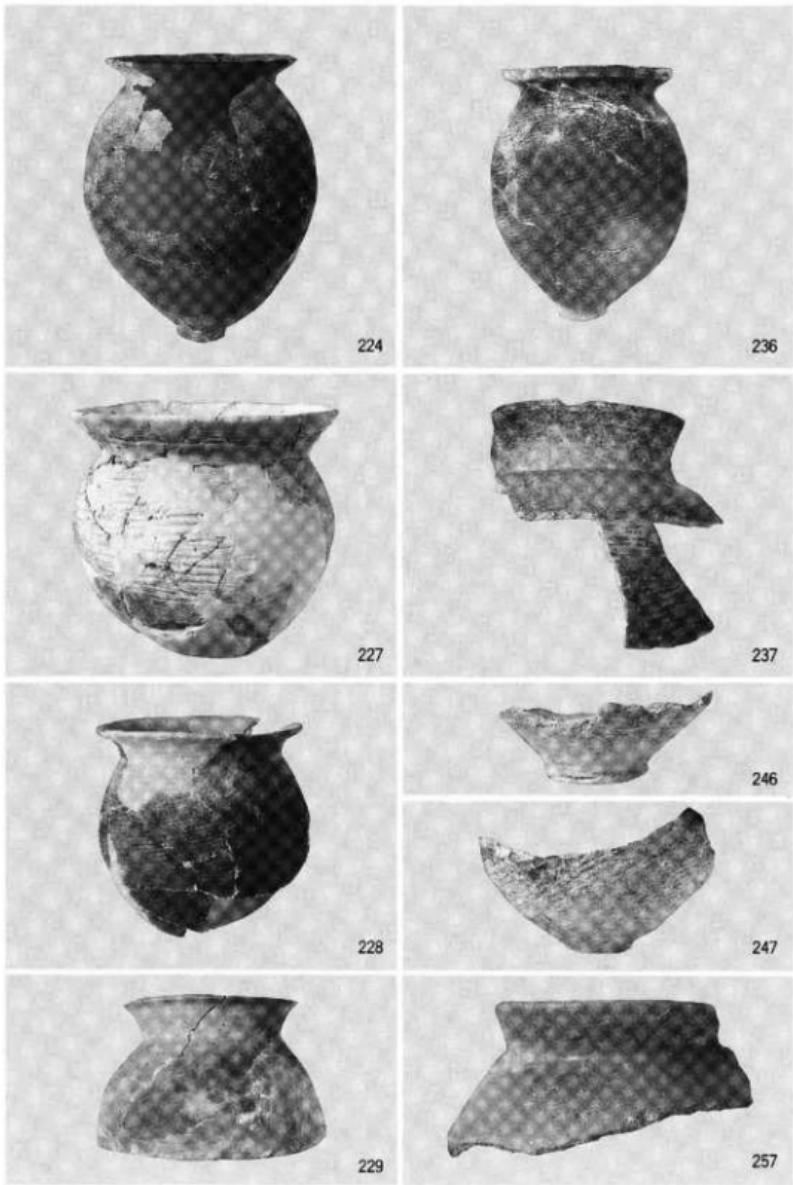
210



203



219





269



270



292



284



296



290



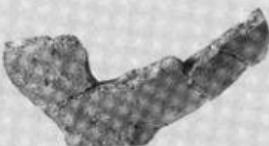
299



|



316



293



294

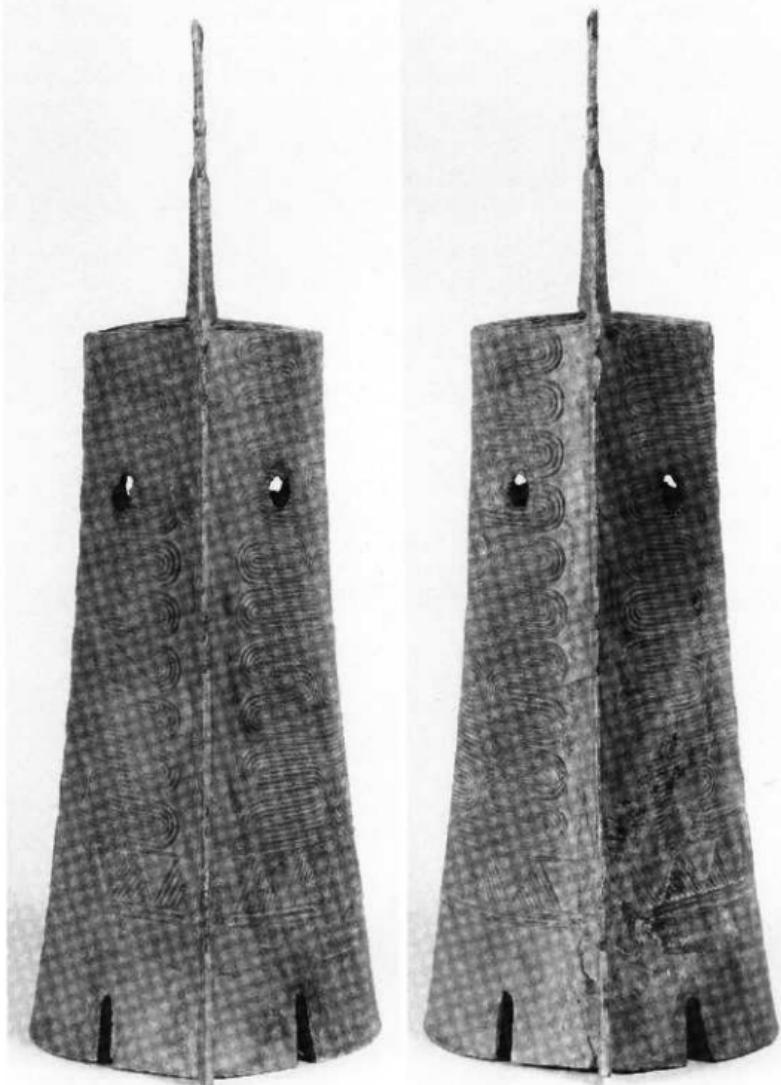
VI層出土遺物—5 (269~270)、Ⅷ層 (284)、Ⅹ層 (293~294)、X層、銅鐸埋納填出土遺物 (316)



銅鐘（A面）

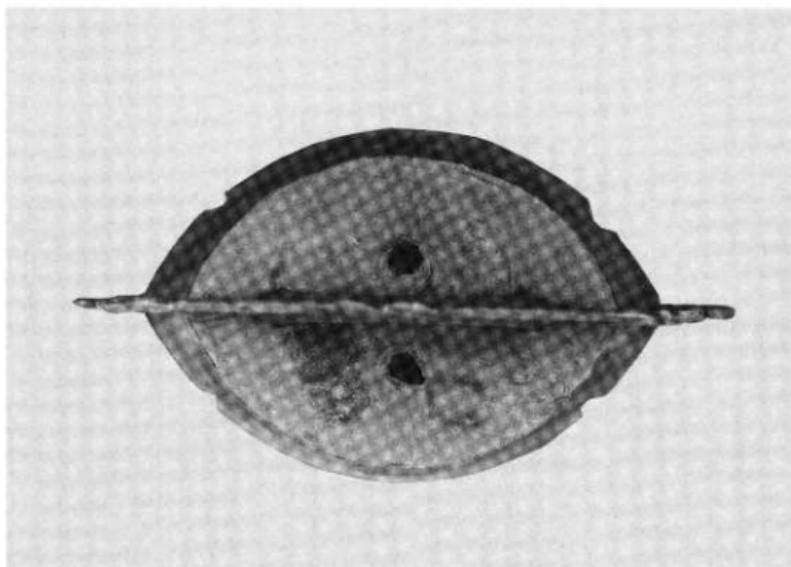


銅鐘(B面)

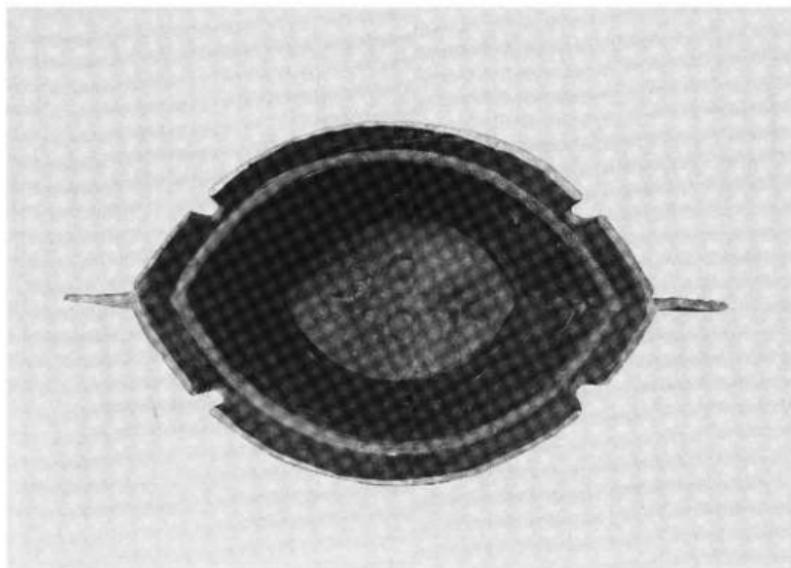


銅鐘側面(A面 | B面)

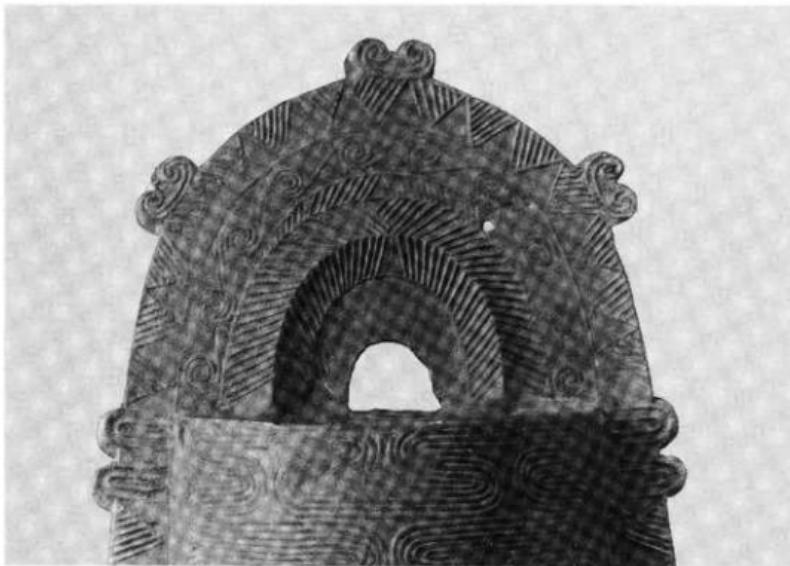
(B面 | A面)



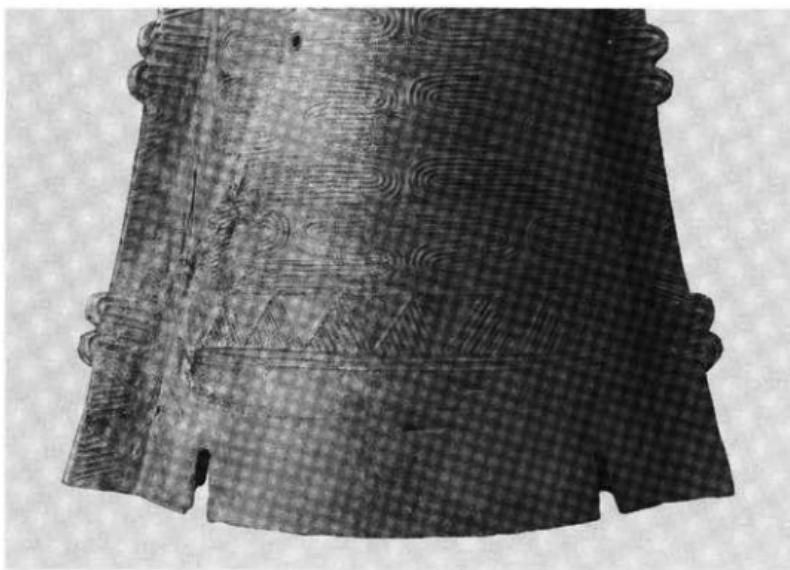
銅鐘舞面(A面／B面)



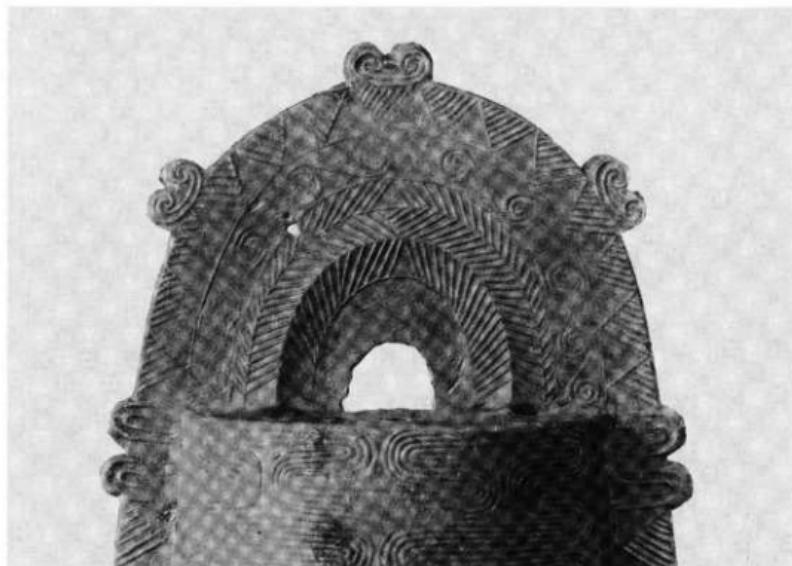
銅鐘内面(A面／B面)



銅鐸舞面 A 面鈕



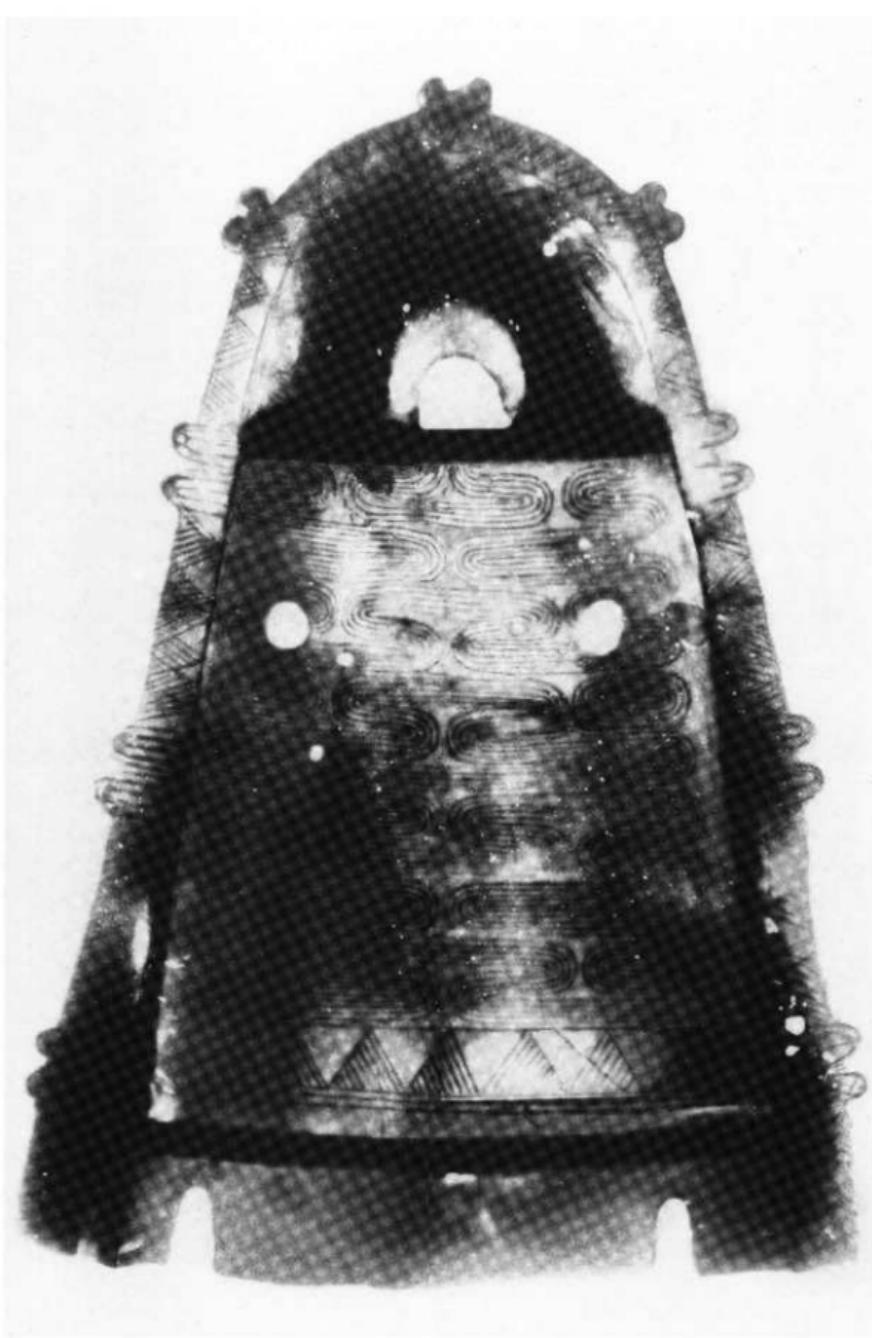
銅鐸內面 A 面鋸



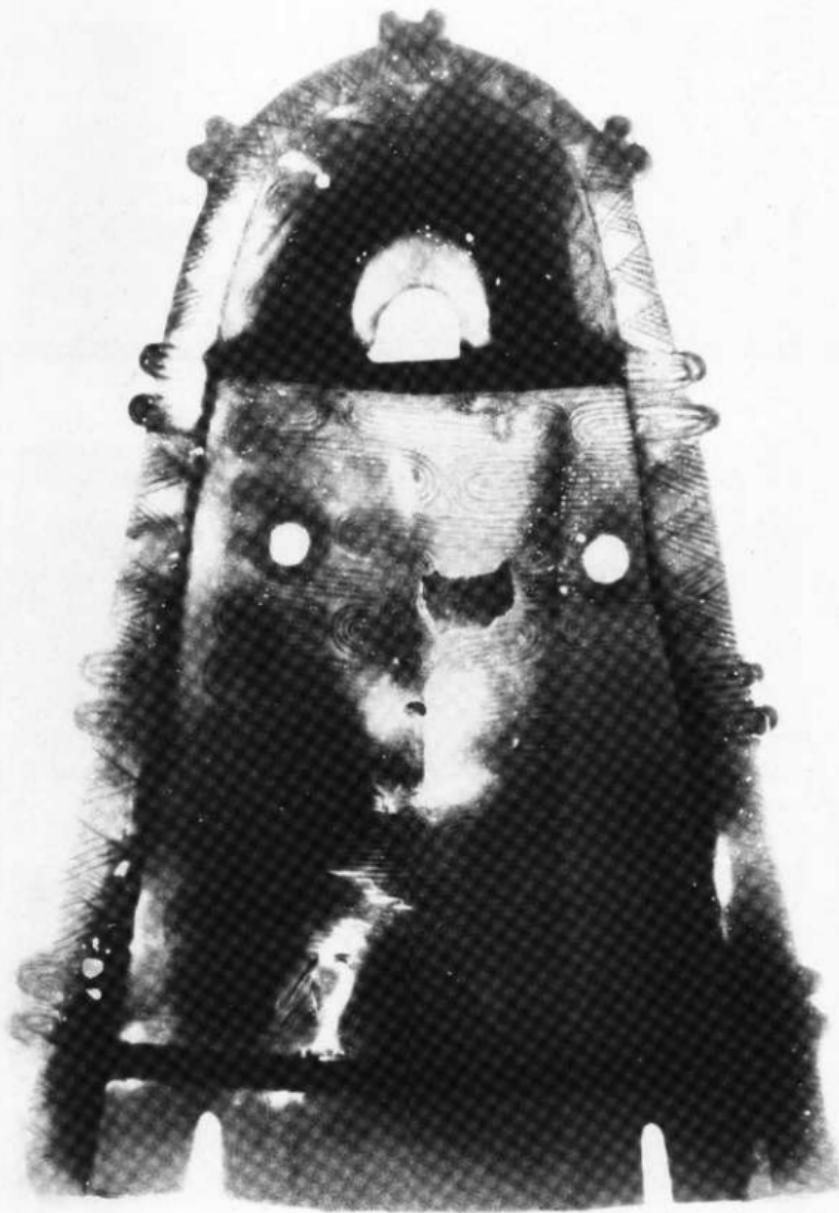
銅鐸舞面 B面鈕



銅鐸內面 B面鋸



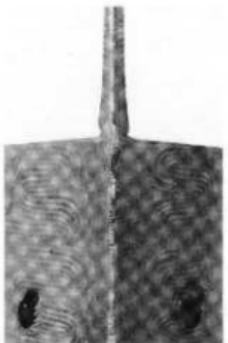
X線透過写真(A面) S=1:2



X線透過写真(B面) S=1:2



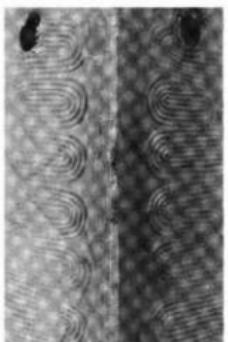
銅鐸細部 S = 1 : 2
A面右側耳(上段)



B面左側耳(上段)



(中段)



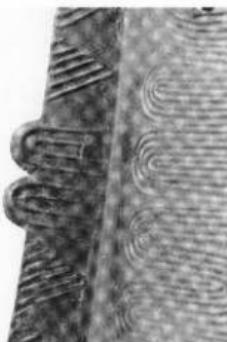
(中段)



(下段)

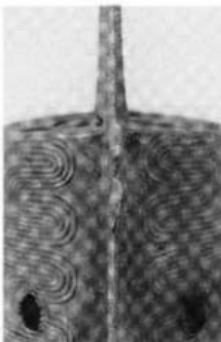


(下段)





B面右侧耳(上段)



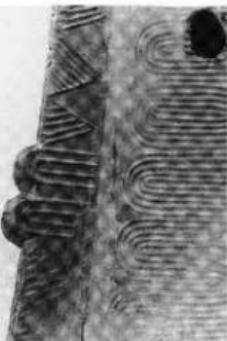
A面右侧耳(上段)



(中段)



(中段)

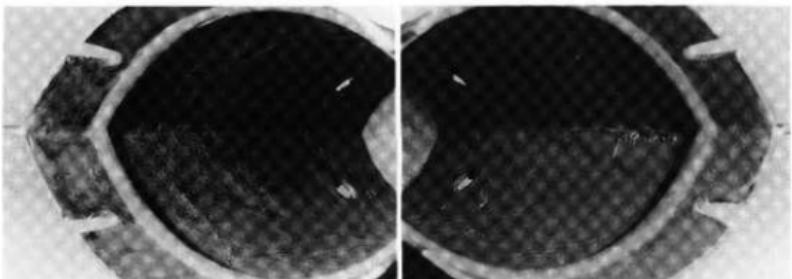


(下段)



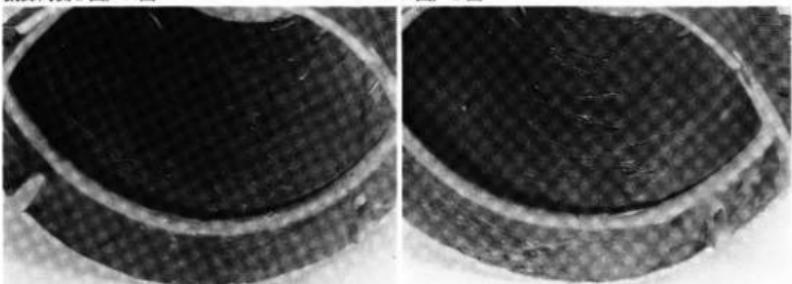
(下段)





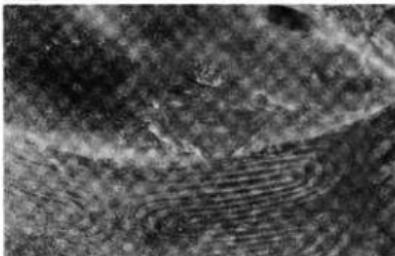
銅鋸內側B面/A面

A面/B面



A面

B面



補鑄5 1:1



補鑄A1 1:1

補鑄B1、B2 1:1

協力機関

奈良国立文化財研究所 大阪府教育委員会

徳島市教育委員会 岡山県古代吉備文化財センター

(財)大阪文化財センター (財)東大阪市文化財協会

お世話をになった方々 (敬称略)

石神 幸子 石野 博信 井藤 微 勝浦 康守

肥塚 隆保 小松原基弘 佐原 真 汎田 正昭

瀬川 健 高井悌三郎 田中 琢 難波 洋三

西山 要一 萩原 儀征 三木 文雄 (五十音字順)

(財)八尾市文化財調査研究会報告31

跡部遺跡発掘調査報告書

発行 平成3年3月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581 大阪府八尾市清水1丁目2番1号

TEL (0729) 94-4700

印刷 株式会社 近畿印刷センター

